国道8号線長浜バイパス
関連遺跡調査報告書

1971

滋賀県教育委員会

国道8号線長浜バイパス
関連遺跡調査報告書

1971

滋賀県教育委員会

210.2
M
61

序

滋賀県は数千年の昔から，日本国土の西と東を結ぶ交通の要衝として発展してきたが，その特性は現在にいたってもなお変わらない。今日，国鉄湖西線をはじめ国道８号線バイパス，同161号線バイパスなどが県内に建設されつつあるのも，そうした本県の重要な特性に対処するものと言える。しかしこのような大規模な工事の施行にあたっては，常にその計画範囲内に含まれる各種遺跡の取り扱いについて，種々問題となるものであるが，もちろんこうした意義のある新しい国土開発でさえ，祖国の伝統的文化遺産を破壊するようなことはできる限り避けなければならない。

昭和42年，建設省近畿地方建設局は地元長浜市の強い要望により，国道８号線バイパスの建設を決定した。そしてその決定後，当教育委員会は予定路線内に含まれる遺跡の分布状態を調査したが，その結果，遺物の散布地を含めて８カ所の遺跡を確認したのである。そのためこれら８遺跡の保存対策に万全を期したが，すでに長浜市によって先行取得されたバイパスの予定路線を変更することは困難をきわめ，これらについてはやむなく発掘調査を行ない，その記録を保存することになった。発掘調査は昭和45年度から３カ年計画で進めていくが，初年度は大江命氏を団長とする長浜バイパス北方遺跡発掘調査団，ならびに長浜市教育委員会各位と，柴田実，網干善教両先生の深いご理解とご協力のもとに，南方，南方東の両遺物散布地および川崎遺跡の３カ所の発掘調査を実施することができた。

本書は，この３遺跡の発掘調査の成果を収載し，公にするものである。これが多くの人々の参考となるところがあれば幸いである。なお，これを刊行するにあたって，調査団各位はもとより，関係各位に深甚なる謝意を表したい。

昭和46年３月

滋賀県教育委員会

教育長　西　川　良　三

目　　次

序

はじめに

長浜市およびその周辺の地形・地質の概要…… 3

Ⅰ　川崎遺跡・南方東遺跡…… 4

川崎遺跡の立地と地形…… 4

南方東遺跡の立地と地形…… 4

層序および遺物出土状態…… 4

遺　　構…… 6

遺物出土状態…… 7

Ⅱ　川崎遺跡出土遺物……11

むすび……40

Ⅲ　南方東遺跡出土遺物……41

むすび……44

Ⅳ　南方遺跡……45

南方遺跡の立地と地形……45

出土状態……45

出土遺物……46

むすび……49

Ⅴ　結　　語……56

発掘日誌（抄）……57

調査団名簿……58

挿　図　目　次

挿図１　長浜市およびその周辺の地形図…… 3
挿図２　川崎，南方東遺跡付近の地形図…… 4
挿図３　川崎遺跡，南方東遺跡グリット設定図…… 5
挿図４　川崎遺跡 G990 におけるピット実測図…… 6
挿図５　川崎遺跡第２地点杭状遺構実測図…… 6
挿図６　兵助の森東南の柱状残存遺物実測図…… 7
挿図７　川崎遺跡 G125 遺物出土状態実測図…… 8
挿図８　川崎遺跡第２地点の杭の出土状態…… 8
挿図９　川崎遺跡d136～d144の北南の地層断面図… 9
挿図10　川崎遺跡 f24～f13の北南の地層断面図……10
挿図11　川崎遺跡出土縄文式土器……11
挿図12　川崎遺跡出土水神平式土器……11
挿図13　川崎遺跡出土土器拓影……12
挿図14　川崎遺跡出土土器実測図……13
挿図15　川崎遺跡出土土器実測図……14
挿図16　川崎遺跡出土土器実測図……14
挿図17　川崎遺跡出土土器拓影……15
挿図18　川崎遺跡出土土器実測図及び
　　添付突帯布目圧痕拡大図……16
挿図19　川崎遺跡出土土器実測図……16
挿図20　川崎遺跡出土土器拓影……17
挿図21　川崎遺跡出土土器実測図……18
挿図22　川崎遺跡出土土器実測図……18
挿図23　川崎遺跡出土土器実測図……19
挿図24　川崎遺跡出土土器……20
挿図25　川崎遺跡出土土器実測図……20
挿図26　川崎遺跡出土土器実測図……20
挿図27　川崎遺跡出土土器底部……21
挿図28　川崎遺跡出土土器実測図……22
挿図29　川崎遺跡出土土器実測図……22
挿図30　川崎遺跡出土土器実測図……23
挿図31　川崎遺跡出土土器実測図……24
挿図32　川崎遺跡出土土器実測図……24
挿図33　川崎遺跡出土土器実測図……25
挿図34　川崎遺跡出土土器実測図……26
挿図35　川崎遺跡・南方東遺跡出土石器実測図……29
挿図36　川崎遺跡出土石器実測図……30
挿図37　川崎遺跡出土石器実測図……31
挿図38　川崎遺跡出土石器実測図……32
挿図39　川崎遺跡出土木器実測図……33
挿図40　川崎遺跡出土木器実測図……34
挿図41　川崎遺跡出土木器実測図……34
挿図42　川崎遺跡平鍬出土状態……35
挿図43　川崎遺跡出土木器……35
挿図44　川崎遺跡出土木器……35
挿図45　川崎遺跡出土木器実測図……36
挿図46　川崎遺跡出土木器実測図……37
挿図47　川崎遺跡出土木器実測図……38
挿図48　川崎遺跡出土獣骨……39
挿図49　川崎遺跡出土遺物……40
挿図50　南方東遺跡出土土器実測図……42
挿図51　南方東遺跡・南方遺跡出土土器実測図……43
挿図52　南方遺跡地形図……45
挿図53　南方遺跡グリッド設定図……45
挿図54　南方遺跡層序実測図……45
挿図55　南方遺跡井戸実測図……45
挿図56　南方遺跡出土土器拓影……46
挿図57　南方遺跡出土土器実測図……47
挿図58　南方遺跡出土土器拓影……48
挿図59　南方遺跡出土土器実測図……49
挿図60　Ｘ線回折図……55

図　版　目　次

図版１　発掘調査以前の川崎遺跡及び南方東遺跡遠景　同遺跡の発掘調査状況
図版２　発掘調査以前の南方遺跡遠景　同遺跡発掘調査の状況
図版３　南方東遺跡の東面層序　同遺跡土器の出土状態　同遺跡北壁における層序
図版４　川崎遺跡ピット　同遺跡土器出土状態
図版５　川崎遺跡における出土状態　同遺跡の層序
図版６　川崎遺跡の出土状態
図版７　川崎遺跡出土の弥生式土器その他
図版８　川崎遺跡出土の弥生式土器
図版９　川崎，南方東遺跡出土の弥生式土器
図版10　川崎遺跡出土の弥生式土器
図版11　川崎遺跡出土の弥生式土器
図版12　川崎遺跡出土の弥生式土器
図版13　川崎遺跡出土の土器の拡大写真　同遺跡出土の弥生式土器　同遺跡出土の土師式土器
図版14　川崎遺跡出土の弥生式土器及び土師式土器
図版15　川崎遺跡出土の弥生式土器
図版16　川崎遺跡出土の高坏形土器及び坏
図版17　川崎遺跡出土の土師式土器
図版18　川崎遺跡出土の土師式土器
図版19　川崎遺跡出土の須恵器
図版20　川崎，南方東遺跡出土の須恵器
図版21　川崎遺跡出土の石器
図版22　川崎遺跡出土の石器
図版23　川崎遺跡出土の木器類
図版24　川崎遺跡出土の木器類
図版25　丸木弓・木器（漁具柄）

はじめに

琵琶湖の東に古くから城下町として，また港町として発達した長浜の町並，すなわち現在の長浜市は，姉川水系を中心とした氾濫原であり，肥沃な沖積平野の中に位置している。

この湖北地方には，醍醐遺跡・番の面遺跡などの縄文式時代の遺跡を始め，市内には大辰己遺跡，鴨田遺跡等の弥生式時代の代表的遺跡が知られている。その他古墳及び古墳時代の遺物，また条里制に関係のある地名，地割等が残る地域である。畿内と北陸，東海両地方を結ぶ分岐点である。市外には水田が開けていて，今回その水田の中に国道８号線のバイパス建設工事が行なわれる。その建設予定地内における遺跡分布調査が昭和45年４月に行なわれ，その遺跡分布調査報告書「国道８号線長浜バイパス関係遺跡分布調査」が，滋賀県教育委員会によって出されている。

上記の調査報告書に基づき，今回の調査が行なわれるに至ったのである。

昭和45年11月に長浜市教育委員会より，調査依頼があり，その後打合せを行い，12月４日に滋賀県教育委員会の関係者及び長浜市教育委員会と発掘調査について協議し実施したのである。調査は，川崎遺跡，南方東遺跡，南方遺跡の三遺跡であって，この内，川崎遺跡と南方東遺跡は隣接している，発掘の結果において両遺跡の性格は区別されるものでなく，南方東遺跡においては，川崎遺跡の接点で，わずかの遺物が出土している。

次に南方遺跡は，遺物包含層も浅く，遺物の土器は全て小破片が出土したに過ぎない。当遺跡内の井戸についても内部を調査したが遺物は全く見られなかった。川崎遺跡は大別して二地点に遺物が認められた（大井川の北を第１地点とし南を第２地点とした）。遺構としてはピット，柱等が知られた。特に川崎遺跡の馬車道に近い部分に明治初年まで川が曲って流れていた事が村絵図に依って知られ，杭状の遺構はそれと関係があるのではないかと考えられる。

本調査は冬期に入り，湧水と寒さに見舞われたが，降雪が例年になく少量で好天候に恵まれ，調査は３月に終了した。また調査に参加された県教育委員会の川那辺正雄氏を始め調査補助員，協力者，および関係諸団体の諸氏，柴田実先生，網干善教先生に色々とご教示を賜った。なお，県文化財保護課丸山竜平技師には現地で教示をうけ，更に遺物保存館にて前記の分布調査時の資料を見せていただいた。この外多くの方々に色々と御配慮を賜わった。本報告書の上梓に当って改めて御礼を申し上げます。（大江）

長浜市及びその周辺の地形・地質の概要

(1) 沖積低地

長浜市から南の近江町，北のびわ村，虎姫町，浅井町につづく広大な平野は，姉川を始め，高時川，田川，草野川，天野川などの各河川の沖積作用によって形成された，扇状地性の沖積平野である。永久寺から大戌亥，下坂中へつづく低湿地や南小足から宮司へかけての低地，榎木，口分田から西南につづく低地などはかつての姉川の旧河道にあたっていると思われる。

このような低湿地に対し，姉川が現在のような流路をとる前に，上流から運搬してきた土砂，礫などを堆積した微高地が各地にみられ，現在の集落がこの位置に立地する場合が多く，その周辺には畑がみられる場合が多い。また，横山丘陵の東には山東町から伊吹村にかけて沖積低地が分布している。この沖積低地のなかには清滝層や醒ケ井層などから成る岩曽山（260m），源氏山（228m），愛宕山（209m）などがある。

(2) 横山丘陵（鳥羽上地塊）

長浜市の東部から南東部をしめる低山性の山地で，山東町，近江町などとの境をなしている。北は姉川にのぞむ竜が鼻から南は天野川にのぞむ東高尾まで南北およそ8キロメートルの地域をしめている。

北部は輝緑凝灰岩を主とし，石灰岩レンズを含む醒ケ井層と粘板岩，チャートを主とし細粒砂岩を少量含む石田層によってしめられている。中部から南部にかけては，上記の醒ケ井層，石田層のほかに，主として粘板岩やチャートから成る清滝層によってしめられている。また西部のチャート層は点々と沖積平野の中に島状に分布し，七つの岡といわれ，この地域の単調な地形に変化を与えている。（四面岡山158.4m，田村山138.5m，加田山，黒岡山，男岡山，中岡山，姫岡）

（鹿野）

挿図1　長浜市およびその周辺の地形図

1：20,000

I　川崎遺跡・南方東遺跡

川崎遺跡の立地と地形

本遺跡は，長浜市川崎の北西約2kmの地域にほぼ北北西から南南東に向かって位置している。

遺跡のほぼ中央を遺跡に直交するようにして，東北東から西南西に大井川が流れ，この川に沿った地域がやや低く，北と南にやや高くなっている。また，この遺跡の北西端にあたって位置する「兵助の森」は長浜平野の各地にみられる湧水のある低湿地が今なお未墾地として残されている。この「兵助の森」から細流が西南西に流れ出している。以上のようにこの遺跡は，起伏の少ない扇状地性の沖積平野のなかのやや低湿な地域に位置するものである。

挿図2　川崎・南方東遺跡付近の地形図

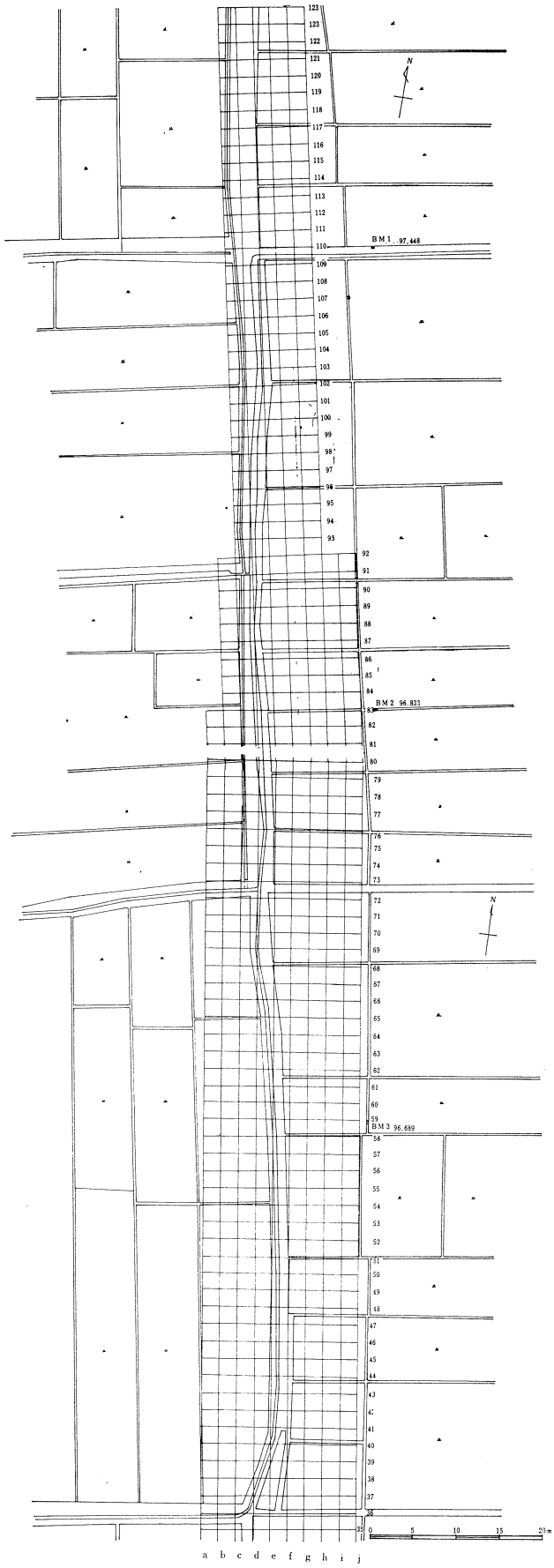
南方東遺跡の立地と地形

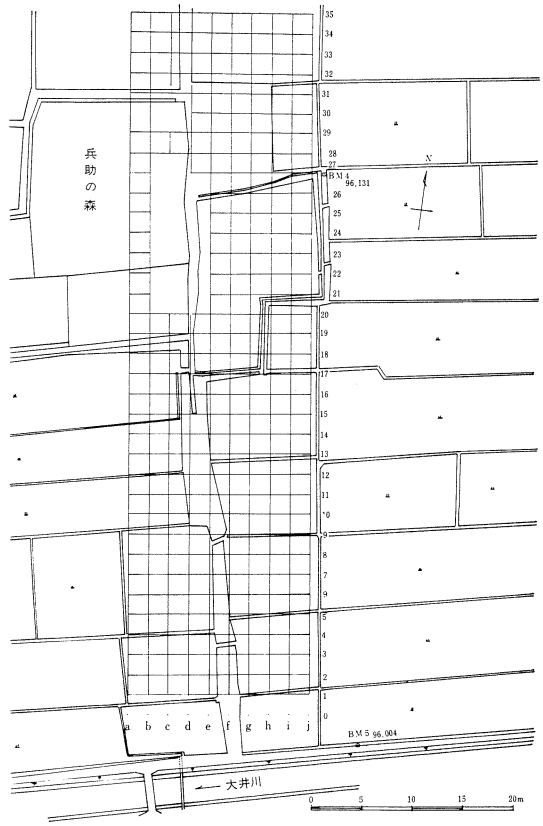
本遺跡は，前記川崎遺跡の北北西にあたり，川崎遺跡からつづいて南南東から北北西にかけ約300mにわたる地域をしめている。殆んど目立った起伏はなく，川崎遺跡からつづくゆるやかな北北西への僅かな高まりをみせたところにこの遺跡がある。そのため南部がやや低く，北部がやや高い。この低い南西部に前記の「兵助の森」がある。　　（鹿野）

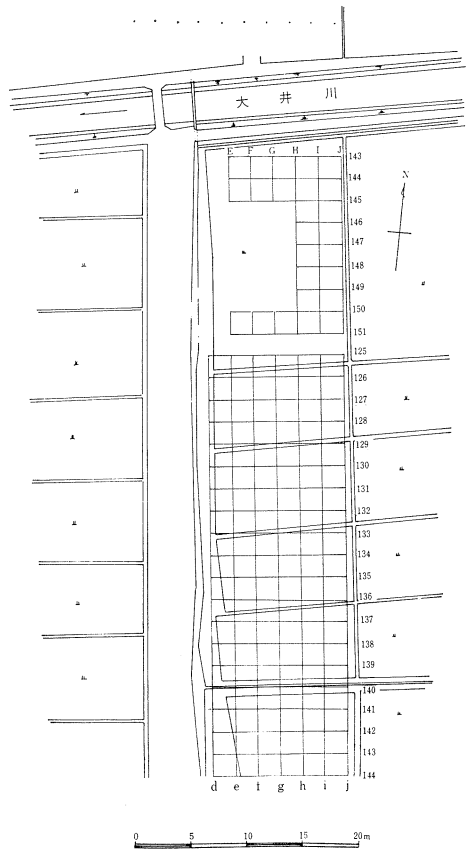
層序および遺物出土状態

層序と出土遺物の関係を見ると，第1地点では先ず大井川の北方，兵助の森の手前で，挿図3，g13の地層の地点より傾斜を示しながらf21では深くなりその部分が沼状を呈していて，その部分には葦，その他の水草が繁茂していたことが発掘当時の所見に依って知られる。この含粘土質褐色土層の認められる地点は古くより汁田と呼ばれていて[註1]，湿田であったことが知られる（沼状をなしている）。この層より土師式土器，須恵器，陶器類が混同して出土したのであり，兵助の森の東では砂層が北に向いて上がり，更に南方東遺跡になるf29～f30では砂層が北に向いて下り，その部分は粘土混りの含粘土質黒褐色土層があり，その下に微砂層があり，更に砂礫層になり，その微砂層，砂礫層中より須恵器片が出土し，その層では東西に地下水が流れていることが知られた。それより北に砂層が上りその上が青色粘土層になり，その上部は含粘土質黒褐色土層が僅に認められ表土に続いている。この地点より更に北は砂礫層の上に青色粘土層があり，その上に耕作土層が認められる。この地点より北方は表土層下に青色粘土層が全て認められ，従って表土層中には磨耗した微小破片の土器が僅かに出土した程度である。この地点の粘土層は良質で近来も瓦の原料として採土された地点である。

挿図3　川崎遺跡・南方東遺跡グリット設定図







第２地点即ち大井川より南に於ては，耕作土層の下に含粘土黄色土層があり，その下に灰青色粘土層または，地点によっては灰青色微砂粘土層が認められる部分の下層は砂礫層となっている。然しｄ136附近より挿図９に見られる如く耕作土層下に含粘土質茶褐色土層があり，この層は南に傾斜を示しｄ139では下層が微砂含有黒色粘土層になり，更に南ｄ143では砂礫層が上っている。遺物はこの腐植有機物層より多量に出土したのである。（大江）

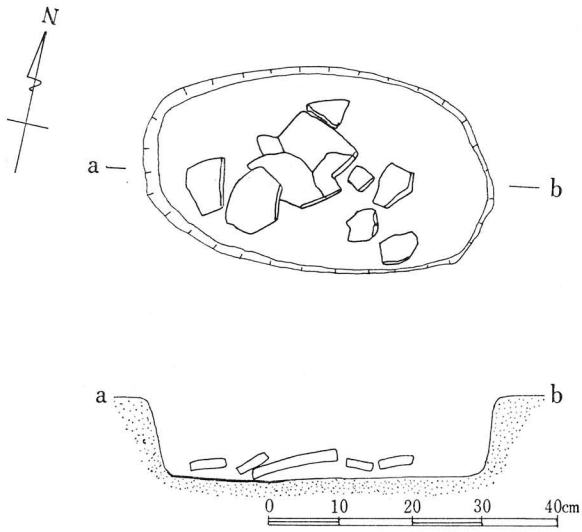
註１　湿田のことをこの地方では汁田と呼ばれている。

遺　構

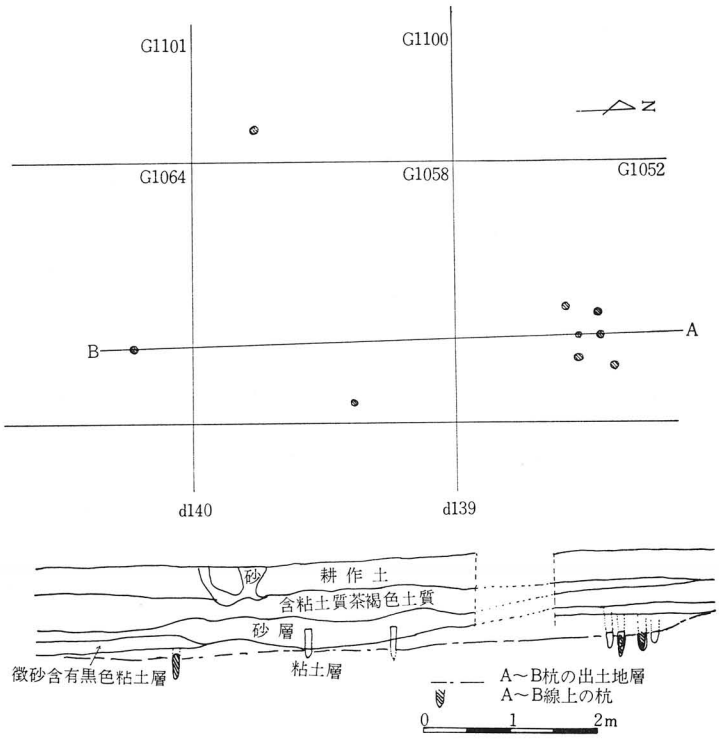
遺構は，Ｇ990の地点（h126）にピットが認められた。これは表土耕作土層下に東西に約51㎝南北に約29㎝，深さ約11㎝の楕円形のピットが認められ，ピット内よりは甕の破片が出土したのである。

次にＧ1064，Ｇ1058，Ｇ1052の地点に杭が挿図５のように認められ，その内，１本の杭は粘土層中にあり，その上部は同じ粘土層でも微砂混りの粘土層であり，その杭の下部は粘土層に達している。挿図に見られるように砂層及び腐植土粘土層が傾斜を示す点に６本の杭が認められ，農道として使用されている路の部分までを拡張して発掘をしたのである。その部分Ｇ1100では１本の杭が粘土層中に認められたのである。その外Ｇ1058及びＧ1064でそれぞれ１本認められた。杭の直径は約５～７㎝，長さ約20～50㎝の残存部で上部が磨耗していた。また先端部がけずられ，その周囲が掘込まれたものではなく，粘土層の中に完全に打込まれていた。

挿図４　川崎遺跡Ｇ990におけるピット実測図



挿図５　川崎遺跡第２地点杭状遺構実測図



凡例

文中挿図のＧ1100はグリット番号である。

ｄ140とあるのは，グリット設定図にあるｄは縦の線，140は横の線の番号である。

兵助の森の南断面図ｆ24～25の微高地になる部分に表土層下約40㎝下の砂礫層より２カ所に柱状の直径約13㎝，長さ35㎝～40㎝のものがあり，同様なものの痕跡が１カ所認められた。

遺物出土状態

川崎遺跡においては兵助の森の東南の地点と大井川南の馬車道北の地点に遺物が集中しているので，大井川を中心にして北と南に大別して考察すると，中でも大井川南の馬車道北に明治18年の村絵図によると，現在の川が曲流していて，その地点を中心にして遺物が多量に出土したのであり，断面図でも明確にその地層が傾斜を示しており，その地点に流木等が認められた。またこの部分の北面に挿図５に知られる様に杭の残存がみられた。特に畦のあった地点に畦の下に土器片が認められた。１カ所ににピットが認められ，そのピットの内部に甕の破片が出土している。又大井川より北の地点では兵助の森の南の地点に砂礫層がｆ13から地層が傾斜を示し最深部では表土より約200㎝に及び，表土下の有機物堆積層は葦等が繁茂していた事が知られた。また，小枝の類が流入されている状態が認められた。これらの有機物堆積層中に土師式土器，須恵器，梯子等が出土したのである。特にＧ125との部分の小礫層が傾斜をなす部分では，小形の丸底の完形土器及び高杯形土器が，その礫層の傾斜にそって出土した(挿図７)。

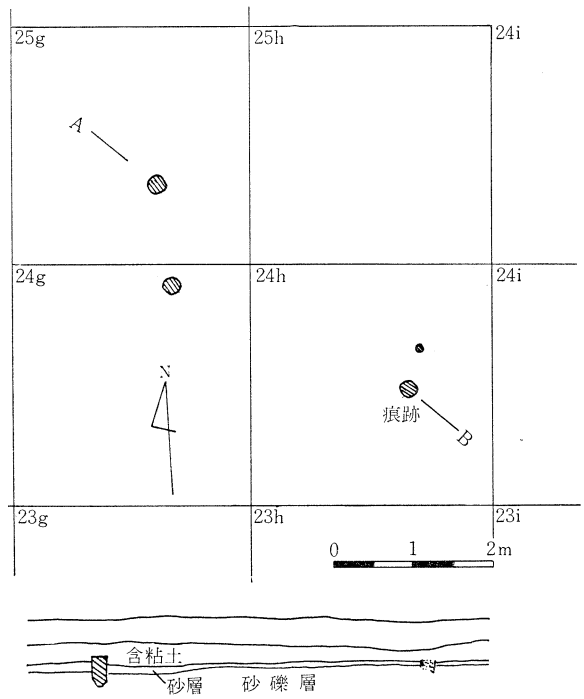
兵助の森の東部に畑地が残されていて，その部分の有機物層の下に砂礫層があって，表土より200㎝下部には東北から西南にかけて多量の地下水の流れがありその下層に須恵器片が認められた。

また，馬車道北のＧ1058付近を中心として９個の杭状遺構が認められた。

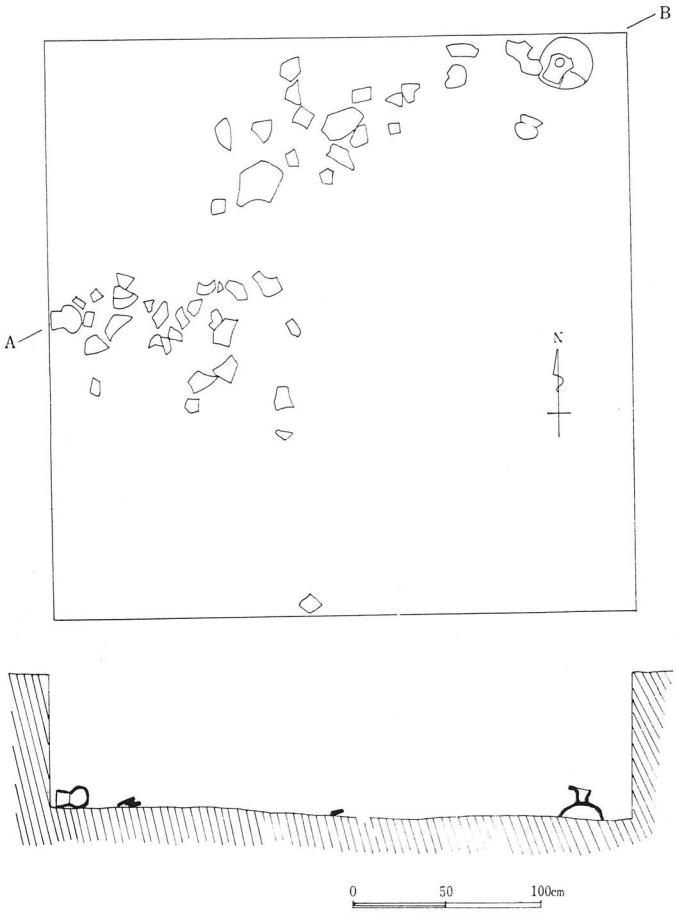
次に石器は，先ず大井川より北の第１地点では，表土層でＧ71の地点より磨製石斧一点及びＧ736の地点（南方遺跡）で表土層より砥石一点が出土したのみである。大井川より南の第２地点で石鏃，磨製石斧，打製石斧，剝片石器等が有機物堆積層より出土した。また木器類ではこの地点では，木碗，丸木弓，平鍬，その他のものが同じ層より出土している。主なる出土遺物のレベルは別表の如くである。

南方東遺跡は，地名の上で区別されているが，実際に発掘の結果では，南方東の地点は大部分が耕作土層下に粘土層になり，遺物の磨耗した小破片が小量流入しているのみであり，ただ川崎遺跡の第１地点の隣接地点は，先に述べた兵助の森の東部に残る畑地の部分の約200㎝下部と，その附近グリット約60㎝程の粘土質有機物層の部分より，須恵器及び小量の弥生式土器が出土したのみである。（大江）

挿図６　兵助の森東南の柱状残存遺物実測図

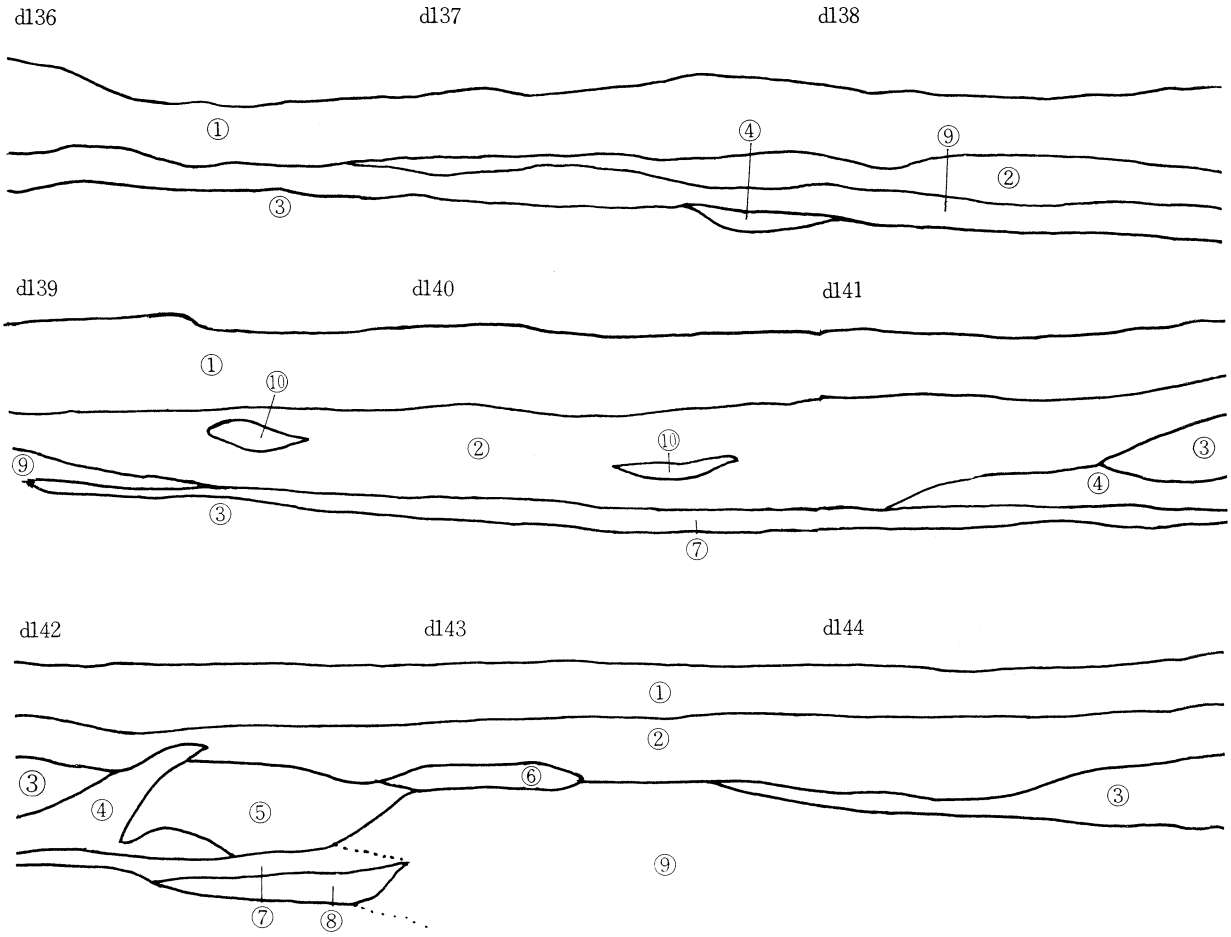


挿図7　川崎遺跡 G125 遺物出土状態実測図

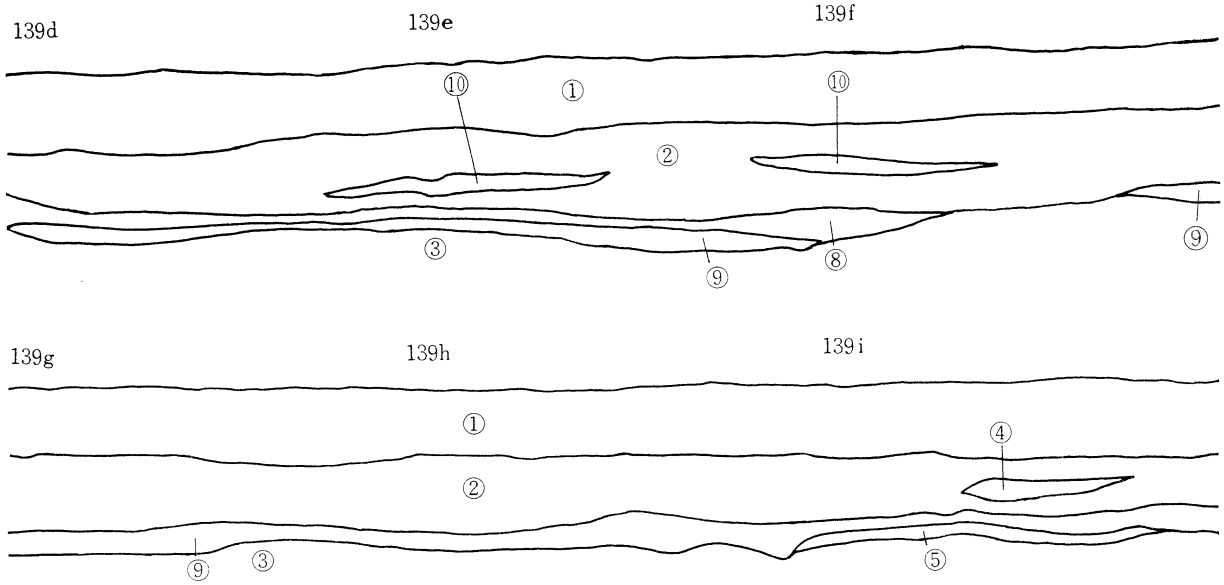


挿図8　川崎遺跡第2地点の杭の出土状態

挿図9　川崎遺跡d136～d144の北南の地層断面図



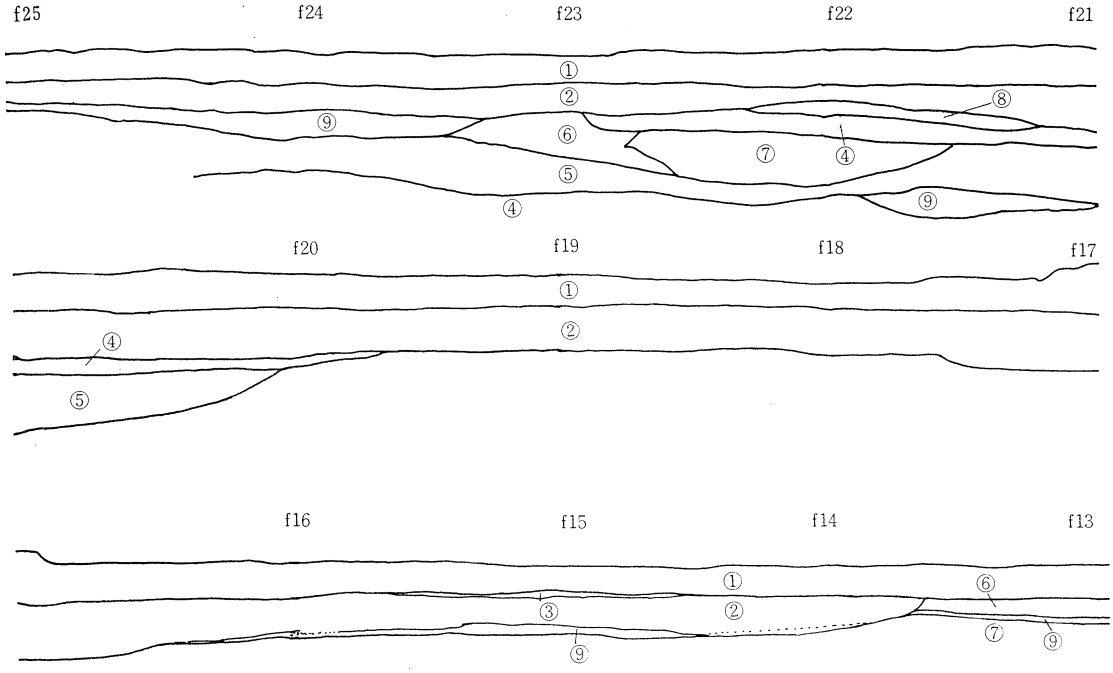
139b～139i の西東の地層断面図



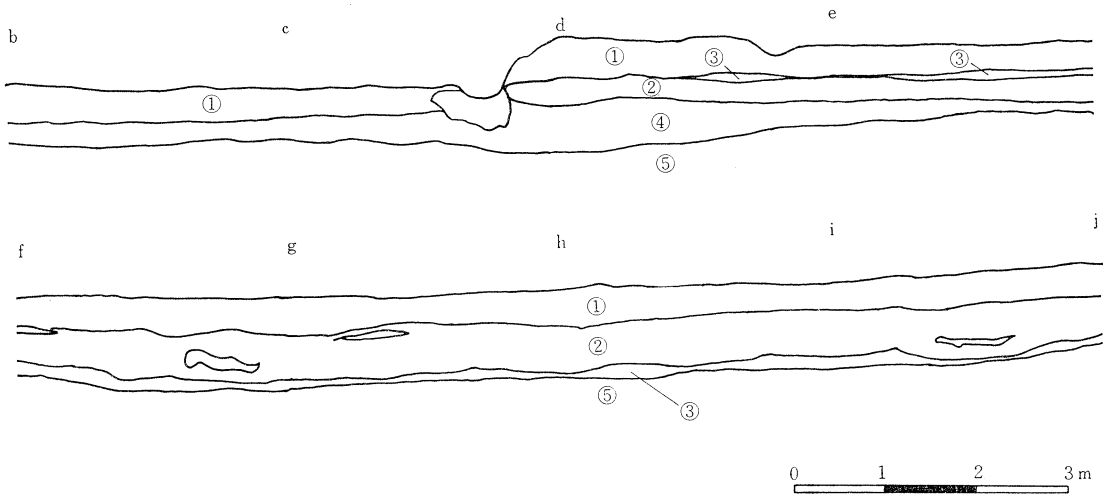
① 耕　作　土
② 含粘土質茶褐色土層
③ 砂　　層
④ 微砂質粘土層
⑤ 灰青色粘土層
⑥ 黄白色粘土層
⑦ 微砂含有黒色粘土層
⑧ 含有機物黒色粘土層
⑨ 砂　礫　層
⑩ 微砂含有有機物層

0　1m　2m　3m

挿図10　川崎遺跡ｆ24～ｆ13の北南の地層断面図



15ｂ～15ｊの西東の地層断面図



① 耕作土層　　⑥ 褐色砂礫層
② 含粘土質黒褐色土層　　⑦ 暗黒色砂礫層
③ 腐植物層　　⑧ 黄色砂質粘土層
④ 微砂質粘土層　　⑨ 微砂層
⑤ 砂礫層

Ⅱ 川崎遺跡出土遺物

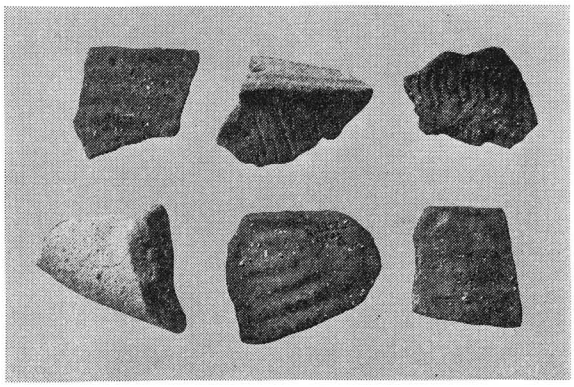
土　　器

本調査における出土土器は，復元によって器形の知られるもの23点であり，また文様，器形の識別できるも，また小破片で文様も磨耗して，文様・器形共に識別不可能なものは，深さ12cm，幅32cm，長さ50cmの平箱にほぼ30箱である。これ等の土器は縄文式土器・弥生式土器・土師式土器・須恵器・瓦器・山茶碗・陶磁器等に大別される。

縄文式土器（挿図11，同13の4.5.7.8.9.12）

縄文式土器と推定されるものが数点出土しているが，磨耗度が激しく文様は明遼でないが，明らかに縄文土器と認められるものが挿図13の4.5.7.8.9.12に知られる。4.5は縄文中期の初頭に類するものと考えられる。12は後期の口縁部と考えられる。7.8.9は晩期最末の土器と推定される。その他に注口土器の注口の部分が出土している。これらの土器は第2地点の下層よりの出土である。

挿図11　川崎遺跡出土縄文式土器



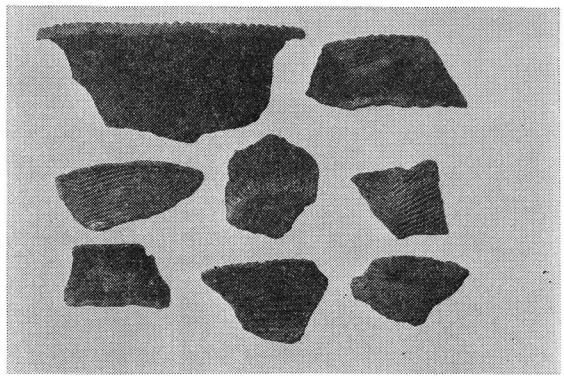
弥生式土器

弥生式土器と推定されるものを一括したものである。

1.　水神平式土器（挿図13の1.6.10.17.20～25　図版7の7～17）

水神平式土器に比定されるものとして挿図13の1.6.10.17.20.21.23.24.25などが見られる。また図版7の

挿図12　川崎遺跡出土水神平式土器



1.2.3.4.6などに見られる土器は水神平遺跡や，馬見塚遺跡に存在した縄文晩期より，弥生文化への変化を物語るものとされている土器に類似している。(註1)

2.　壺形土器（挿図14～18図版8.10～13）

壺形土器は復元によって器形を知るもの1点と口縁部の無いものが3点知られたが，他は口縁部のみの復元可能なもの10数点と胴部及び底部の破片が多数を占めていた。従ってその識別は，口縁部，胴部文様，突帯等によるものである。

口縁部の外反するもの。口頸部と胴部にかけて段のあるもの，削り出し突帯のあるもの。口頸部にヘラ描きの平行線文（一条～数条）木葉文，重孤文のあるもの。また胴部に断面三角形の貼付突帯や，その突帯部に刻目文，刺突文，布目圧痕のあるもの等を一括した。それらの土器を細分すると次のようである。

(イ)　挿図14の1.3.4とに見られるように口頸部が無文のものがある。

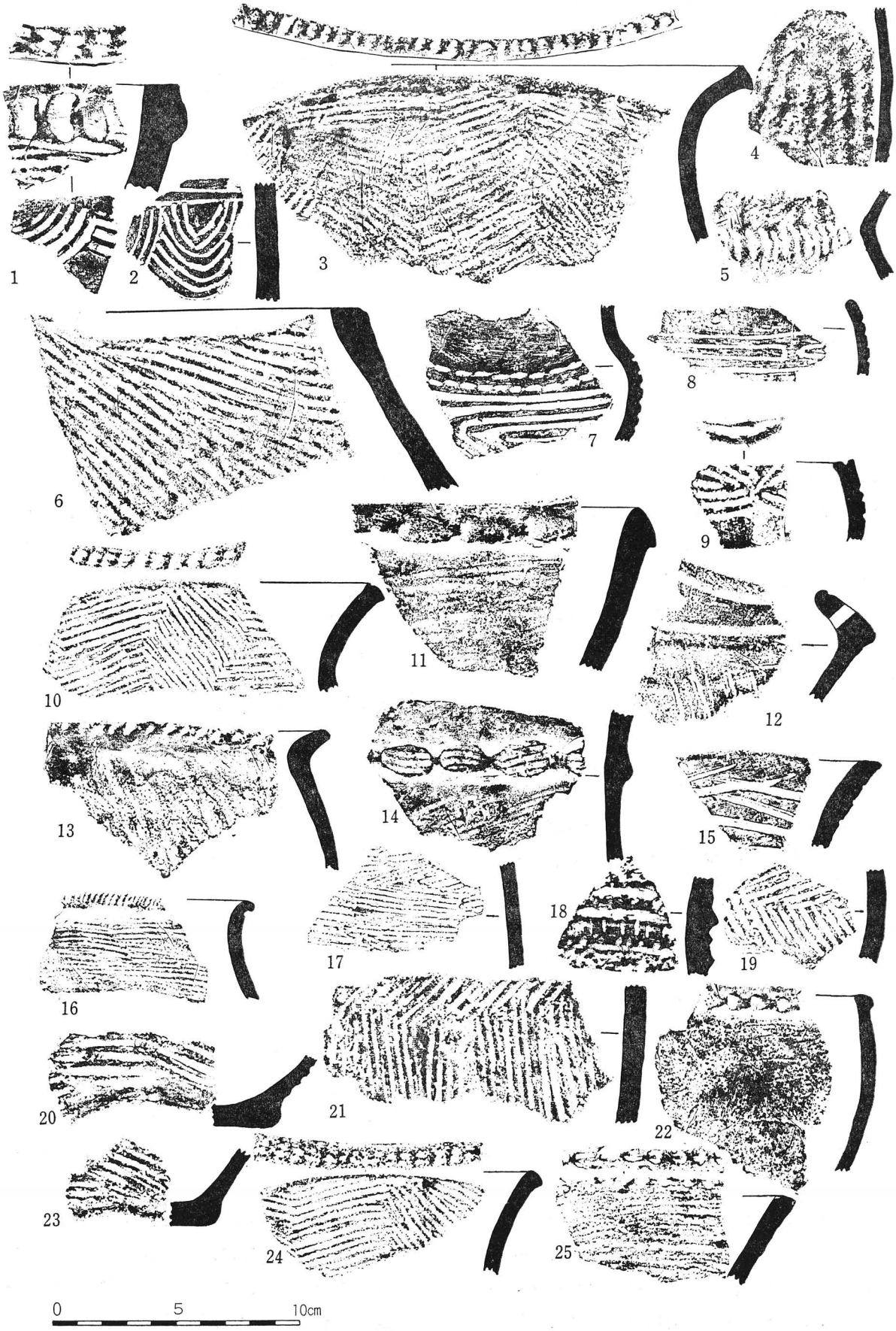
(ロ)　挿図14の2にみられるように，口頸部に削り出した扁平な突帯のあるものがある。

(ハ)　図版8や10，図版12の1.2.3.4.5.6.7.8等に見られるように，口頸部に巾のある扁平な削り出し突帯を施し，その部分に2条～5条の平行沈線文をめぐらしたものがある。

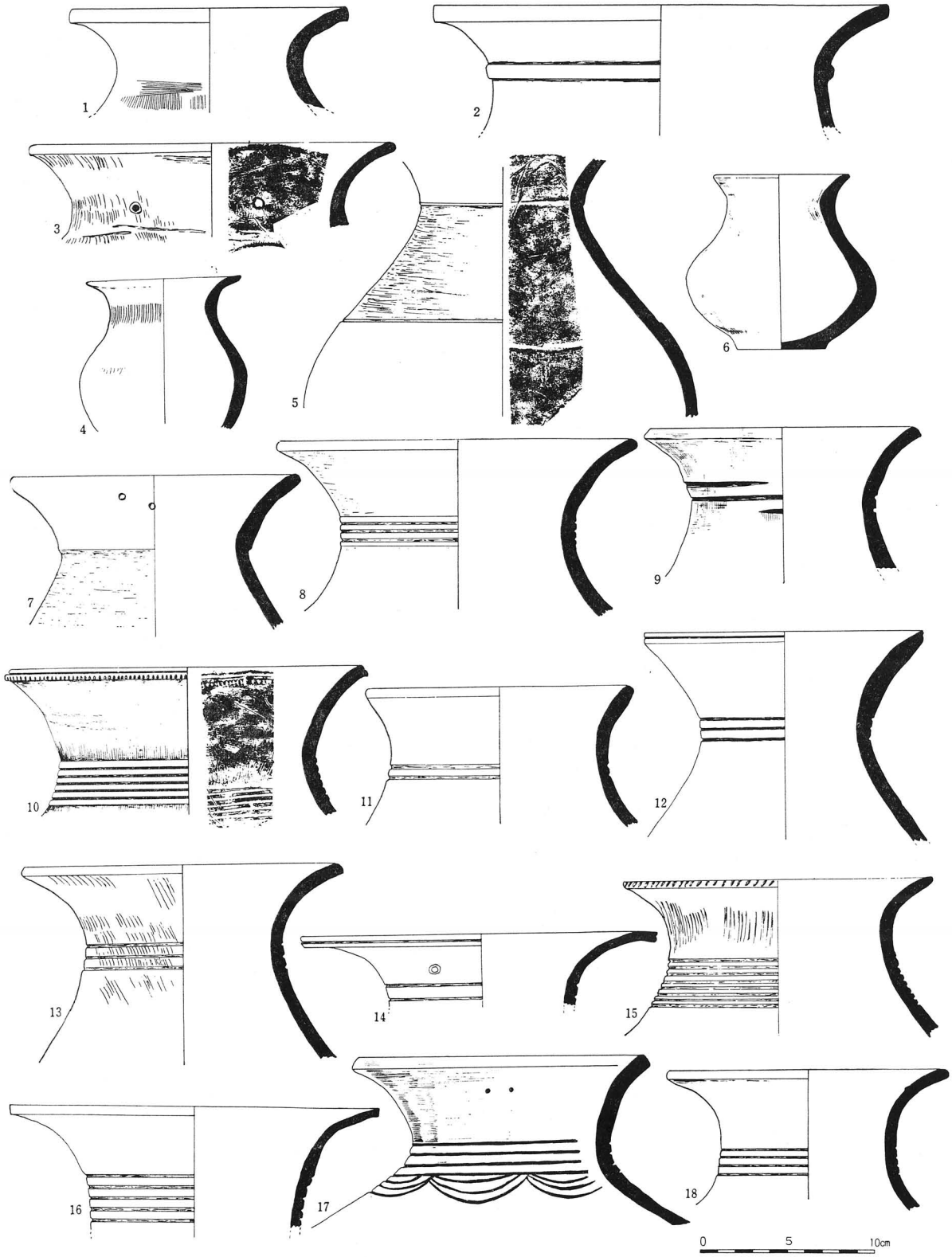
(ニ)　挿図14の10は口唇部の面とりをし，1条の沈線を施して，その下端に細かくヘラによる刺突文を施したものがある。

(ホ)　図版12の3.4，挿図14の9.11～18，挿図14の15にみられるように，口頸部に8条の，ヘラによる横描き平行沈線文を施したもの，なかには同図の17のごとく重孤文を施したものも見られる。（口縁部に穴がある）

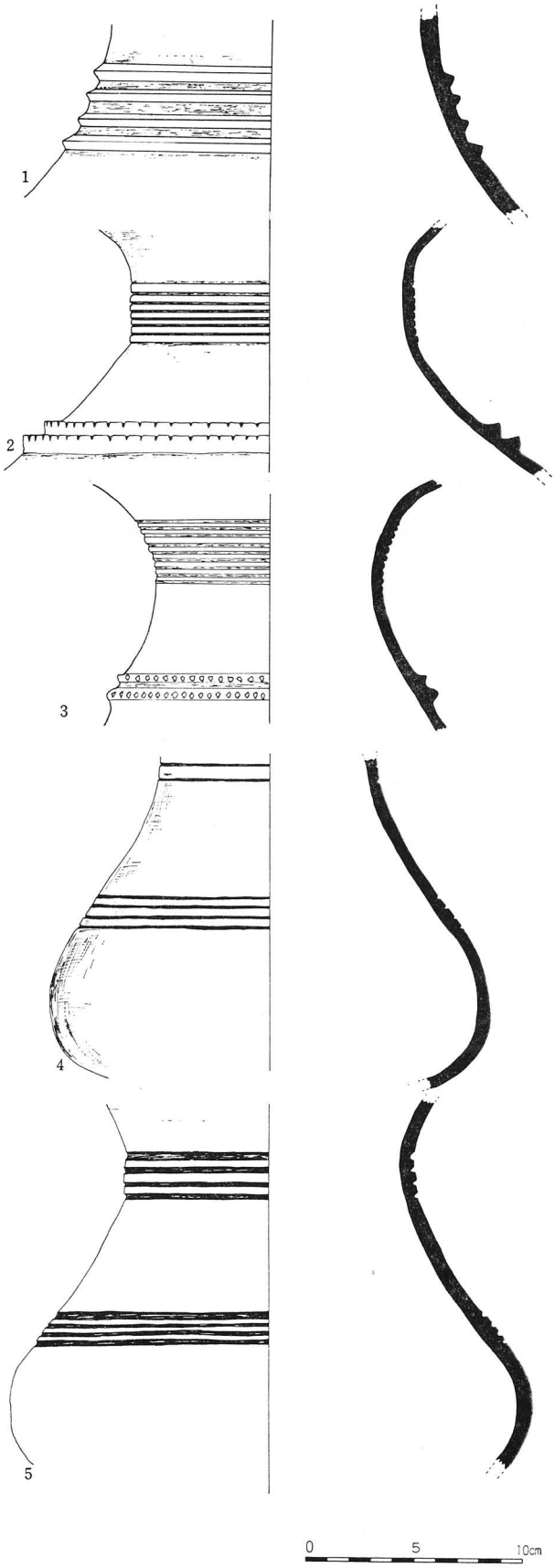
挿図13　川崎遺跡出土土器拓影



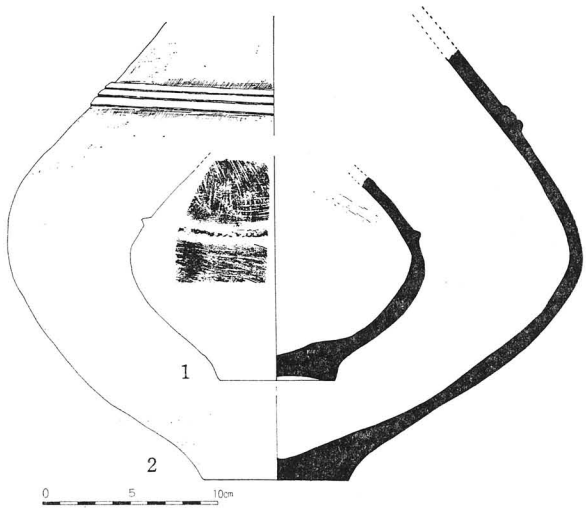
挿図14　川崎遺跡出土土器実測図



挿図15　川崎遺跡出土土器実測図



挿図16　川崎遺跡出土土器実測図



(ヘ)　これらのなかには，挿図14の５にみられるように口頸部から胴部にかけて器面を削り，その上下両端にヘラ描沈線文を施しているのもや，同図の７のように，その部分のみが削られているものなどがある。

(ト)　図版８の11～18，図版10，挿図15の１～３にみられるように，口頸部から胴部にかけて施された断面三角形の削出し突帯，（挿図16の１図版９の２）あるいは貼付突帯にヘラによる刻目文，又は櫛目文（図版10）刺突文布目によった圧痕が（図版13上段）施されたもの等がある。

(チ)　挿図17の23のにみられるように，胴部に木葉文を施しているものが１点出土している。

(リ)　挿図18の１～３にみられるように，口縁部が朝顔状に大きく外反するもので，口唇は面とりされたものがある。

(ヌ)　挿図17の2.6.7のような山形文と平行沈線のあるものと，壺形土器の破片と考えられるもの等である。

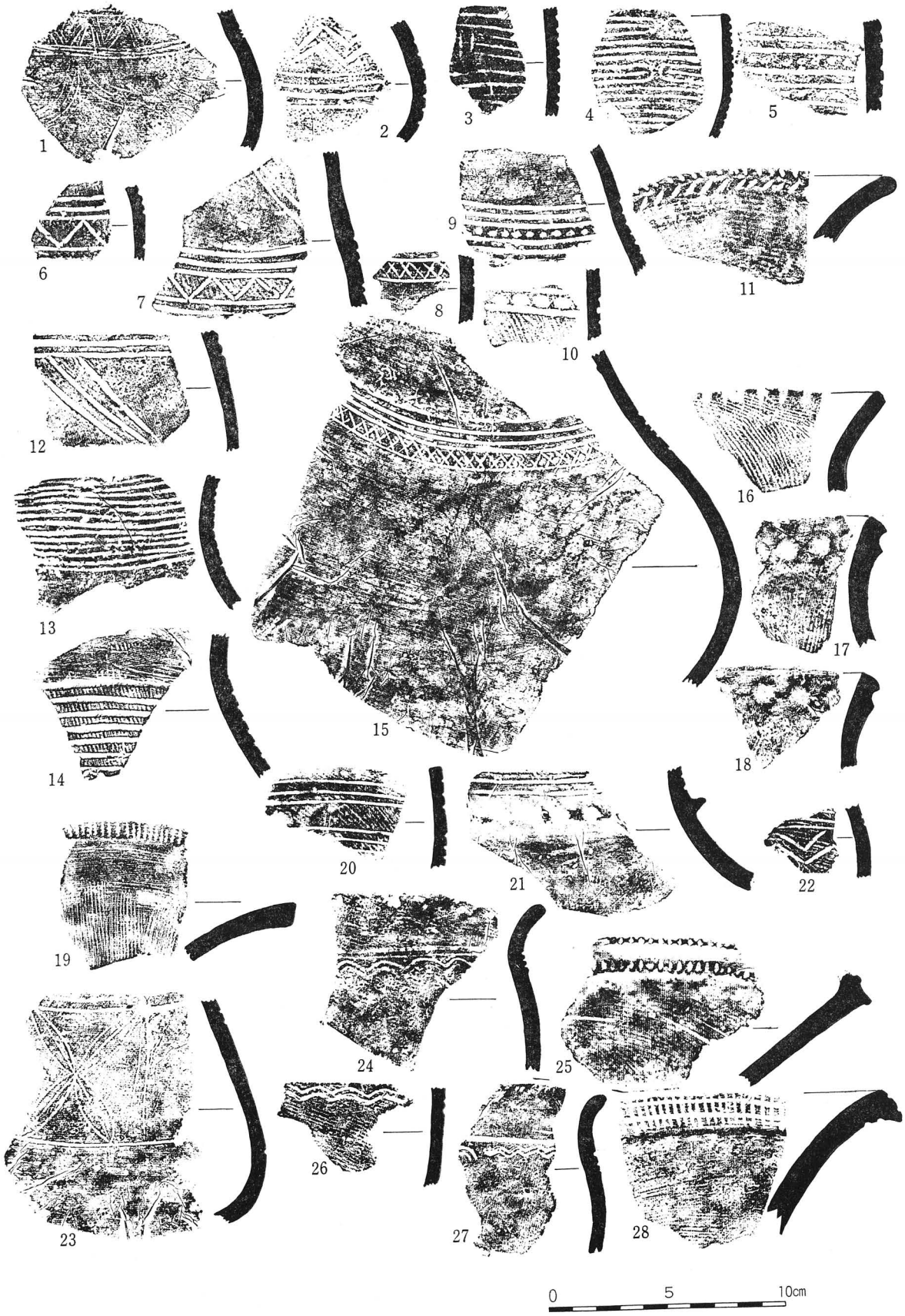
なかでも挿図14の4.6や図版12の１は小型の壺で，４は復元によって完形を知る事が出来た。

以上述べた土器の胎土はいずれも1㎜～2㎜程度の石英粒を多く含んでおり，黄褐色，紫褐色を呈しており，器面を磨き出したものが多い。なかでも挿図16の１は胴部の器形を知る唯一のものであり，無花果形を呈している。

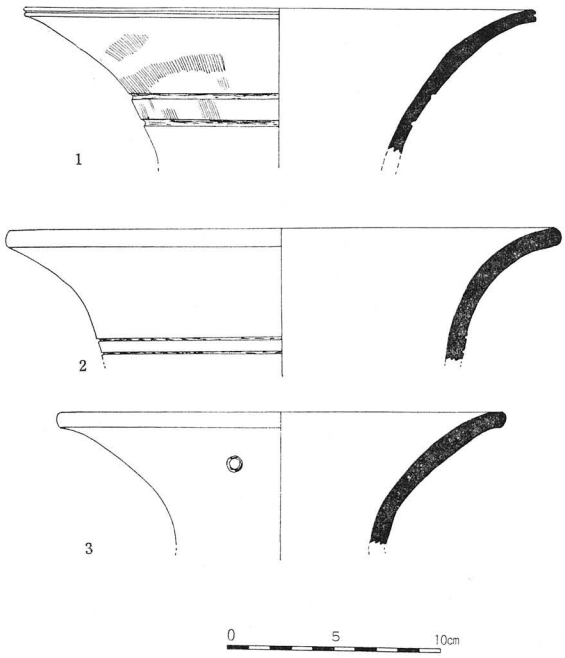
3　甕形土器（挿図17の17.18.24.26.27，挿図19の１，挿図20の３図版12の５～11.13～18）

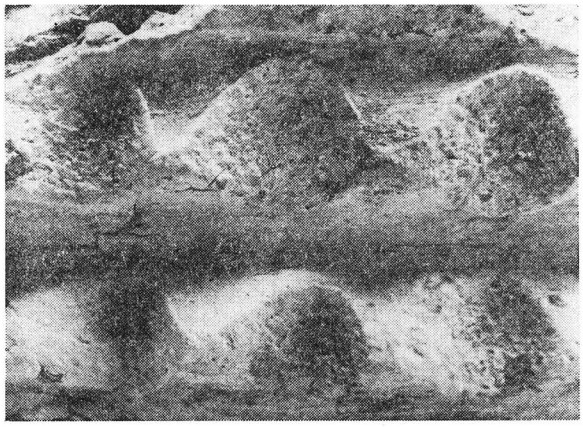
甕形土器は1.2.3.に大別される。

挿図17　川崎遺跡出土土器拓影



挿図18　川崎遺跡出土土器実測図





添付突帯布目圧痕拡大図

(1)は，器形を知るだけの出土品はなく，復元も不可能なものであり，口縁部，胴部，底部に分けられる程度である。

口縁部の特徴をあげると，挿図20や図版12にみられるような，胴部から頸部にほとんど垂直に立ちあがり，口唇部へ向ってやや直角に近く外反し，その口唇に刻目を施したものが多く，頸部近くにはヘラによる2条から6条の横描き平行沈線を施しているものがある。

なかには無文のもの（挿図20の5. 11）平行沈線の間に刺突列点文を施したもの（挿図20の10）や，断面三角形の突帯に刻目を施したものや（挿図20の4）口縁部上部からや直角に張り出した突帯に刻目を施したもの（挿図20の3）等がある。

いずれも胎土は石英粒を多く含み，胴部は刷毛目によって調整をしている。また器面にススの付着が認められるものが多く見られる。

(2)は器面を櫛目の条痕で調整し，ほとんど頸部にヘラ描き平行沈線文がなく，頸部から口縁端まで条痕が認められ，口縁部はゆるやかに外反している。口唇にヘラによる刻目をほどこしたもの，あるいは面とりをしただけのものが認められる（図版12の5～18）。ほかに，口縁部がゆるい外反を示しその口縁部に突帯を施し，その上に刻目や布目による丸い圧痕の連続文を施したもの（挿図17の17. 18）や，同じ様相の器形の口頸部に，半截竹管による平行沈線と波状文をめぐらしているもの（挿図17の24. 26. 27）が知られる。

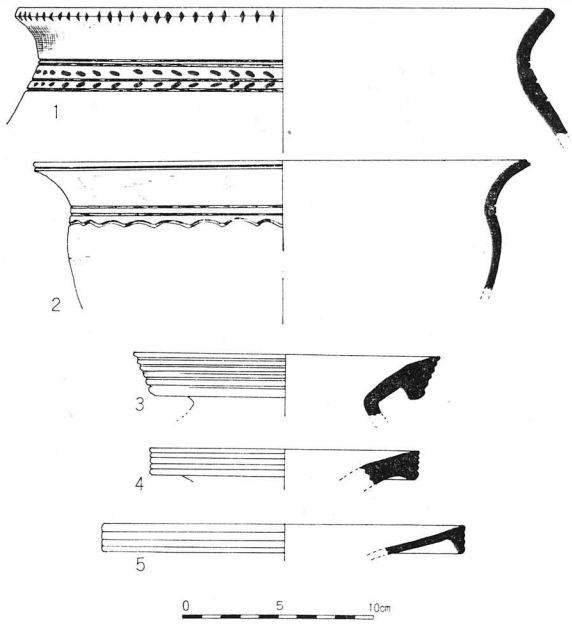
(3) 1. 2以外の甕形土器を本類とした（挿図19の1. 2　図版12の12）

挿図19の1及び図版12の12にみられるように，口縁部が頸部からゆるいカーブを描き，口唇の面とりをして，刻目をめぐらしている。

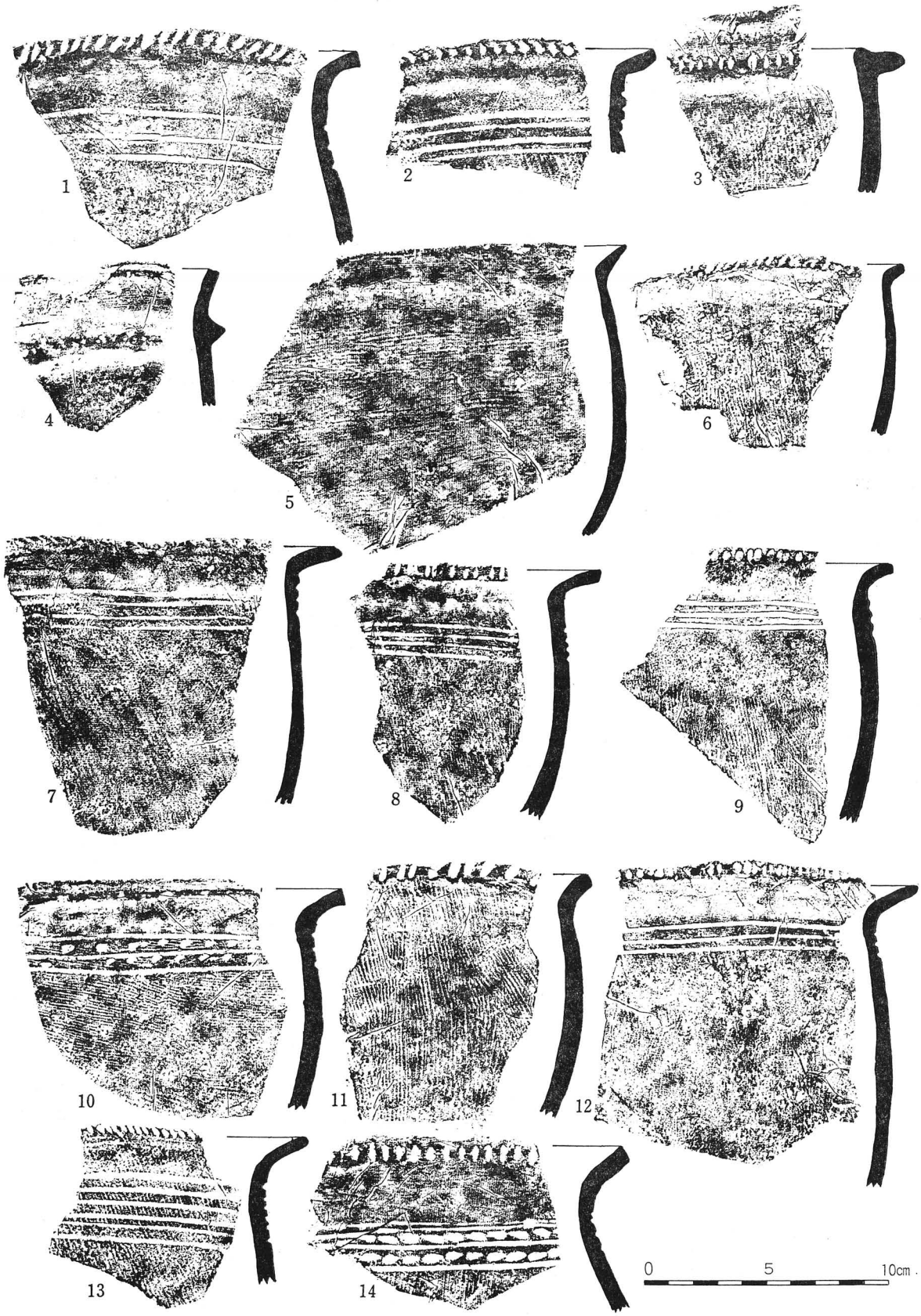
頸部にはヘラによる平行沈線文をめぐらし，沈線文の間に羽状刺突文を施している。

挿図19の2にみられる土器は，胴部径が，口径より

挿図19　川崎遺跡出土土器実測図



挿図20　川崎遺跡出土土器拓影



小さく，口頸部にヘラ描き平行沈線をめぐらし，その平行沈線の下端に孤を描く波状文をめぐらしている。

口縁部はゆるく外反し，口唇を面とりし，沈線１条をめぐらしている。

4. 鉢形土器（挿図21の1～3）

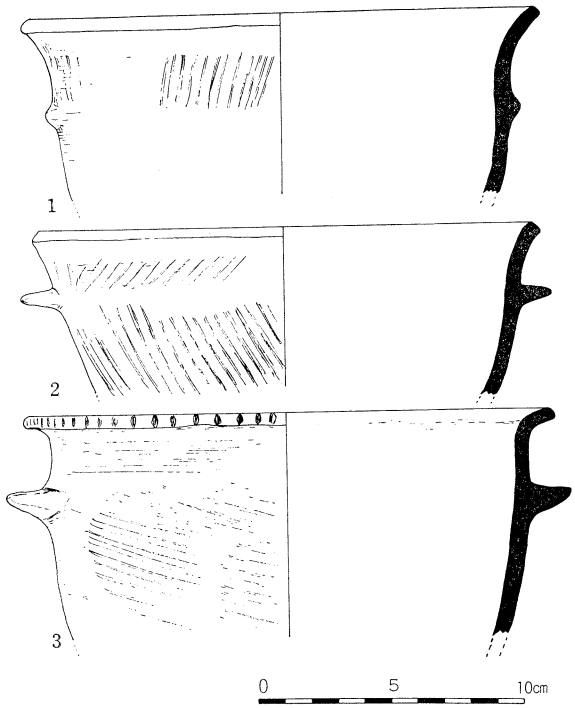
鉢形土器は少量出土している。他の土器と同じく，完形品は一つもなく，ほとんど小破片であり挿図21の１は小さな把手がついている。この把手は，胴部よりや上手のところに，かすかにつけられ，巾が３㎝前後，厚さが1.5㎝前後である。

器形は，胴部から口縁部へ向って，ゆるやかに外反しているもので，口唇を面とりしている（挿図21の1.2)。また口唇部に向って急角度で外反するもの（同図３）があるが，いずれも口径より胴部径が小さく，口唇部に刺突痕をめぐらしている。

器厚は一般に薄手で，胎土は，他の土器にもみられるように，２㎝前後の石英粒を含んだ粘土である。

なお器面はススの付着がはなはだしい。

挿図21　川崎遺跡出土土器実測図



5. 蓋形土器（挿図の1～7図版13の２）

蓋形土器は，中央部が高くなったものがほとんどで，その中心に孔が穿かれたものが知られる。（挿図23の1.3.5)

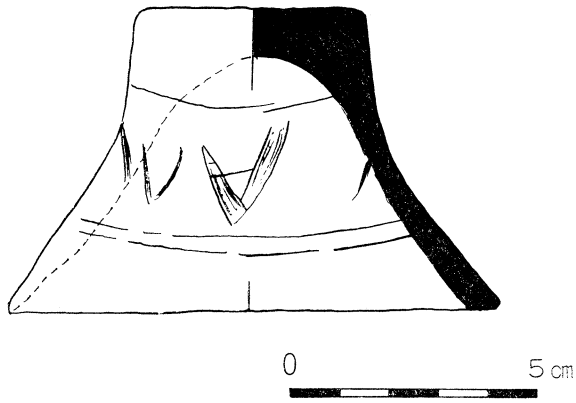
中でも同図は中心部につまみ状の突起がなく孔のみである。また同図の４と５は，つまみがあるが，その部分に孔はない。４は器面内外はうすい調整条痕が認められる。

同図６は，指先大のつまみがつき，口縁部が，上反する特徴を示し，同図７は，破片の様相から蓋と考えられる。器外面には口縁部に三本，途中に三本，上部に三本の平行沈線がめぐらされている。

４をのぞいて，どの蓋の器面も磨き出されているが，１には（図版13の２），途中に小豆大の貼付文をめぐらせている。

胎土は，いずれも細かい石英粒を含み，色調は黄褐色である。

挿図22　川崎遺跡出土土器実測図



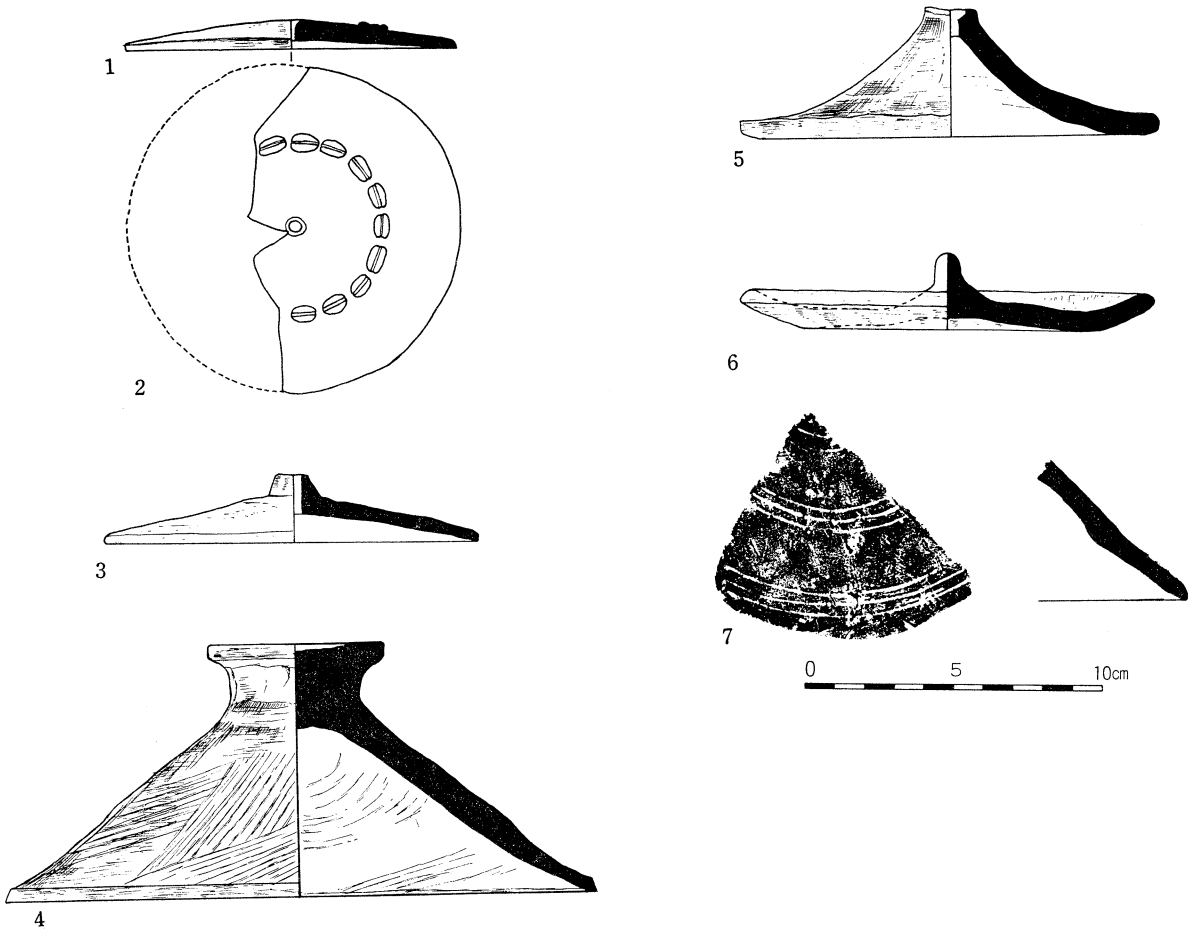
6. 器台形土器（挿図17の11.19.25.28，挿図19の4.5挿図22，図版13の1.3)

器台に類すると考えられるものは，口縁部が３点出土している。

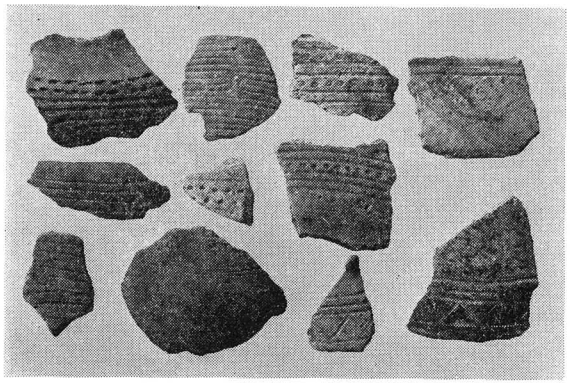
挿図19の４.５，図版13の３がそれである。また，挿図22，図版13の１は坏あるいは，脚台と思われるが，上面の磨耗がはげしく，器面には沈線による文様がみられる。

なお挿図17の11.19.25.28にみられる，器台の口縁部と思われるものも出土している。

挿図23　川崎遺跡出土土器実測図



挿図24　川崎遺跡出土土器

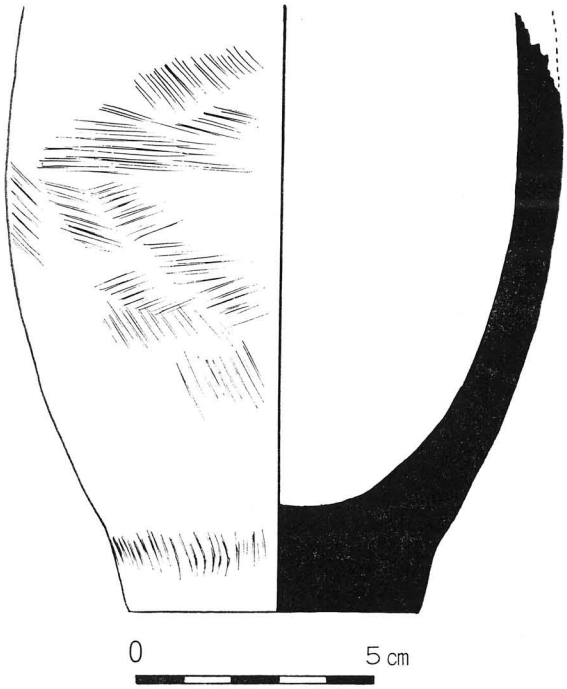


7.　その他の土器（挿図13の2.7～9，挿図17の3.4 挿図24）

挿図13の2.7.8.9，挿図17の3.4，挿図24にみられるような土器片がおのおの1点ずつ出土している。挿図13の2.7.8.9は小破片であり[註2]，縄文晩期から水神平式土器に伴出するものと考えられる。またこの他に挿図17の3.4のように流水文の小破片が知られる。

同図3は朱彩が施されている。

挿図25　川崎遺跡出土土器実測図



8.　土器底部（挿図26.27図版15の2.4.6.8.9）

土器底部は，挿図27に見られる様なもの大半であり，器面の部分に，条痕が認められるものと，磨き出しによったものに大別される。

条痕のあるものは一般に平底であり，底部近くに垂直に近く立上り，若干ではあるが底部中央に孔を穿ったものがある。（図版15の4）

底部の厚さは，3㎝を越す厚手のものから1㎝内外の薄手なものまである。胎土は1～2㎜までの石英粒を多く含んでいる。器面外面はススの付着が著じるしい。いずれも鉢形土器か甕形土器の底部とみられる。

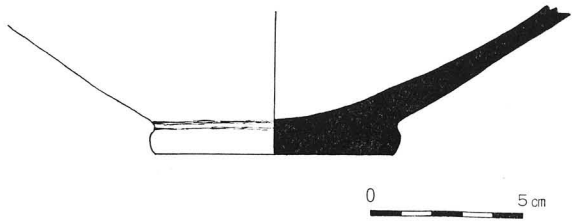
研き出された土器の底部は，底部から胴部にむかうカーブから推定して壺形土器のものと思われ，大部分が平底であるが，なかには底部が揚底気味のものもある。挿図25に見られる様な平底で胴部にかけて立上りの急な器形のものがある。

また1点ではあるが挿図26の如き底部もみられる。この底部の面を丸味を持つ様に調製されている。

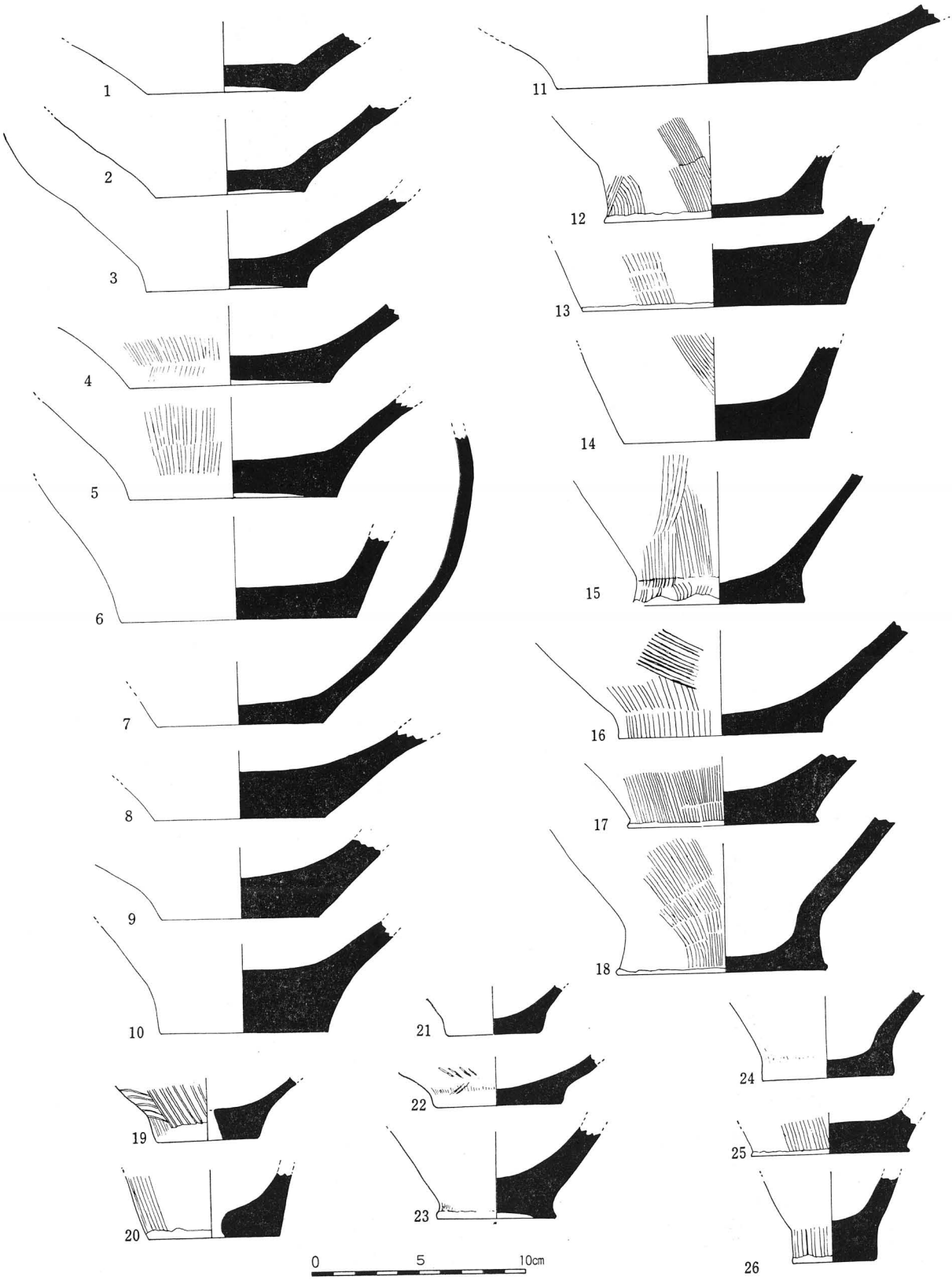
その他，図版15の8にみられる，もみがらの圧痕，同図9にみられる×印のある底部，同図2の揚底で孔を穿ったもの，同図6の底部の端を丸くしたものが見られる。（大江）

註1　紅村弘氏の教示による。
註2　東海地方では晩期後半の土器に伴出し，中でも2の土器は最末か弥生最頭ではないかと思われる。

挿図26　川崎遺跡出土土器実測図



挿図27　川崎遺跡出土土器底部



土師式土器

1. 坏（挿図30の6.7・図版17の6）

坏は2点出土しているが，いずれも丸底の口縁部がやや内反する器形である。

挿図30の6（図版17の6）は，口径11.5cm，器高約4.8cmあり，底部は丸底で，口縁部はやや内反気味である。

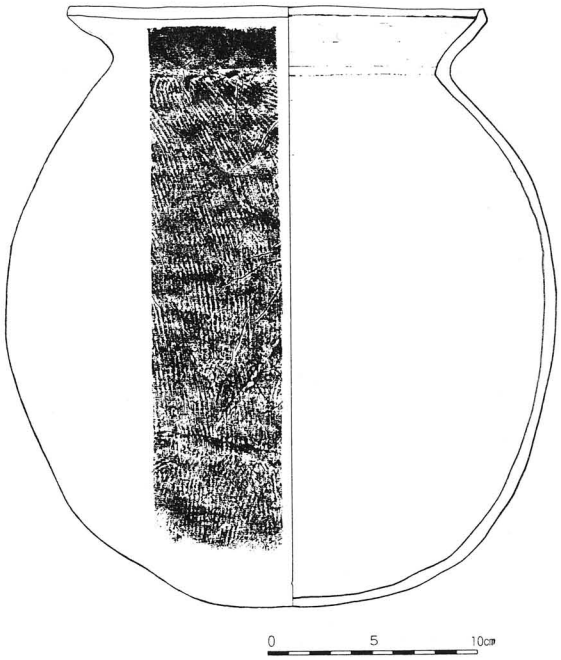
胎土は細かい砂質粘土で，器面の内外共に赤褐色を呈している。ただし外面は部分的ではあるが炭素を吸収したと思われ黒色になったところがある。

内部は胴部から口唇部へかけて，ヘラによる暗文がはっきり見られる。外面は口縁部に整形痕が見られ，底部は，腰部から底へかけて，ヘラ削りの整形痕が認められる。

挿図30の7は，口径14.3cm，器高4.6cmのやはり手づくりの丸底で，さらに腰部から口縁部へかけても丸味を帯びながら彎曲し，口唇部近くでやや内反している。

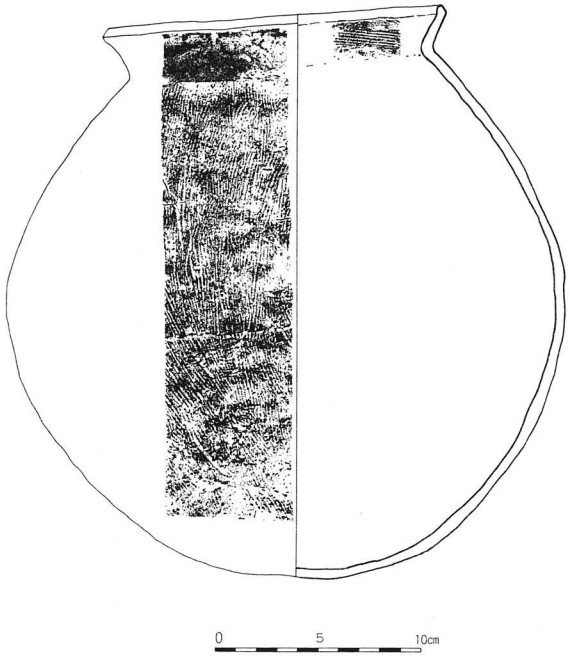
胎土は，最大2mm前後の石英粒を含む粘土で，外面は赤褐色を帯び，内面は，黒色土器様に黒色を呈している。成形は，内外面共に磨きだしている。

挿図28　川崎遺跡出土土器実測図



土師式土器甕

挿図29　川崎遺跡出土土器実測図



土師式土器甕

2. 甕（挿図28.29，図版17の1.2）

甕は，粗形なものと，やや整形な，どちらも丸底のものが2個出土している。

挿図29図版17の2は，口径18cm，器高29.6cmである。短頸の口縁部をもつ丸底粗形の甕である。

口縁部は，肩部から口縁部境いでくびれて，「く」の字状に外反しながら，口唇部へ向かって開いており口唇を面とりしている。

胴部は，輪積みの成形であるが，外面は櫛目文のたてがきで全面を整えているが，内外面共に凹凸面が多い。

胎土は，石英粒を包む砂質粘土で，ところどころ，火のあたったと思われる黒色の斑点が見られるが，全体は黄褐色である。

器厚は，薄づくりではあるが粗製であり，粗形である。

挿図28図版17の1は，口径21.6cm，器高32cmのやはり，短頸の口縁部をもつ丸底の甕である。

この甕は，1と比べるとかなりの精製である。

成形は，やはり輪積みであり，器面に凸凹が認められるが，櫛目文のたてがきで整え，口縁部外面は，横なぜのはけ目文であり，内面もやはりはけ目文で整え

口唇を面とりして，端部が小さく上に尖るような成形をしている。

器形は，肩部から口縁部境で一たんくびれ，口唇部へ向かって，「く」の字状に外反して口縁をつくり，胴部から底部へ向かっては丸味を帯びてくだり，底部を丸く成形している。

胎土は，石英粒を包む砂質粘土であり，黄褐色を呈している。

全体に整形であり，挿図29はゆがみも少なく安定感がある。

3. 小　　碗（挿図30の８図版17の５）

挿図30の８図版17の５は碗というより小鉢といった方が適当と思われる器形である。

口径８cm，器高3.7cm の小型のものであるが，胴部は腰部より口唇部に向かって切立ち，器面をヘラで成形している。

腰部から底部へかけては，ヘラによって斜めに底部へ削り下げ径3.8cm ほどの扁平な部厚い底をしている。ミコミにあたるところは，ほとんど扁平である。

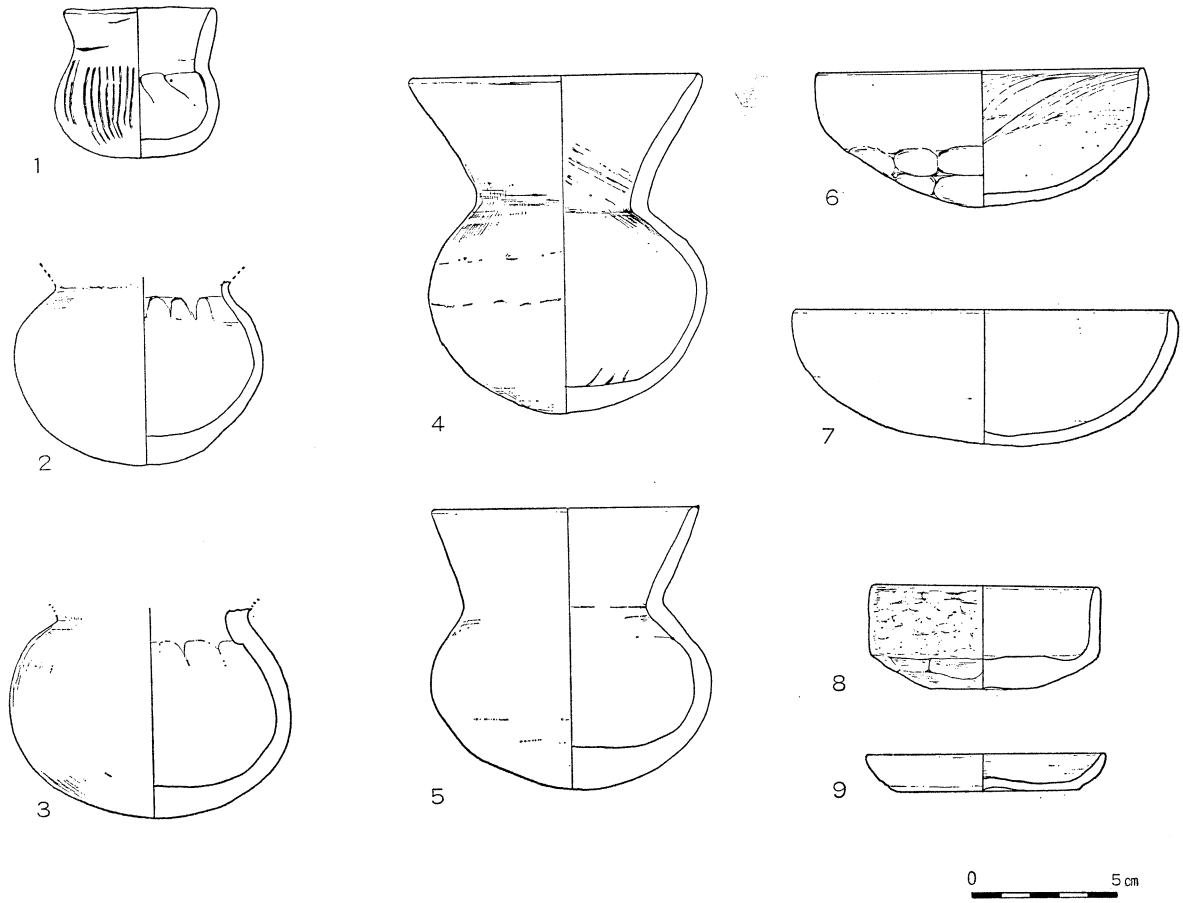
胎土は，細かい砂質粘土を使用し，黄褐色をしている。

4. 小　　皿（挿図30の９）

挿図30の９は，手づくりの小皿であるが，今まで述べてきた土師式土器と異なり，その器形から判断して，歴史時代の「かわらけ」といわれるものであろう。

口径は8.5cm，器高は1.4cmであり，胎土は細かい砂質粘土で，灰褐色をしている。

挿図30　川崎遺跡出土土器実測図



土師式土器　1.～5.　坩　6.～7.　坏　8.　小碗　9.　小皿

5. 壺形土器（図版17の3.4）

短頸長頸の壺が若干出土しており，その特徴は図版17の3や図版17の4にみられるごとく，胴部から口縁部に至るカーブが「く」の字状に外反し，口唇部を面とりをしている。そして大半は，条痕によって器面の整形をしている。なかには図版17の4にみられる長頸のものもある。

6. S字状口縁甕形土器（図版14の2.4）

図版14の2・4にみられるような，S字状口縁をもつ甕形土器が若干出土している。同図版4は口唇は面とりをし，口縁部の外面には，点列連続文を施している。

7. 高坏形土器（挿図31の4～6図版16の1.3.4）

挿図31の4.5の脚部は，接合部から底部へ向って開き中央部でややふくらみを見せ，底部へ至って更に直角に近く外へ向って開く特徴を示している。（図版16の3.4）

坏部は，胴部へ向って開き途中に稜をもつ特徴を示し，口唇部は尖った形で面とりをしている。いずれも，器面は磨きだしている。

挿図31の6図版16の1は，ブランデー形高坏といわれる土器で口縁部は「く」の字状に外反し，胴部から腰部へかけてまるくカーブし接合部は「く」の字状に脚部に至り更に開くところに孔がみられる。底部は欠損しているので，その形状を知ることはできない。

器面は，内外ともに磨きだし，薄づくりである。色調は，いずれも黄褐色で，胎土は細かい砂目の粘土である。他に挿図31の1～3.7にみられるような器台があるが，1～3は空胴で脚部に孔を穿っている。

8. 甑（図版13の4.5）

図版13の4.5にみられるような，甑の把手が若干出土しているが，その把手の大きさから器形はかなり大型と推定される。

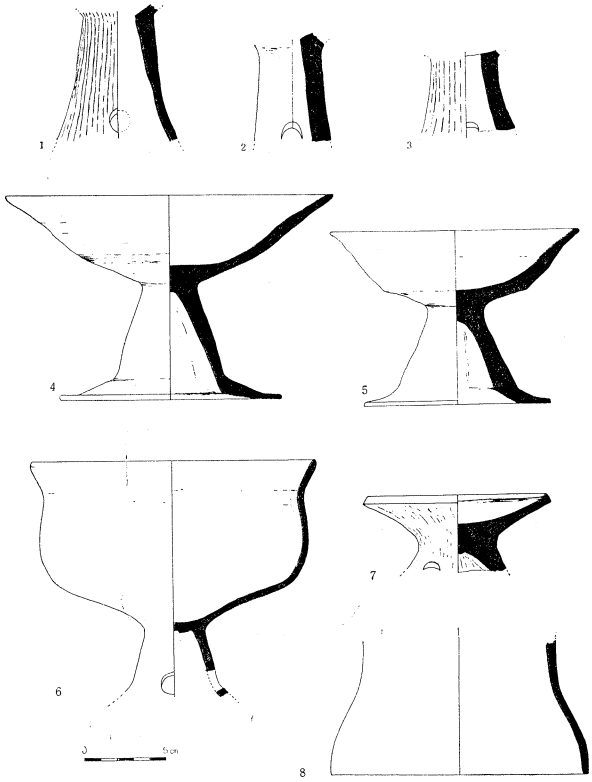
9. 坩（挿図30の2～5図版18の1～4.6～9）

坩は，図版18の1～4.6～9及び挿図30の2～5にみられるものが出土した。胴部はいずれも丸味をおび頸部から，口縁部にかけてややラッパ状を呈し，口唇部は尖っている。器面外部は磨きだしたもの，条痕による整形がみられる。

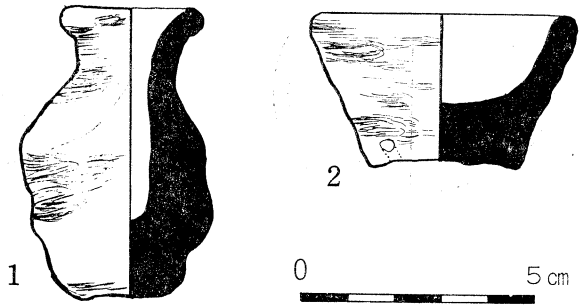
10. 手捏土器（挿図30の132の1.2図版18の5）

手捏土器は，挿図30の1図版18の5と，挿図32の1.2がみられる。挿図30の1図版18の5は，坩状に成形したもので，外面は条痕仕上げで内面は指またはヘラ仕上げの粗製品である。挿図32の1は，小型の壺である。同図2は，小型の坏様であるが底部の両端に小孔が穿たれており，いずれも粗製品である。（田口）

挿図31　川崎遺跡出土土器実測図



挿図32　川崎遺跡出土土器実測図



須　恵　器

出土した遺物中，須恵器は，小破片も入れて95点である。

器形により坏・蓋坏・蓋・壺・甕・短頸壺・有蓋高坏・長頸壺・灰釉茶碗・山茶碗・山皿・その他小破片に分けられる。

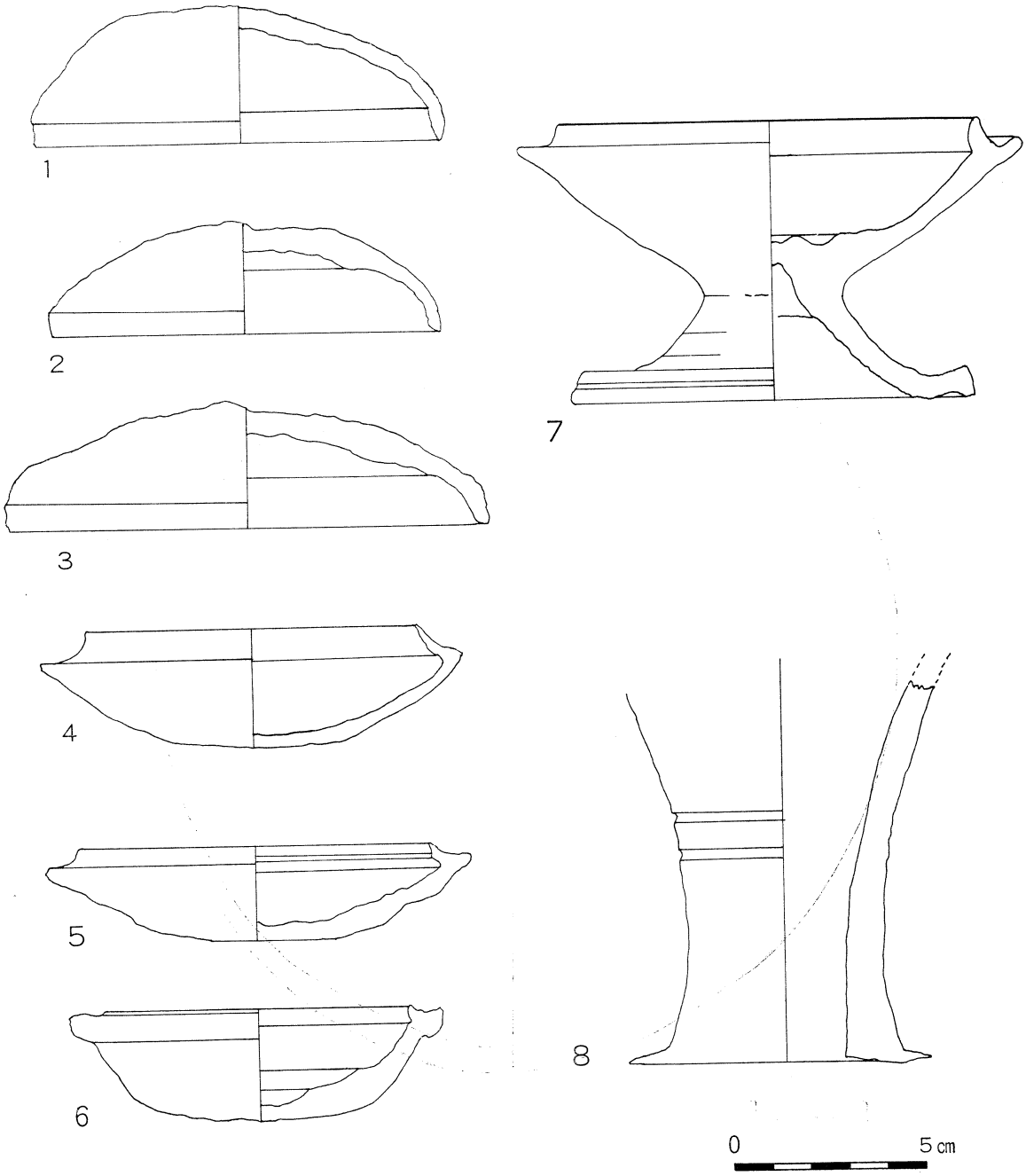
1．蓋（挿図33の1～3）

挿図33の1は口径10.6cm，高さ3.6cm，青灰色，成形やや薄作りで歪んでいる。口縁部はほぼ垂直に下がっている。

挿図33の2は口径10.2cm，高さ2.9cm，灰白色，口唇部はカーブをえがきながら垂直に下がり，内部にはよりひも作りの渦巻痕を残している。

挿図33の3は口径12.6cm，高さ約2.8cm，青灰色，粗雑な成形で歪んでいる。

挿図33　川崎遺跡出土土器実測図



須恵器　1.～3.　坏蓋　4.～6.　坏　7.　高坏　8.　長頸壺（頸部）

2. 坏（挿図33の4～6図版20）

挿図33の4は口径11.0cm，高さ8.5cm，灰青色，斜めに立上がり，口縁部の蓋受の高さ0.4cm，口縁部はくの字状になって，ふち作りは薄い。緻密な胚質，完形品。

挿図33の5図版20の6は口径11.2cm，灰白色，蓋受径9.2cm，高さ2.5cm，斜めに立上がり，ロクロ痕あり。完形品。

挿図33の6は口径9.8cm，高さ3.0cm，灰青色，焼成時に逆にしたものか，降灰がつば裏に熔着している。底面によりひも作りの渦巻文がある。完形品。

3. 有蓋高坏（挿図33の7図版20の7）

口径11.2cm，高さ7.5cm，青灰色，脚部の径10.5cm，坏部は斜めに立上がり，蓋受けの高さ約0.8cm，ほぼ垂直である。脚部と胴部の境から約45度のカーブで脚底部に下がっている。

4. 長頸壺（挿図33の8図版20の2）

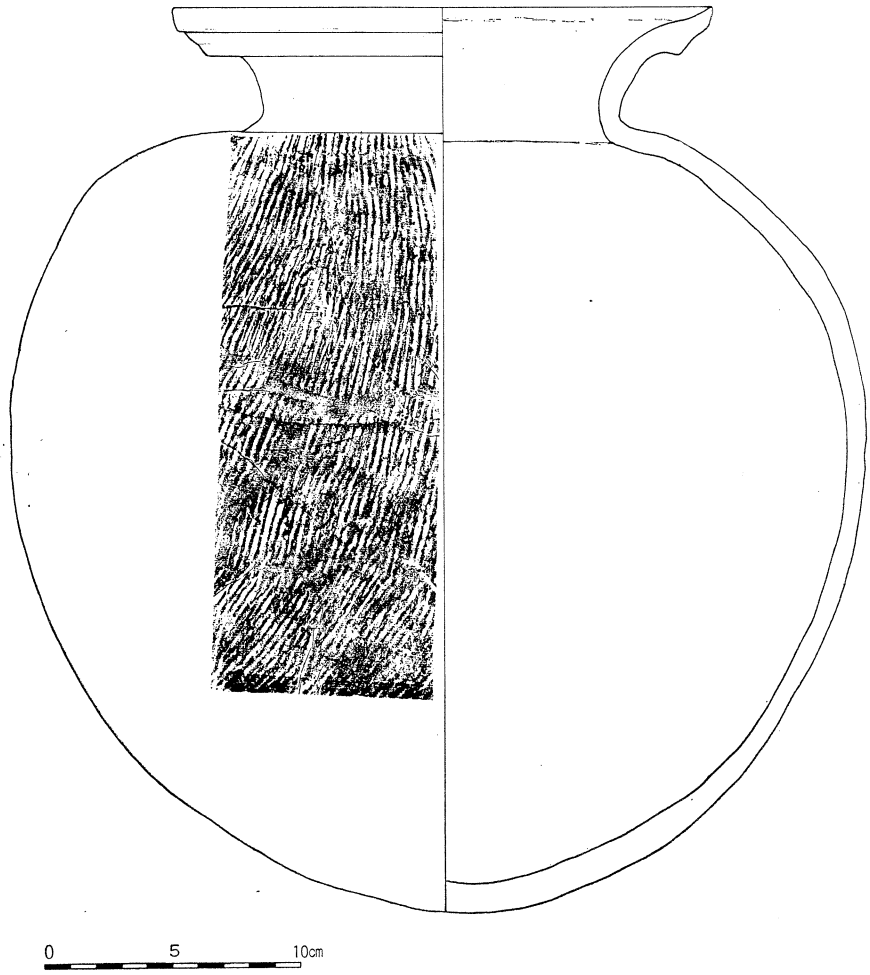
頸部の一破片，青灰色，沈線2本頸部にあり，胚土の心部は赤褐色となっている。

5. 壺（挿図34図版19の1）

口径23.7cm，高さ40cmの完形品である。肩部から口縁部にかけて強く外反し，口唇部近くで立ち上がりながら二つの稜をつくり，口唇を尖がらした成形である。口縁部内外ははけ目で器面を整え，外面は条痕のタタキ文で整形している。胎土は砂目のねん土で青灰色をしている。

ほかにこの壺に類似すると思われる口縁部や胴部の破片が出土している。（古川）

挿図34　川崎遺跡出土土器実測図



須恵器　壷

石　　器

川崎遺跡における石製遺物は，石鏃・石斧・剝片石器・石錘・砥石・打石器・乳棒状石器等が出土している。

1. 石鏃（挿図35の１～７図版21の１～６）

打製石鏃は全部で７点出土した。挿図35の１図版21の１はグレー色チャート製の剝片石鏃で両面共に押圧剝離が施されたやや長身の三角鏃である。両面共下部から中央にかけて第一次の剝離面をそのまま残している。尖端部僅かに欠損。同図２～６図版21の２～６はいずれも安山岩製で，同図４図版21の４は短脚の打製石鏃で右脚と尖端部が欠損している。同図５図版21の５は打製の長身鏃で尖端部が欠損している。同図２図版21の２は長身の打製三角鏃で尖端部若干と下部が欠損している。同図３図版21の３は唯一の有柄打製石鏃で有柄部が欠損している。同図６図版21の６はやや長形の打製三角鏃で尖端部が欠損している。同図７図は三角鏃の下部のみである。

2. 石斧類（挿図36～38，図版21の上段11.12，図版22の７～17）

磨製石斧

抉入磨製石斧，挿図38図版21の上段は全長19.2cm，幅5.7cm，厚さ抉入部で3.4cm，刃部尖端で2.85cm，全面に極めて入念な研磨が施され，特に刃部尖端は鋭利な砥ぎ出しを見る。刃は身に対してほぼ45度位の角度を以て作り出され，緩やかなカーブをもち，身の断面は台形をなしている。欠損部も使用による磨滅なども全く見られぬ優品である。表土下85cm黒色有機質土層よりの出土で石質はサヌカイト製である。また上記の石斧と同一地点で抉入部は欠損しているが，同じように鋭利な刃部のみで長さ11.6cmが出土している。前記石斧より幅は１cmせまく，厚さは同じで同石材を使用していて殆んど同型と思われる。

挿図36の５は抉入磨製石斧であるが，抉入の部分が中程から折れていて基部のみである。全面磨製であろう。石質はサヌカイト製である。

蛤刃磨製石斧，挿図36の９は硬質砂岩製の大形蛤刃磨製石斧で，基部は欠損していて見られないが，刃部尖端には打痕が認められ，表裏共に中央部に同じような凹部がある。これは石斧として使用中折れた後にタタキ石として再使用したものと思われる。

挿図36の７は９と同一条件の石斧である。石材はやはり硬質砂岩製であるが幾分硬度が高いようである。同図10は上記２点より小形で基部は欠損している。

いずれも蛤刃石斧特徴の全体が鈍重で刃部も分厚くつくられている。同図６は基部と刃部を共に欠損している。同図４は基部のみであるが，その頭部に多数の打痕が認められる。

扁平片刃石斧

３点が出土している。挿図36の１は完形品で刃部は0.4cmの片刃である。同図2.3は１と同質同形のものであるが，２は基部右肩を，３は刃部左辺を欠損している。共に石質は硬質の堆積岩を用いている。

打製石斧

３点の出土を見た。挿図37の８と同図３は共に短冊形で硬質粘板岩製のものである。８は完形品であるが３は基部と刃部欠損。また同図７はやや大形の刃部のみで荒い打調が周辺に施され，石質は上記２点と同じ粘板岩製である。

3. 打石器（挿図37の1.2.6）

挿図37の６は淡灰色の扁平な川原石の両端に打調により刃部が作られた石器で，表面中央部に局部磨製痕が認められるが，砥石としても使用されたのかも知れない。両端の打調部分を除いては全て礫面のままである。同図１図版22の５は青色硬質砂岩を用いた打石器で尖端部は７～９回に亘る打調で成形されている。同図２は川原石を縦割にし尖端を研ぎ出したように成形した尖頭打石器で背面上部に礫皮面を残す。

4. 石錘（挿図36の８，図版22の６）

石錘は１点のみの出土であるが，灰色の滑らかな川原石の両端を打ち欠いている。

5. くぼみ石（挿図36の11，図版22の１）

淡茶色砂岩製で丸形の打製石斧の折れかとも見られるが，折れ口の磨耗度が強く，むしろ凹石として使用されたと考えられる。

6. 乳棒状石器（挿図37の４）

黒色河原石の太い方の尖端を両刃様に打調を加えたもので，打石器の部類に属するものと思われる。

7. 剝片石器（挿図35の８～11．13，図版21の７～10）

剝片石器は５例が発見されている。挿図35の８図版21の10は安山岩製で，脊部に直角に10数回のリタッチがされ，刃部にも荒い10回程のリタッチが施された一見ナイフ状を示す石器である。同図９図版21の９は硅質頁岩製の石器で両側面にリタッチが見られるが，特に右辺が調整されている，同図13は黒色チャート製の石器で，尖頭刃部に使用痕によるこまかい刃こぼれが認められる。同図11図版21の８は淡灰色のチャート製石器で上部右肩にノッチ状の抉りが見られ，続く右辺に使用痕と思われる刃こぼれが認められる。同図10図版21の７は青色チャート製で，片面に自然面を残し，刃部は両側辺中央部はややノッチ状を示し，リングが認められる。以上５点の剝片石器はいづれもスクレイパーに分類されるものである。

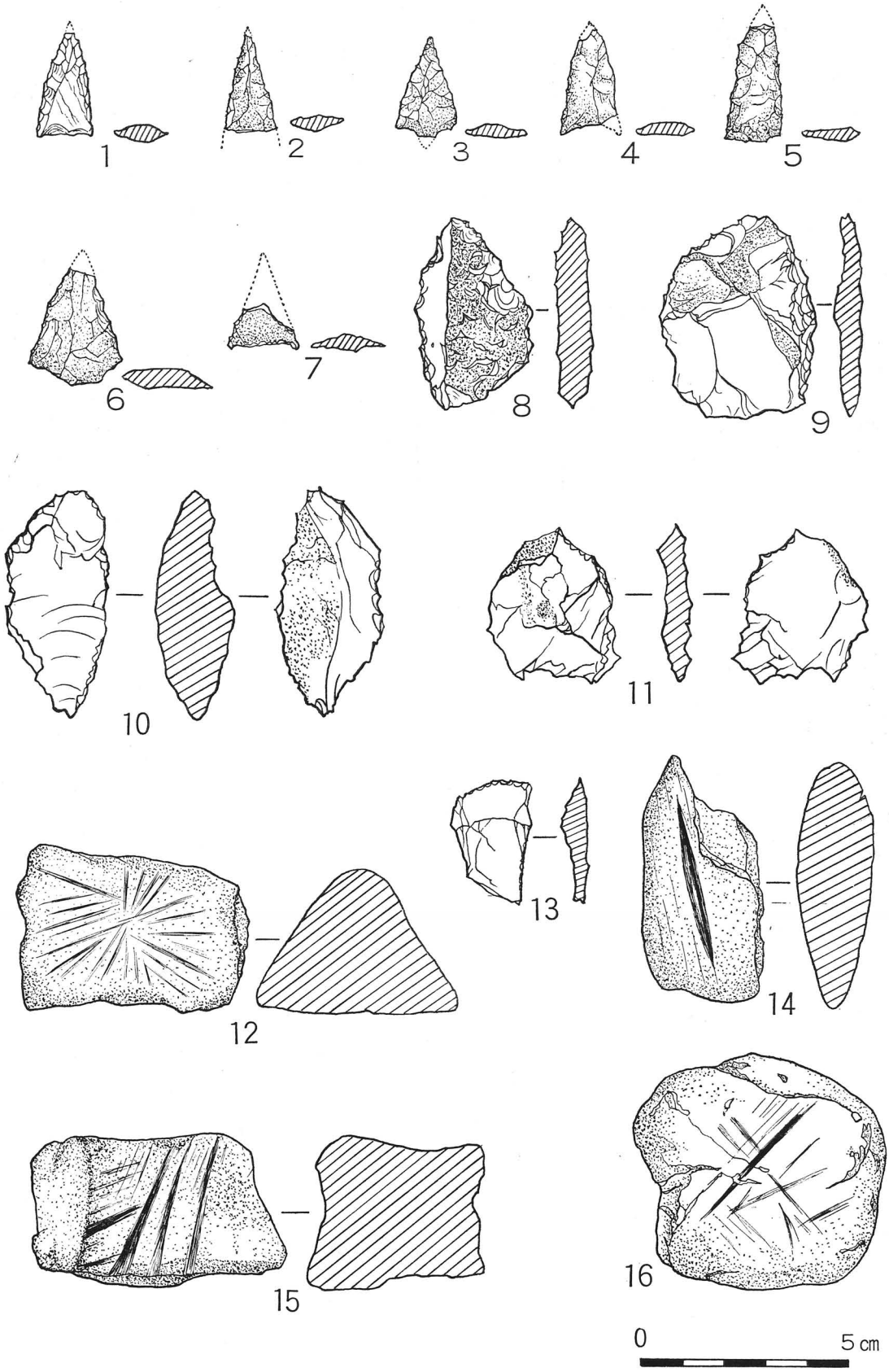
8. 砥石（挿図35の14図版22の３）

淡灰色の砂岩を用いた砥石で，金属を研磨したと思われる鋭い擦痕が４cmに亘り認められる。なお砥石は，この他に数例が出土している。（松田）

参考文献

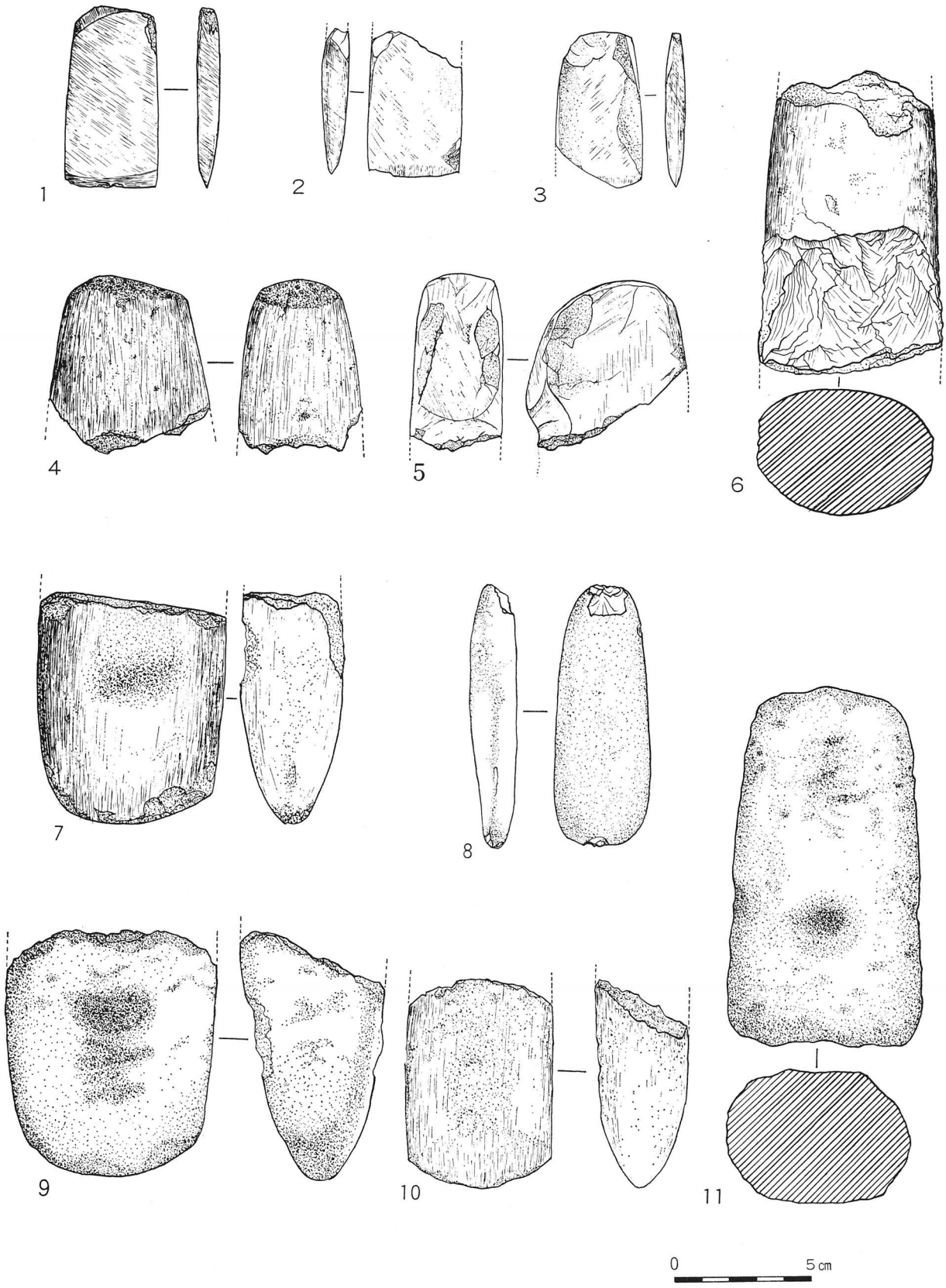
1. 松本慎一〔いちのみや考古№６〕一宮考古学会創立３周年記念号〝愛知県丹羽郡大口町発見の抉入石斧〟
2. 網干善教先生の教示によると良質のサヌカイトである
3. 豊橋市教育委員会〔瓜郷〕Ｓ38年
4. 彦根市教育委員会〔彦根市史〕
5. 多治見市教育委員会〔平尾遺跡・虎溪山遺跡〕
6. 朝日新聞社〔2000年前の日本弥生人展〕
7. 雄山閣版〔新版考古学講座〕原史文化上〝弥生文化〟
8. 河出書房新社〔日本の考古学〕弥生時代

挿図35　川崎遺跡・南方東遺跡出土石器実測図



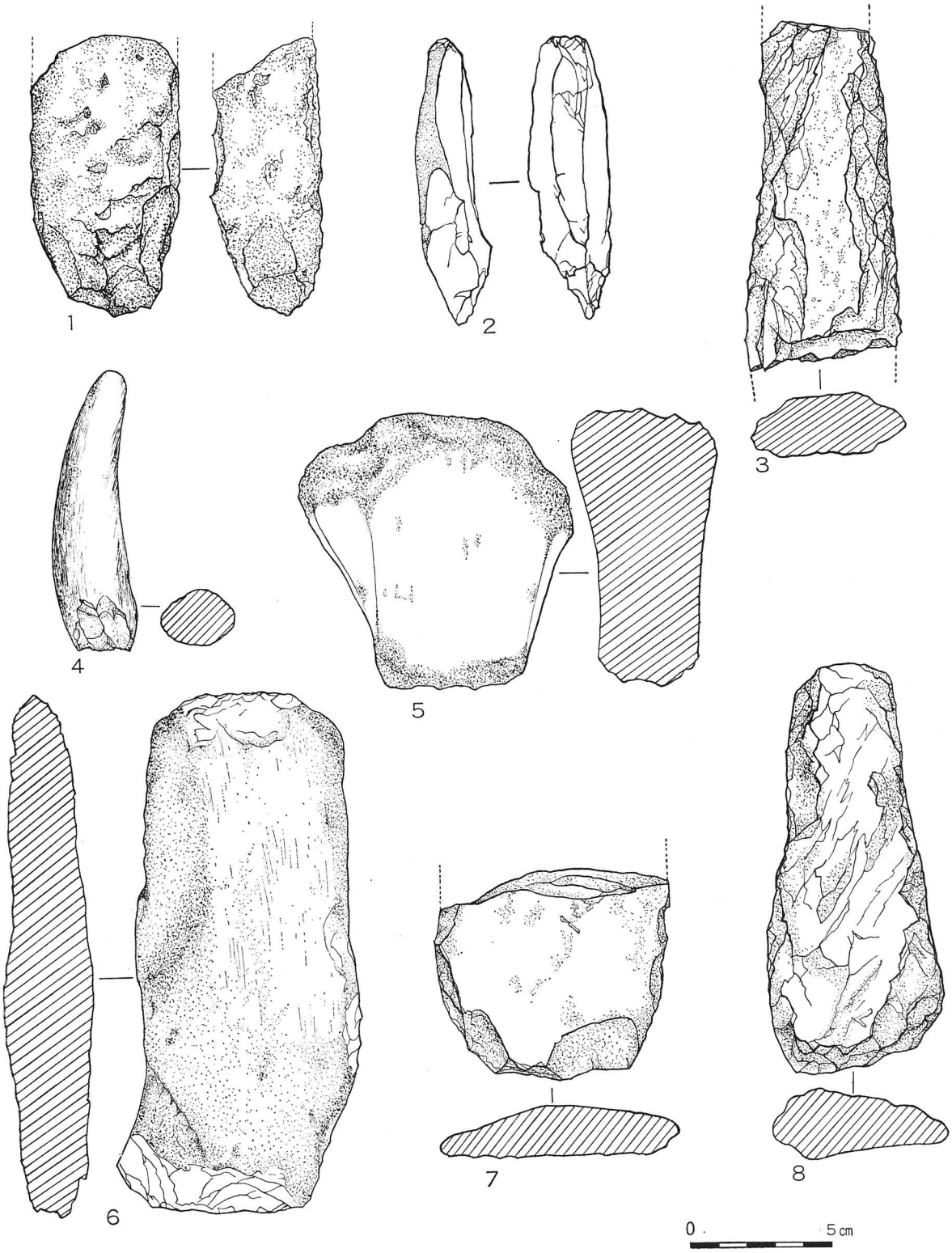
川崎遺跡出土　1.～7. 石鏃　8.～11.13.剥片石器　14. 砥石
南方遺跡出土　12.15.16. 砥石

挿図36　川崎遺跡出土石器実測図



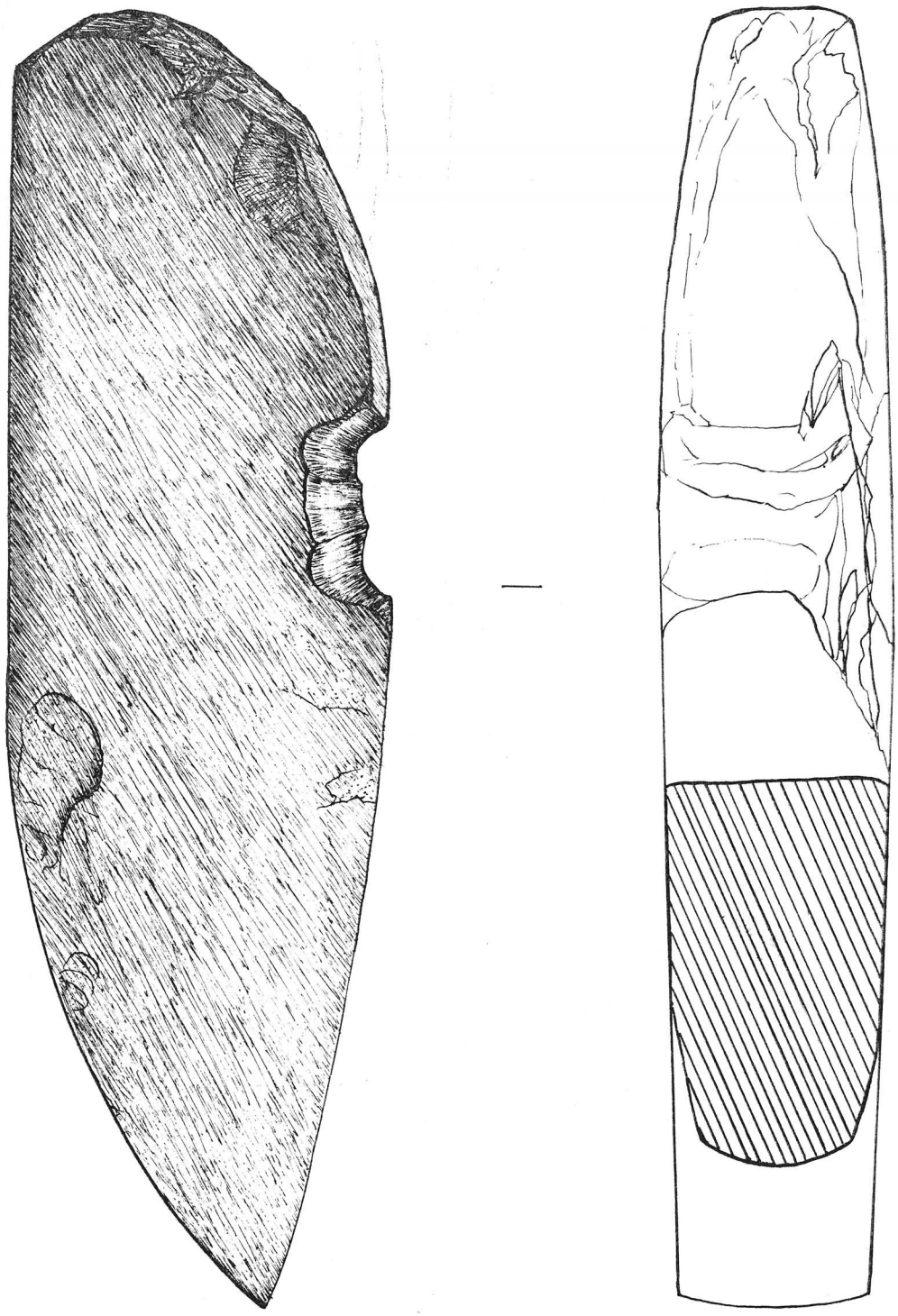
1.～10. 石斧類　11. くぼみ石

挿図37　川崎遺跡出土石器実測図



1.2.6. 打石器　3.7.8. 打製石斧　4. 乳棒状石器　5. 砥石（南方東遺跡出土）

挿図38　川崎遺跡出土石器実測図



抉入磨製石斧（実物大）

木　　器

川崎遺跡に於ける出土遺物の種類は，農耕具・機織具・生活用具・武器などの各分野に亘っている。

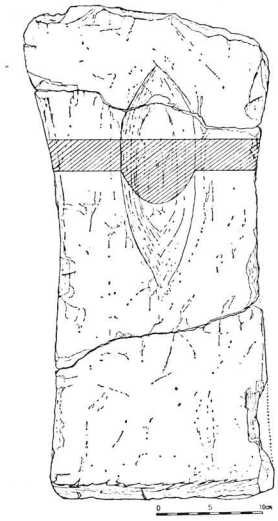
1. 丸木弓（挿図40図版25図版23の１）

弓は3点の出土を見た。針葉樹を用いた全長102.3㎝，弓幹の最も太い握りの部分で直径3.3㎝である。一端を細く削り尖頭部を作り出し，他の一端は２㎝のところを刳り削って弭とし，尖頭部の作り出された丸味の部分にもくびれがあり，（拡大挿図40）弦を２重にかけたものと考えられる。全身に亘って20カ所に２重巻きと，３重巻きとで巻飾りがされている。この巻飾りは黒く変色しているが桜皮のようである。これは飾りと弓幹を強靱にする目的の為のものであろう。途中で２カ所折れているが欠損部分皆無の完形品である。この他に断片の取り上げ不能のものと，巻飾りを施した丸木弓は３片の出土を見た。

2. 斧柄（挿図45の５，図版23の４）

斧柄は１点のみ出土している。把握部は正方形をなし，その部分が面とりされている。石斧挿入部は分厚く，緊縛をよくするように側縁を削ってある。

挿図39　川崎遺跡出土木器実測図



平　鍬

3. 梯子（挿図41）

自然木を用いて，枝を切り落し，その節の部分を足かけに利用されたものである。その間隔は下から20㎝，その上は30㎝，次は40㎝が２段で全部で５段をなしている。下端は土にささるように尖らせ，先頭部はやや丸く仕上げてある。全長205㎝，足かけの刳りの細い部分で４㎝，足かけの下の太い部分で10㎝である。材質は全面に亘り焦げていて，広葉樹の如くである。出土地点はＧ180表土より132㎝の最下部砂層に接していた。

4. 機織具（挿図45の1～4図版23の３，図版24の2.3）

同図２図版24の２は一端が欠損しているが膝であろう。材は針葉樹を使用している。

同図４は両端を削り出してある。同図２と同じ針葉樹を使用し，機織具の一部と思われる。同図３は断面方形をなし，全身に亘って20カ所に樹皮を巻いたと思われる痕が認められるが，痕跡のみで何が用いられたかは不明である。機織具かどうかは定め難い。

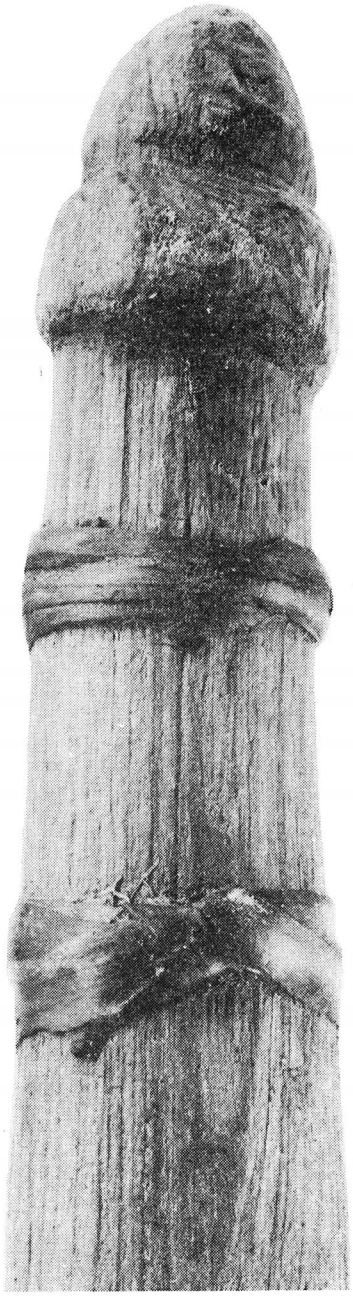
同図１図版24の３は両端にあけられた穴を中心とした円形部から中央にかけ細く削られている。やはり機織具の一部ではなかろうか。

5. 平鍬（挿図46図版24の８～14）

いずれも焼失により原形を知ることは出来ない。着柄孔は身に対してほぼ120度の角度をなし，鍬先とは反対の方向に傾斜をなして貫通している。その径は３㎝前後のやや楕円形に穿たれ，舟形隆起部の着柄部で3.5㎝に均一されているが，幅は５㎝から5.7㎝とまちまちである。

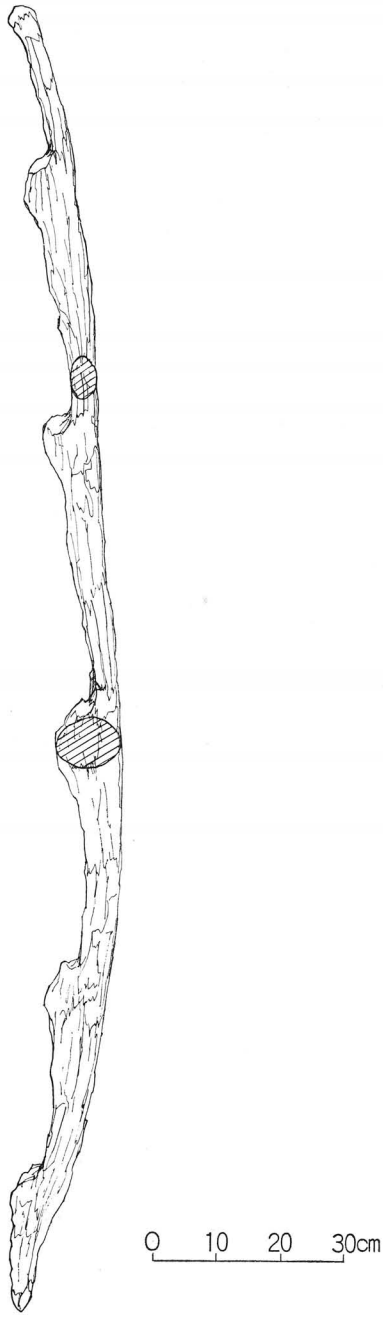
平鍬未製品は３点を数える。このうち挿図39図版24の10は全形を知り得る唯一のものである。全長46.9㎝幅着柄部で19.7㎝，鍬先に近いところで21.2㎝，舟形隆起部の厚さは着柄部で６㎝，幅は７㎝で，隆起部の尾は丸いままで終わっている。鍬先に近いところの厚さは2.9㎝で，材は広葉樹である。挿図46の５図版24の９は傷みが強く全体は不明である。また同図２図版24の11は残欠部で前記２点とほぼ同形状と思われる。挿図47の３は１点のみの出土例を見た狭鍬で左肩一部欠損しているが，全身19.4㎝，幅6.7㎝，着柄隆起部で，厚さ2.3㎝である。

挿図40　川崎遺跡出土木器実測図



弭と巻飾約2倍

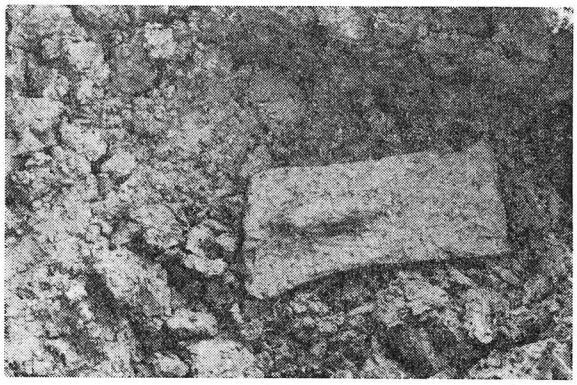
挿図41　川崎遺跡出土木器実測図



梯　子

挿図46の１図版24の12は鍬に類するものとしてあげられる。上部はやや丸味をつけて削られ，鍬先は約45度位の角度で作り出され，裏面の5.5㎝程から鍬先に向け刳られている。鍬先に近いところの厚さは2.8㎝である。

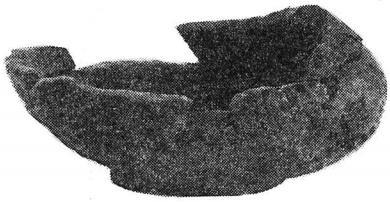
挿図42　川崎遺跡平鍬出土状態



6.　木鉢（挿図43，挿図47の４）

挿図４は生活用具のうち食器用と思われる唯一の出土例である。胴部口径11.5㎝，胴部最長19.5㎝，底部9.3㎝材は広葉樹である。

挿図43　川崎遺跡出土木器



木　鉢

7.　木面（挿図44，挿図47の２）

頭上に冠を載いた一見人面を思わせる木製品で，冠より目の部分かと思われる深彫したところとの中間，即ち額の部分と思われるところは，木皮肌そのままを残し，頬と思われる位置より下顎部分末端にかけて，逆三角形に細くなっている。裏面は平坦であるが３分の２あたりから斜に丸味を帯びて削られている。下部尖端より3.3㎝あたりに貫通した細い穴が見られる。

挿図44　川崎遺跡出土木器

木　面

冠の頂点には，厚さ0.8㎝，径2.5㎝程の丸い飾様の彫りが見られる。

全長14.2㎝，幅9.2㎝，材は広葉樹である。

8.　その他の木器類（挿図45の6，図版24の1.4～7）

挿図45の６は丸木の一方が断面楕円形に削られ，他方は細く尖らせてある。全長109,8㎝，尖端幅3.6㎝，中央の直径３㎝である。農具の一種かも知れない。

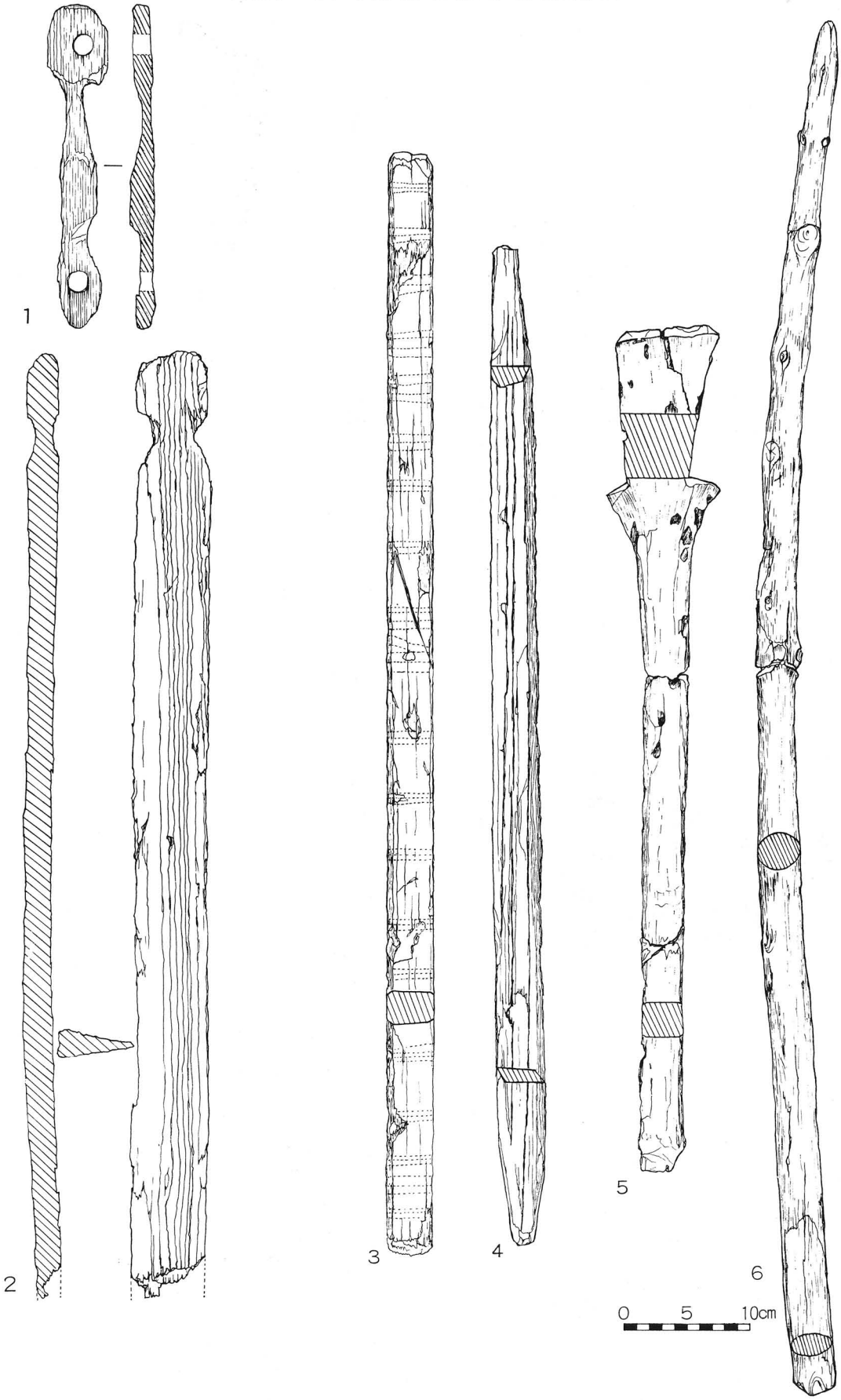
また平鍬の素材と思われる板材と，図版24の６のような長方形の下駄１点とその他の単なる木片等と下部尖端が，斜に数回に削られた柱状のものが出土した。前にも記したが表土下0.5m～1.5mより出土したこれらの木製品等の多くには各所に焦げ痕が見られる。

図版25の漁具柄は両端を細く削った針葉樹材で漁具の柄かと思われる。全長77.7㎝で途中10㎝程欠損が出土している。　（松田）

参考文献

1. 滋賀県教育委員会〔大中の湖南遺跡調査概要〕1967. 3
2. 彦根市教育委員会〔彦根市史〕
3. 豊橋市教育委員会〔瓜郷〕Ｓ38年
4. 紅村弘〔東海の先史遺跡綜括編〕Ｓ38年
5. 朝日新聞社〔2000年前の日本弥生人展〕
6. 雄山閣版〔新版考古学講座〕原史文化上弥生文化
7. 河出書房新社〔日本の考古学〕弥生時代
8. 読売新聞社〔日本歴史１〕日本のはじまり
9. 中央公論社〔日本の歴史〕別巻１
10. 斎藤忠〔日本歴史全集〕日本人の祖先

挿図45　川崎遺跡出土木器実測図

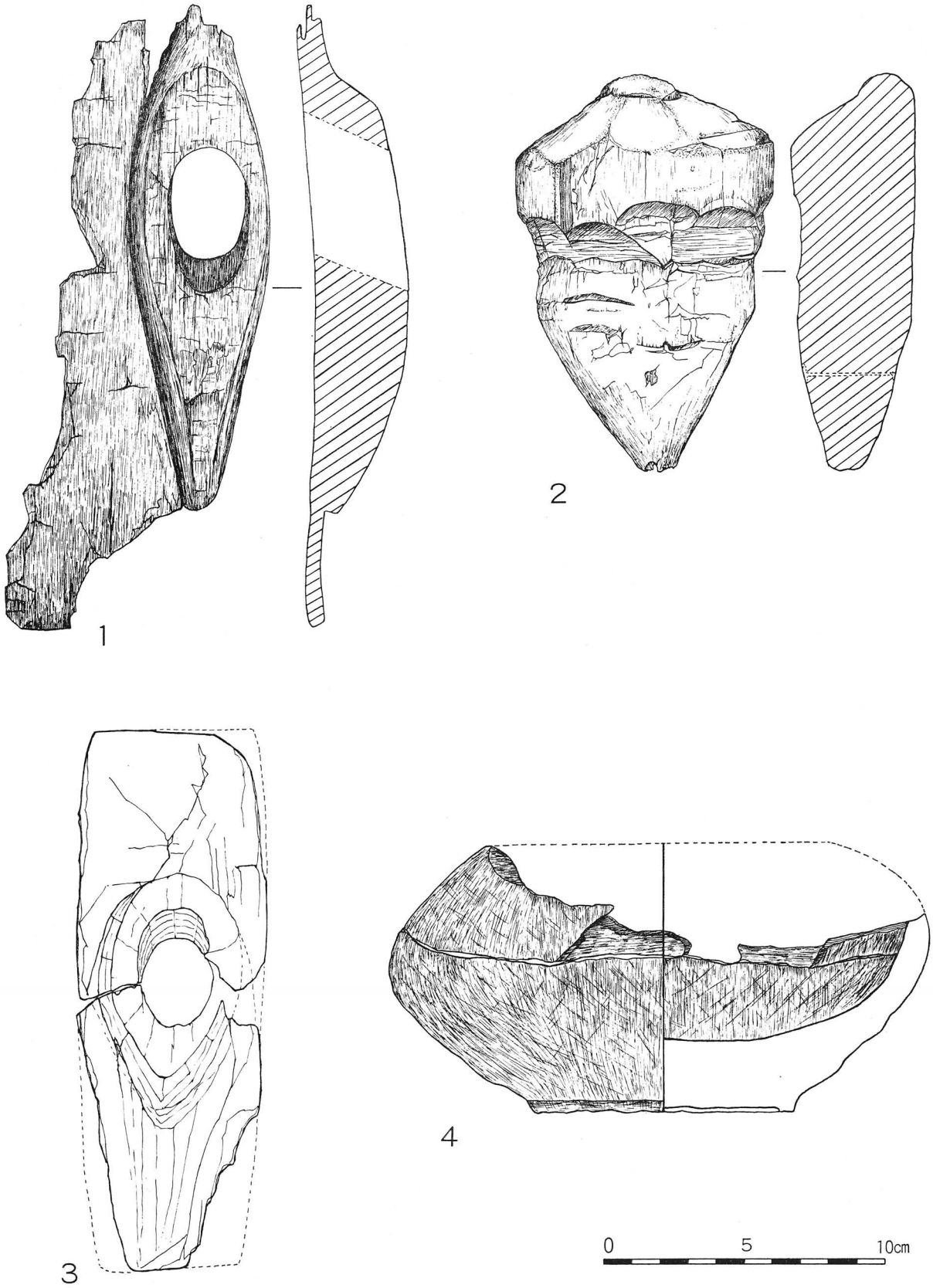


1.2. 約½ 木器　1.3 4. 織機具　2. 膝　5. 斧柄　6. 農具

挿図46　川崎遺跡出土木器実測図

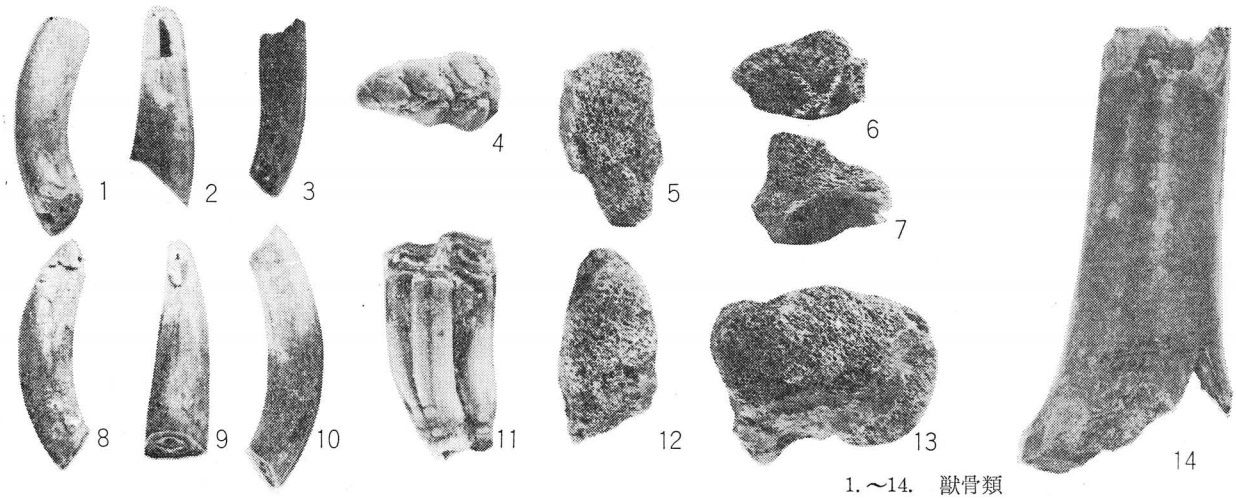
1.～5.　平鍬（2. 5. 未製品）

挿図47　川崎遺跡出土木器実測図



1.　平鍬　　2.　木面　　3.　狭鍬　　4.　木鉢

挿図48　川崎遺跡出土獣骨



1.～14.　獣骨類

第1表　川崎遺跡出土獣骨種別明細表

動物名	名称	色調	備考	挿図番号
ウマ	上顎右第2切歯	黄褐色		挿図48の1
〃	〃 右第1切歯	〃		挿図48の2
〃	〃 左第1切歯	黒褐色		挿図48の3
〃	〃 左第2切歯	黄褐色		挿図48の8
〃	〃 左第3切歯	〃		挿図48の9
〃	下顎左第3切歯	〃		挿図48の10
〃	〃 右第3切歯	黒褐色		
〃	上顎左第3小旧歯	黄褐色		挿図48の11
ウシ	下顎右第3大旧歯	黒褐色	未成獣	
〃	右前肢上腕骨頭	黄褐色	仇牛？	挿図48の13
〃	左後肢中肢骨	〃	キャノンボーンの破片	挿図48の14
イノシシ	上顎左第3大旧歯	〃	未成獣歯槽中のもの	
〃	〃 左第3大旧歯	〃	成獣になりかけ	
〃	下顎と思われる	〃	未成獣	
〃	下顎第3小旧歯			
その他の骨片	不明	黒褐色		挿図48の5～7 12

昭和46年9月京都大学理学部動物学研究室田隅本生先生の教示による

参考　出土した馬の門歯及び旧歯の観察から洋種系の新らしい種である。

自然遺物

獣　骨

本遺跡はグライ土層のため獣骨の遺存状態は良好であり，その色調も一部を除いては原色に近い様相であったが，出土して空気にふれることによって変色した。なおこれ等遺物は，京都大学理学部動物学研究室の医学博士田隅本生氏，同大学大学院生田中正昭氏ならびに岐阜県立海津高等学校教諭奥村潔氏，岐阜県立瑞浪高等学校教諭西本博行氏等に鑑定を依頼し，ご教示を得たものである。その結果は第1表に示すとおりである。また挿図49のような籾炭化物のかたまりが2個出土している。（田口）

挿図49　川崎遺跡出土遺物

籾　炭　化　物

む す び

川崎遺跡に於て，ピット状遺構及び柱状遺構杭状遺構と多量の土器片，石器を出土したのである。ピット状遺構は先にも述べたように，遺構の立地点が弥生式時代前期の遺物の最も多量に出土した底地の北部の微高地にあるが表土より約30cmの所であり，現存のあぜの下の堅い部分に弥生式土器片などが出土し，水田の部分は開田時に攪乱されていた。これ等の点より推察するとこの層の部分が当時の生活面と推察される。その南面に認められた底地の部分は，有機物の堆積層であり，河の曲流する部分に流入されたものと考えられる。特にその部分が明治初年の村絵図において知られるように，湾曲しているので遺物の堆積が多いのである。この他この地点で杭状遺構が認められている（挿図5.8）。また兵助の森の東南の地点柱状の残存遺構が認められたが，表土下約40cmであり，この部分の地層は荒れていて砂層の部分に残存していたが，その時期は推定しがたい。

次に，出土遺物は弥生式時代第一式土器類に類するものと，それ以外のものが僅か混入されている。これ等の外に東海地方にその文化の主体を置く水神平式土器が伴出している。これは三河，遠江などに知られる水神平式土器を主体とした中に少量の遠賀川式土器が伴出しているのに対し，遠賀川式土器を主体として，それに少量の水神平式土器が混在して出土する対照的な存在を示している。

次に，同地点出土の石器中，抉入石斧の出土が見られる。石鏃その他の石器類が少量出土している。

兵助の森を中心として出土した土器は，土師式土器と須恵器であるが，この地点はかなり複雑な出土状態であり，時期的にかなり時間差があるが出土はG 125地点以外はそれぞれのグリッドの同一層からでもレベル差が示すように，上下混同して出土している。

又，自然遺物中馬の門歯などは外国種のものであり，その他陶器などの小破片なども出土している。主なる遺物の時期は弥生式時代前期及び奈良期に属する須恵器が出土している。なお後記の結語の所で総括して述べる事にする。（大江）

Ⅲ 南方東遺跡出土遺物

土　　器

本遺跡からの出土土器は，少量の弥生式土器・土師式土器，須恵器に大別される。出土状態及び層位は川崎遺跡に隣接地であるので前に一括して述べた。

弥生式土器（挿図16の２図版９の３）

弥生式土器は，壺形土器の胴部と少量の破片が出土している。

土師式土器

土師式土器には，無文の壺口縁部，甕口縁部，高坏形土器の脚部，器台・坩・内面に暗文のある坏等の破片が少量出土している。

なかにＳ字状口縁甕形土器の口縁部（櫛目文・櫛目刺突文・無文）と同土器の脚台と思われるものが出土している。また，甑の把手と思われるものが若干出土している。

ほかに径は約８cm，器高１cm５mmの「かわらけ」が出土している。（田口）

須　恵　器

南方東遺跡における出土遺物は，坏・蓋坏・蓋・壺・甕等がある。

1.　坏（挿図50の1～5．7図版20の５）

挿図50の１図版20の５は口径13.4cm，高さ3.2cm，青灰色，底面外部に渦巻痕あり，内部に，指圧痕が残っている。高台はない。

挿図50の２は口径11.5cm，高さ4.4cm，灰白色，やや焼成不充分か軟質を示している。

挿図50の３は口径11.5cm，高さ4.3cm，灰黒色，底部内面に指圧痕あり，胚色表皮のほか，内部は，赤褐色，緻密な質である。

挿図50の４は口径12.0cm，高さ3.7cm，灰青色，高台がつけられている。高台の高さ0.4cm，見込はほぼ扁平，高台は外へ張り出した形となり，胚質はやや粗目。

挿図50の５は口径16.4cm，高さ4.3cm，内面灰青色，外面灰黒色で一部に降灰が熔着している。見込は平で，つけ高台，たたみつきの部は凹んでいる。高台内に渦巻状成形痕がある。

挿図50の７は口径9.0cm，高さ3.9cm，黄灰色，やや斜めにカーブをえがいて立上がり，蓋受0.7cm，蓋受は内へ「く」の字形に曲がっている。

2.　蓋坏（挿図50の６）

口径11.3cm，高さ3.3cm，灰青色，見込に指圧痕がある。表皮のほかは暗褐色に焼けているが，部厚いところは灰黒色を残している。

3.　蓋（挿図50の８～14図版20の４）

挿図50の８は口径9.4cm，高さ3.4cm，灰青色，内反しながら口縁部につながり，口縁をほぼ垂直に下げている。

挿図50の９は口径10.0cm，高さ3.0cm，暗灰色，多少の反りをもった口縁部が，ほぼ垂直に下がっている。

挿図50の10は口径10.0cm，高さ3.9cm，灰青色，微砂質胚土で，心部まで灰青色に焼けている。

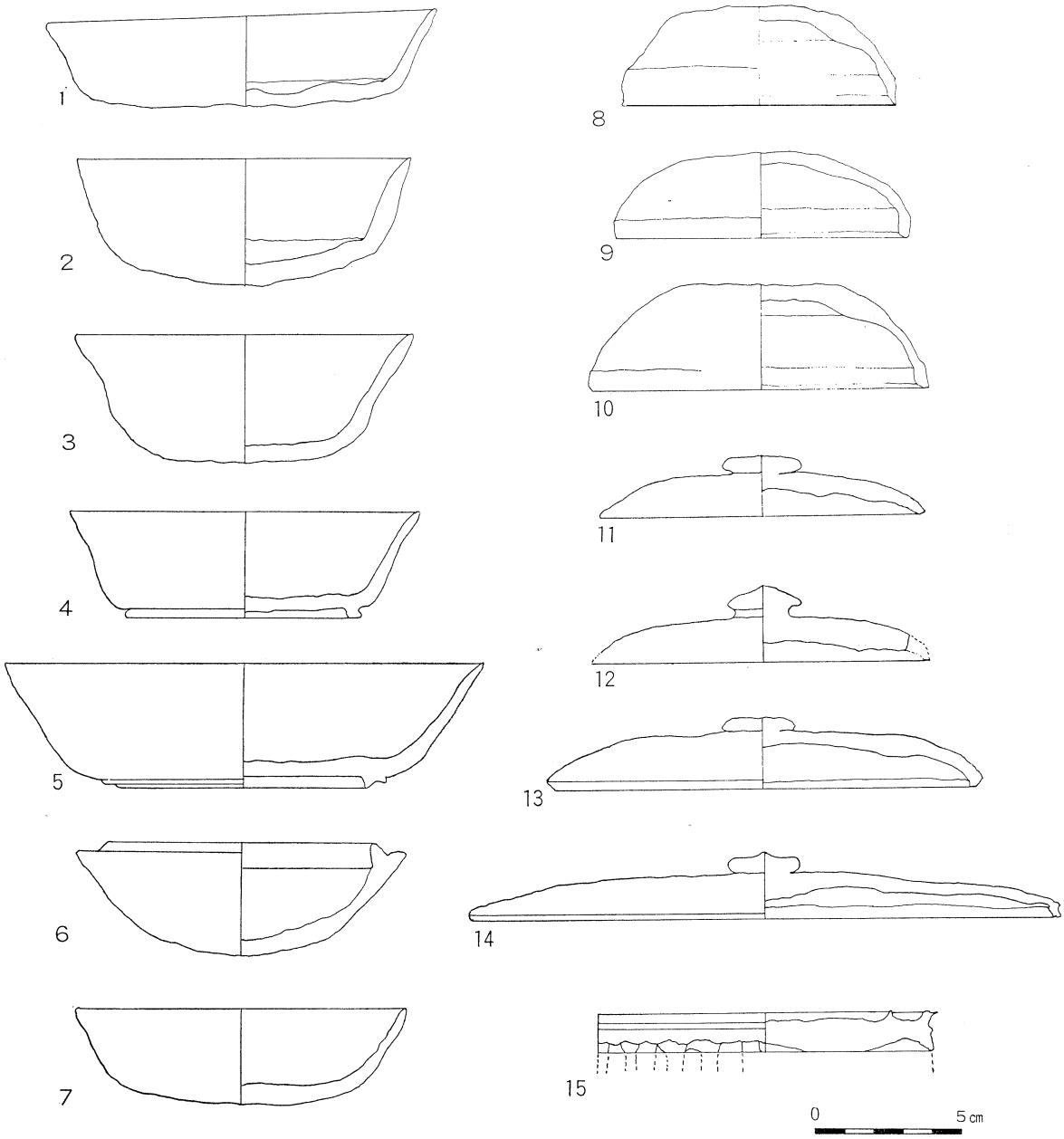
挿図50の11は計測不能，灰青色，表皮のほかは赤褐色を呈している。つまみは径3.0cm，高さ0.6cmである。

挿図50の12は計測不能，灰白色，内部まで灰白色に焼けている。つまみの先端部は尖っている。

挿図50の13図版20の４は口径14.8cm，高さ2.5cm，灰白色，外面に一部降灰が熔着している。ボタン状のつまみがついていて，つまみの径2.5cm，高さ0.4cm。本体は比較的ゆるいカーブで端部に達し，先端は内にほぼ45度で内側に曲がっている。内面には成形時の指紋痕が残っている。

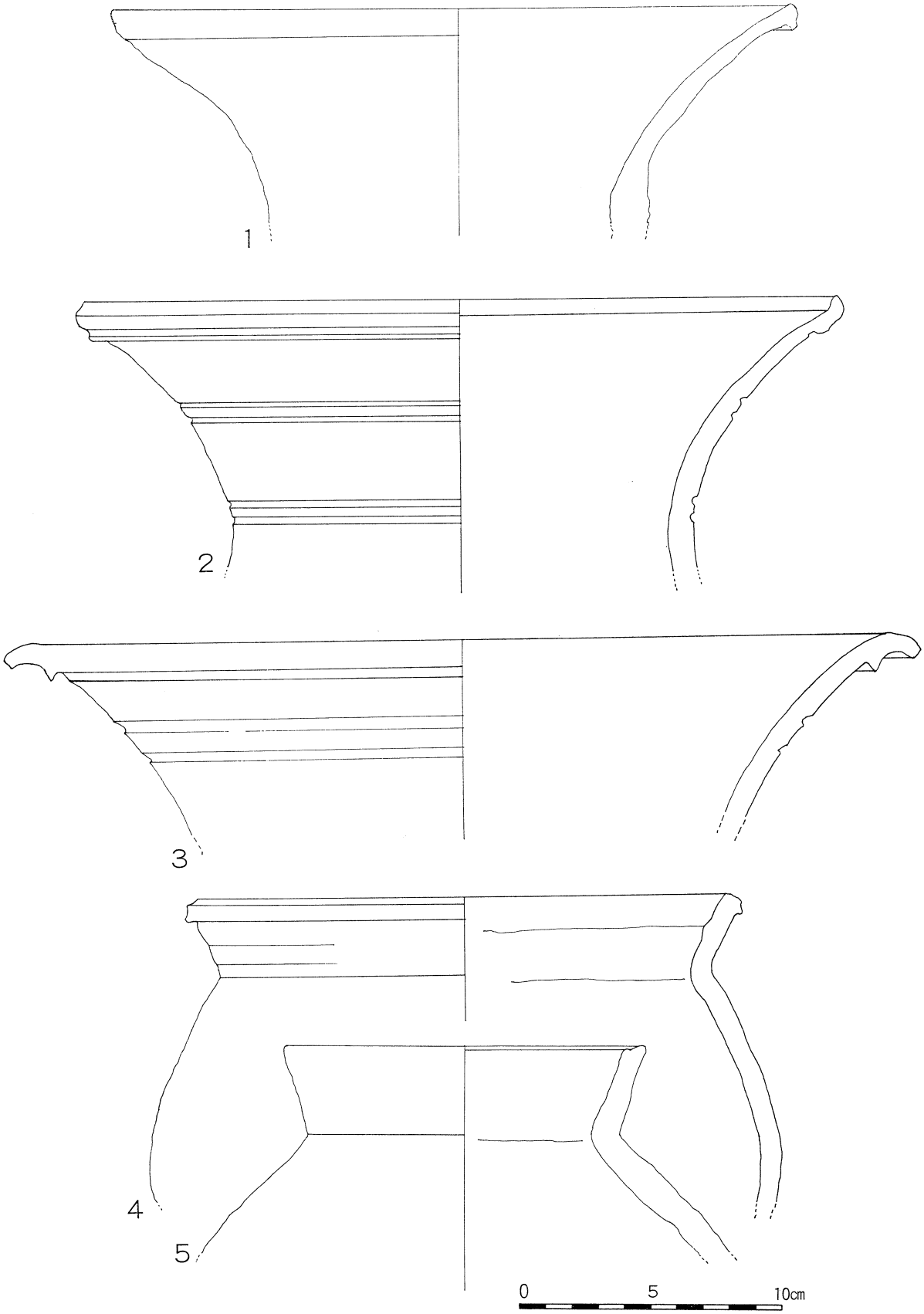
挿図50の14は口径20.2cm，高さ2.3cm，青灰色，つ

挿図50　南方東遺跡出土土器実測図



須恵器　1.～6.　坏　8.～14.　蓋　15.　円面硯

挿図51　南方東遺跡・南方遺跡出土土器実測図



須恵器　1.3～5 南方東遺跡　2. 南方遺跡出土

まみの径2.1cm，高さ0.7cm，内面に渦巻状ひも作りの痕を残している。ゆるいカーブで下がっている本体の端部はほぼ垂直になっている。焼成火度はやや低いものか，質が軟かい。

4. 円面硯（挿図50の15図版20の１）

径11.8cm，青灰色，海の部に使用された墨痕が付着残存している。

5. 短頸壺（挿図51の4.5）

挿図51の４は口径21.0cm，高さ不明，灰白色，外面の肩から下にかけて，粗目の仕上げをした上に，一部に叩き文をつけている。内面には当板を使っているが，痕跡は浅い。

挿図51の５は頸の一部で径13.8cm，暗灰色，「く」の字状に曲がっている。炉壁からの落下物が付着している。厚目の指頭圧痕のある成形法を採り，内部に当板痕がみられる。

6. 壺（挿図51の1.3）

挿図51の３は口縁の一部で径約35cm，灰白色，外反しながら立上がり，口縁部には突帯一本がある。口唇部は丸味をおびており，頸部に1.2cmをへだてた２本の沈線文がある。

挿図51の１は径約26cm，口縁の一部で暗灰色，器胚の断面は中心部が赤褐色，これをとりまく暗灰色，更にこの外部を赤褐色層で包んでいる。（この互層状の胚色は焼成時に強還元雰囲圏と酸化雰囲圏が繰り返えし与えられたことと考える。）

以上のほか胴部に２本の沈線1.1cmの間隔内に５本の櫛目をもった波状文のある破片が発見されている。

7. 底部

径約10.6cmの壺底部と思われるものが出土している。

8. その他

灰釉陶器の高台，を高台にもみがら痕が見られる山茶碗片，天目碗片等が出土している。（古川）

石　　器（挿図37の５）

南方東遺跡より出土した石器は砥石１点である。やや荒い砂岩製で，表裏共使用されている。（松田）

む す び

南方東遺跡は川崎遺跡の隣接地である兵助の森の北東の部分における，比較的有機物層の深い地点において弥生式土器片と須恵器片が混在して出土したのみで，他の地点は耕作土層下が粘土層になっているため耕作土中に磨耗した少破片が出土したのみであった。後記の結語の所で総括して述べる事にする。（大江）

Ⅳ 南　方　遺　跡

南方遺跡の立地と地形

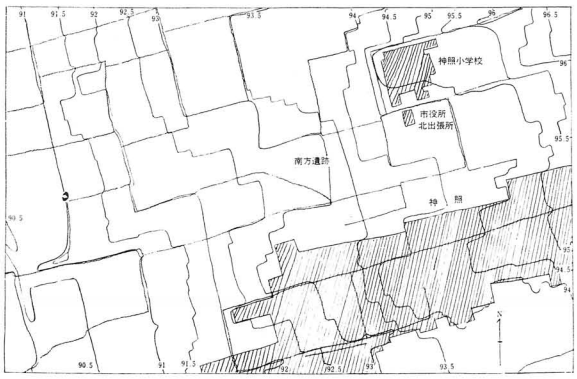
本遺跡は前述の南方東遺跡のほぼ北西方，約700m，神照部落の北約300mの水田地帯に，東北東から西南西にかけ，約100mにわたる地域をしめている。

東北部がやや高く，西南部にむけてゆるやかに傾斜しており，殆んど目立った起伏はない。

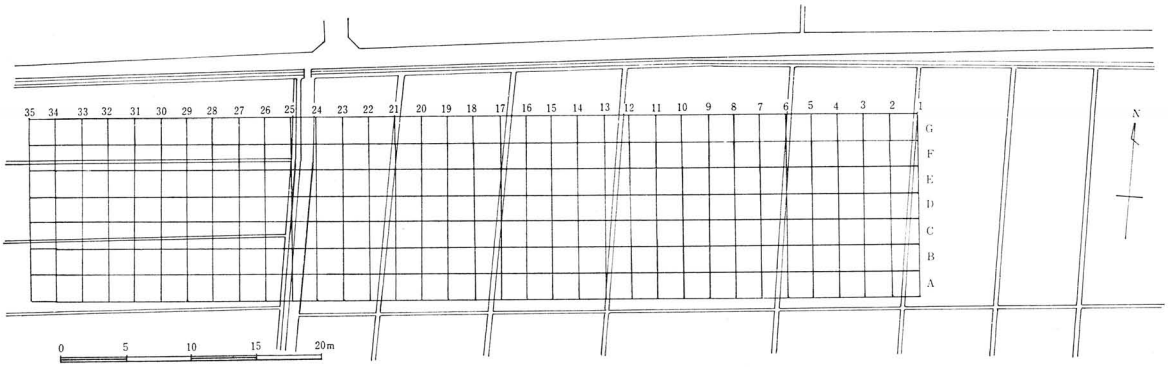
また，本遺跡は南と北の低湿地にはさまれ，つねに流路を変えながら流れた姉川の運搬堆積した砂礫，粘土などによって形成された微高地に位置している。

（鹿野）

挿図52　南方遺跡地形図



挿図53　南方遺跡グリッド設定図

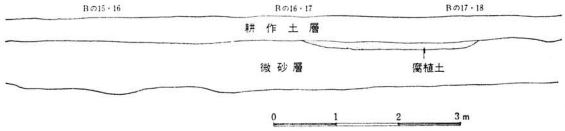


出土状態

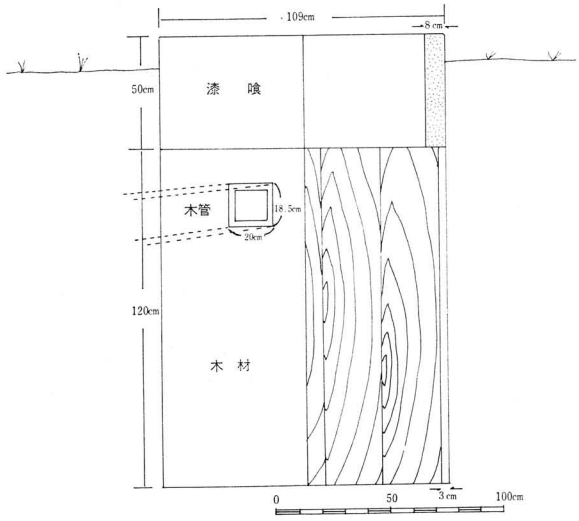
南方遺跡は東西100mを発掘地点として調査を進めたが，G 114附近に於て表土下40cm～65cmに10cm～15cm程の黒色有機物層（腐植土）が帯状に認められた。この黒色有機物土層はやや南面に傾斜して，その下層はいづれも砂層に接していた。

然しこの黒色有機物土層は極めて小範囲に止まり，

挿図54　南方遺跡層序実測図



挿図55　南方遺跡井戸実測図



出土遺物はG 114を中心にS字状口縁部，器台などの土器破片若干の出土を見た。また研磨痕のある砥石と扁平な砥石の出土の他は，記録に止めるものは認められなかった。G 97に江戸時代の古井戸があり，（挿図55）この湧水を灌漑用にし，木製角枠を用いて北西方向に導いてあった。

南方遺跡の層序は砂層より青色粘土層に至りその下層に微砂層が認められる地点が大部分を占め，出土遺物は僅少であった。（松田）

出土遺物

土　器

本遺跡の出土土器は，ほとんどが古式土師器の小砂片のため，全体の器形を知るまでに至らないが，その部分から器形を推定するに，壺形土器・甕形土器・高坏形土器・器台等とみられる。その他須恵器片が出土した。

1. 壺形土器

わずかに，その口縁部とみられるもの数点と，ほかに胴部と思われる少破片が50点ほど出土している。

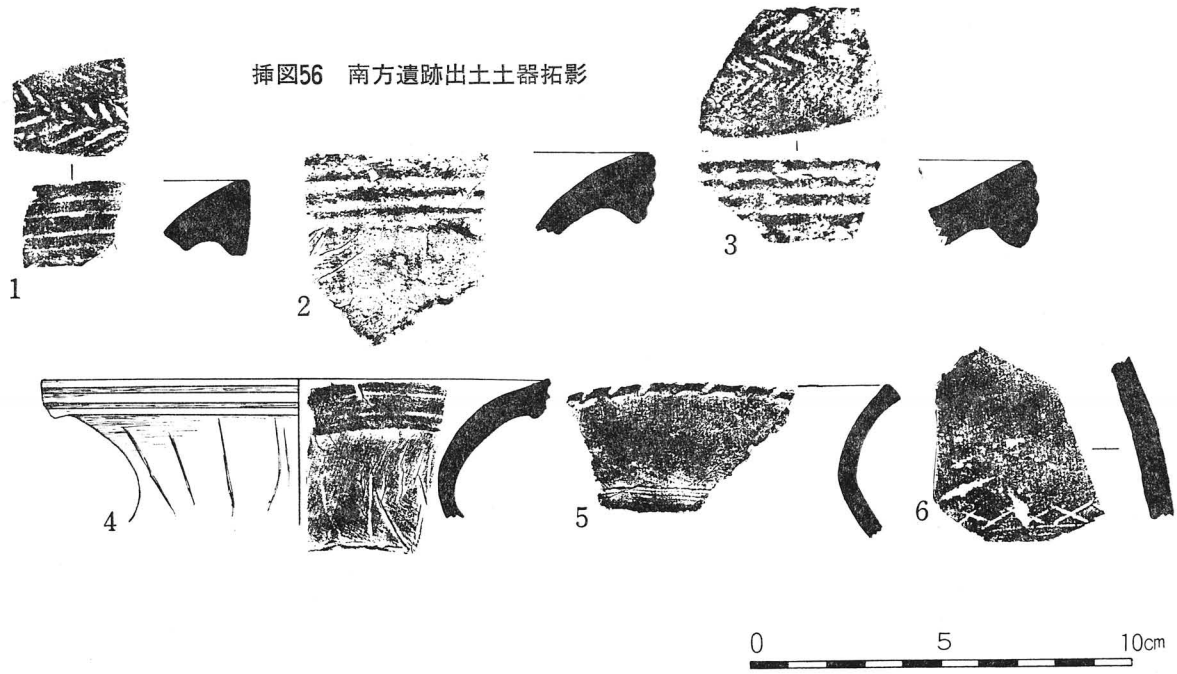
口縁部は挿図56の1～3にみられるごとく，口唇部がたれ下る巾広い端面を成形し，その外面には，3条から4条のヘラ描き平行沈線が施され，内面にはには稜杉形の連続文が施されている。器面の色調は，胎土が黄褐色で外面には朱彩が施され，いわゆるパレススタイルの朱彩土器の口縁部と推察される。また，挿図56の4にみられる口頸部にたての沈線の施されたものもある。

胴部破片は，判別できるものによれば，その外面には，ヘラ描きによる平行沈線と羽状の連続刺突文が施され，器面は腰部まで朱彩が施され磨きだされている。内面は，なで目仕上げで，胎土は黄褐色のものがある。これらは，さきの口縁部の胴部と思われる。

2. 甕形土器

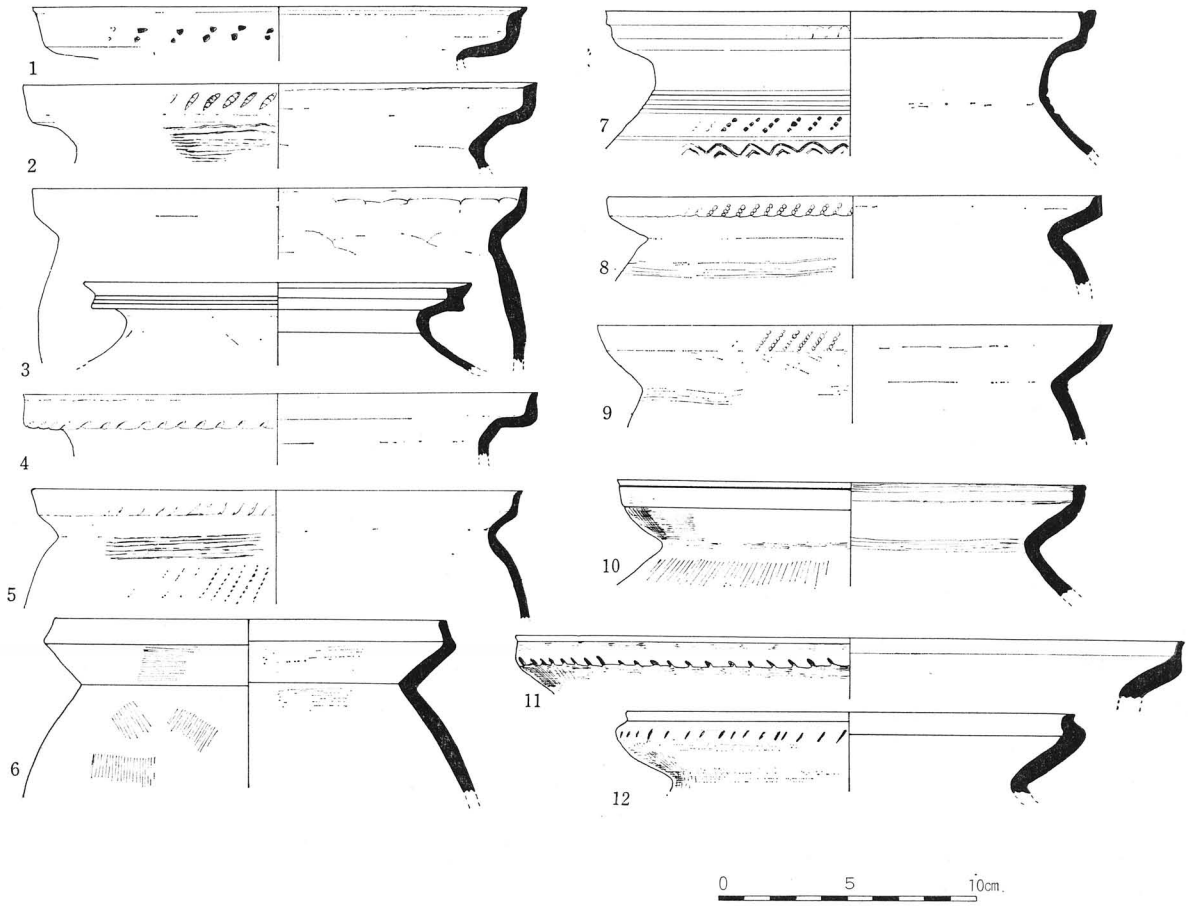
甕形土器の口縁部は，胎土灰褐色の無文のもの（26点），胎土黄褐色，口唇面に刺突文（挿図56の5）のあるもの（9点），胎土赤褐色，外面を磨きだした内面になぜ目の施されたもの（63点），それに本遺跡の特徴ともいうべきS字状口縁をもつ甕形土器の口縁部（96点），胴部（165点）及び脚部（20点）と思われるものがみられる。

S字状口縁甕形土器は，口唇部が角ばったものから，ゆるやかなカーブを描き口唇部をつまみ上げて尖らしたものに分けられる（挿図58の1～11．13．14．15．20～22，挿図57の1～12）。口唇部の角ばったもののなかには，挿図58の7及び22，挿図57の7にみられる



挿図56　南方遺跡出土土器拓影

挿図57　南方遺跡出土土器実測図



ように，口唇面の面とり部に1～3の沈線があるものもある。

口縁部の文様は無文のものから1～7個の刺突列点文を施したもの（挿図58の1～3．　5～9，15.20，挿図57の 1. 2. 5. 8. 9)，同部立上り部の下端に刻目の連続文を施したもの（挿図58の21　挿図57の 4. 11）がある。またこれらの刺突列点文のなかには，三角状刺突（挿図58の2）と小丸二ツ文（挿図58の6と57の1）がある。

口縁部の無文のものは，器面整形のためのなぜ目がみられる（38片)。

同土器の胴部破片は，挿図58の 13. 14. 17～19. 22. ～30にみられるように，櫛描きによる波状文・櫛目文の連続刺突文（列点は 4. 6. 7. 8 がある)，櫛目文の平行線文などがみられる。

また，内外面を刷毛目文または櫛目文で整形しているもの，外面を刷毛目文と櫛目文または条痕で整形しているものがある（約100点)。

同土器の脚台と思われるものは挿図59の4～10にみられるように，外面に条痕のあるもの，磨きだされたもの，内部に暗文のあるもの，脚台底部の下端がわずかに内反するもの（同図5. 7）等がある。

以上のべたS状口縁甕形土器の破片は，いずれもススの付着がいちじるしいので，おそらく煮沸に使用したものであろう。胎土は先の壺形土器とあわせて，石英粒の含まれた砂質粘土を用いており，そのX線回折図は挿図60に示した通りである。

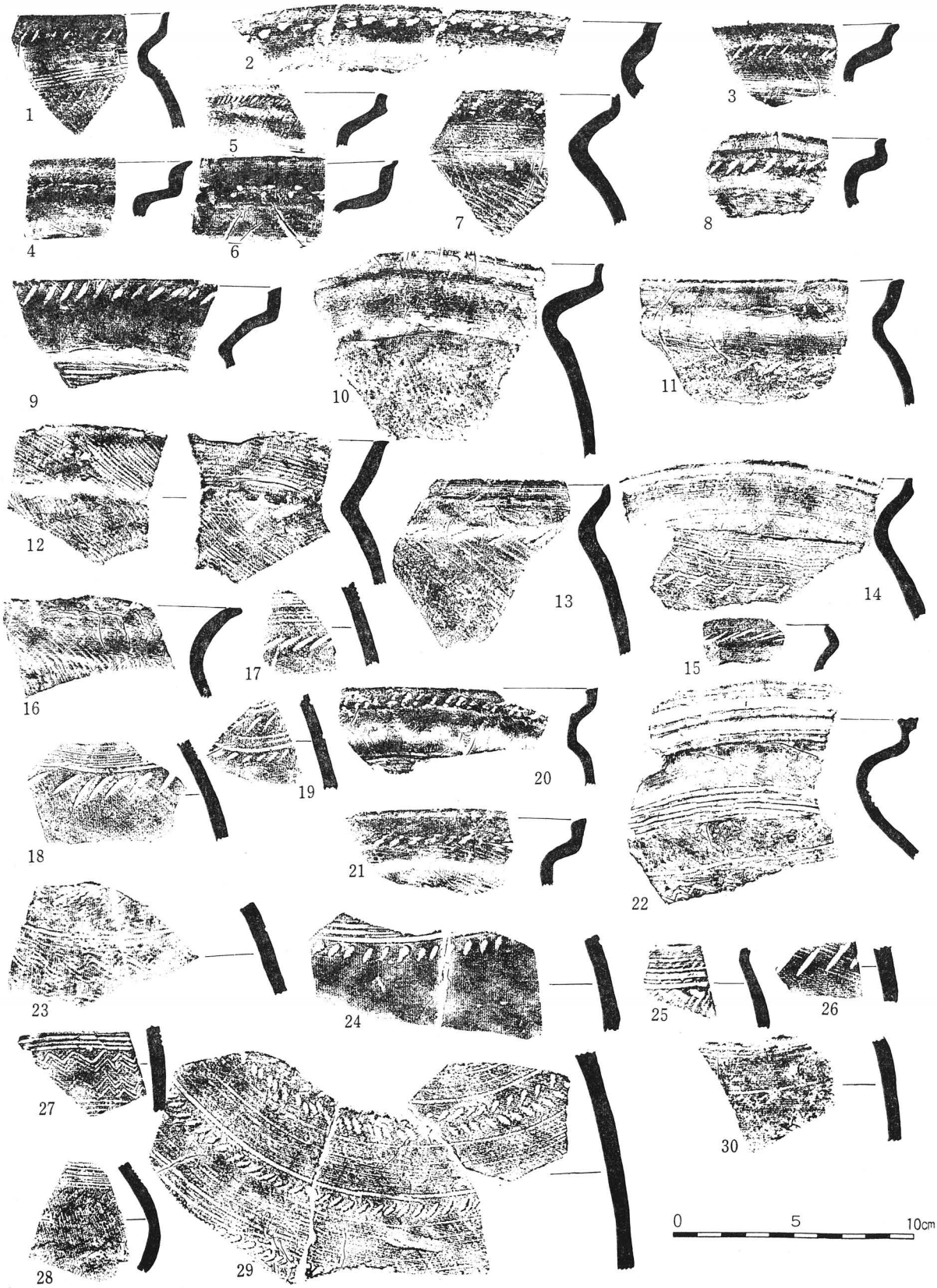
3.　高坏形土器

ほとんどが小破片のため，その器形は推定によるものであるが，脚部と思われるもののなかには外面ヘラ仕上で黄褐色のもの，内面には暗文の認められるものがあり，坏部と思われるもののなかには，稜の認められるもの，丸味をおびたものなど183点がある。

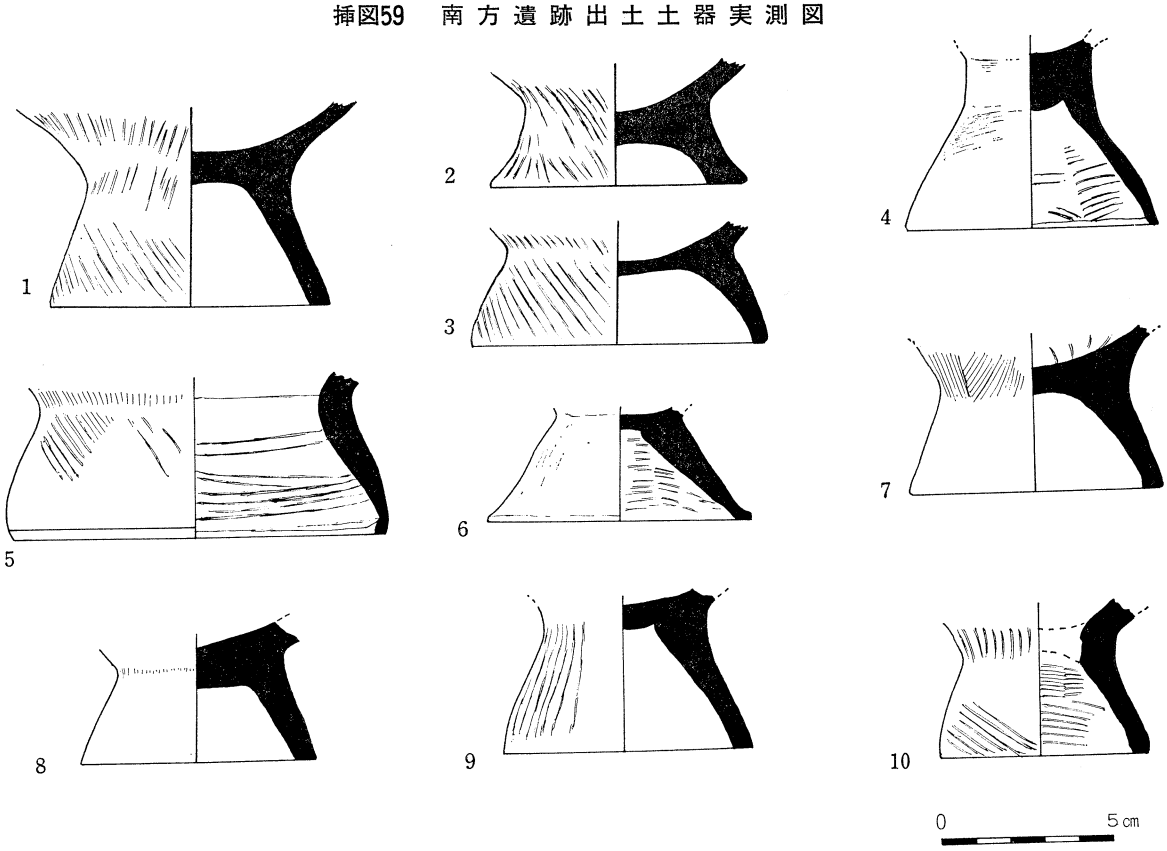
4.　器　　台

器台には，ほとんどは小破片である。台部は赤褐色をなし，口縁の厚さ 5㎜以上で口唇を面とりしたもの，口唇部から凹部へ放射状の暗文を施したものなど

挿図58　南方遺跡出土土器拓影



挿図59　南方遺跡出土土器実測図



があり，脚部は筒状に穴が通じているもので，外面ヘラ仕上げの胎土は同じく赤褐色をしている。そのほか，外面をヘラで仕上げ，内部を櫛目で整形しているものがある。

5. その他

以上のほかに，小破片であるが丸底のものが3点出土している。（田口）

須恵器

甕（挿図51の3）口縁の一部で暗灰色，頸部に2条の沈線があり，その間隔4.3㎝，口縁部は口辺の一部を外方へ折り曲げ内側へ巻きこんだ成形をとっている。表皮部暗灰色のしたに褐色部があり，心部は灰青色となっている。

その他同類，同質の甕の破片が24点出土している。又，平安末期の灰釉陶片，鎌倉期の高台内反の山茶碗小破片が2個出土している。（古川）

石器

石器類に於ては，特に注意すべきものは発見されなかったが，南方遺跡より挿図35の12. 15. 16.の砥石の出土を見た。3点共砂岩質を用い12. 16は研磨痕がいずれも放射状をなし，15は同一方向に3本の鋭い研磨痕を止め，前記2点より一層痕跡は明確である。3点共金属性のものを研磨したと思われる。その他に縦18㎝，横30㎝，厚さ2.5㎝の扁平な砂岩製の砥石が出土している。これは一定方向に無数の擦痕が見られ，やや研き減りした面が一部にあるが全体に平坦で両面共使用されている。（松田）

むすび

本遺跡においては，層序が全般に亘って耕作土層下に微砂層あるいは砂層となり，その耕作土層と砂層の一部分に黒色有機物層が認められ，その部分よりS字状口縁をなす古式土師器に編年されるものの小破片の土器が少量出土したのと，須恵器片が少量出土した，石器としては砥石が4点出土した。また江戸時代に築かれたと伝えられる古井戸が残存していたが井戸内部よりはなにも出土しなかった。（大江）

主要遺物出土測定記録表

第2表の1

分類 / 遺跡名・種別	遺物名	遺物No.	G No.	レベル	BM ±	表土標高	表土よりの位置（深サ）
川崎 縄文土器		835～1	1065	193cm	(No.5)+65cm	95.50m	78cm
〃 〃		915～1	1071	193	〃 〃	〃	〃
〃 弥生土器	壷	552	1049	178	〃 +63	〃	65
〃 〃	〃	561～3	1061	221	〃 +78	95.49	92
〃 〃	〃	563～2	1053	221	〃 〃	95.50	93
〃 〃	〃	609～1	1024	250	〃 +75	95.38	113
〃 〃	〃	690	1061	220	〃 〃	95.49	94
〃 〃	〃	702～1	1059	244	〃 〃	95.50	119
〃 〃	〃	712～2	1054	216.5	〃 〃	〃	91
〃 〃	〃	725	1061	221	〃 +78	95.49	92
〃 〃	〃	733～6	1060	221	〃 〃	〃	〃
〃 〃	〃	757～1	1059	250	〃 +75	95.50	125
〃 〃	〃	819～1	1071	250	〃 〃	〃	〃
〃 〃	〃	860～1	1060	251	〃 +70	95.49	130
〃 〃	〃	880～7	1061	236	〃 +75	〃	110
〃 〃	〃	921～8	1060	248	〃 〃	〃	122
〃 〃	〃	921～10	〃	221	〃 +78	〃	92
〃 〃	甕	355	1096	270	〃 +60	95.05	115
〃 〃	〃	545～3	1056	173	(No.4)+68	95.50	42
〃 〃	〃	662～2	1063	249	(No.5)+81	95.49	117
〃 〃	〃	721～3	1061	230	〃 +78	〃	101
〃 〃	〃	739	1060	246	〃 +75	〃	120
〃 〃	〃	756～10	1065	256	〃 〃	95.50	131
〃 〃	〃	768～1	1059	173	〃 +65	〃	58
〃 〃	〃	768～2	1059	247	〃 +75	〃	122
〃 〃	〃	856～1	1061	250	〃 〃	95.49	124
〃 〃	〃	856～2	〃	243	〃 +80	〃	112
〃 〃	水神平式類	559～1	1013	236	〃 +81	95.34	89
〃 〃	似土器	662～7	1063	249	〃 〃	95.49	117
〃 〃	〃	691～1	1059	198	〃 +75	95.50	73
〃 〃	〃	761～2	〃	249	〃 +81	〃	118
〃 〃	〃	940～1	1050	245	〃 +80	〃	115
〃 〃	布目圧痕	723～6	1061	240	〃 +76	95.49	113
〃 〃	〃	905～1	1051	243	〃 +75	95.50	118
〃 〃	蓋	622～1	1078	236	〃 +60	〃	126
〃 〃	〃	1170	1071	230	〃 〃	〃	120
〃 土師器	こしき	188	123	199	(No.4)+79	95.64	70
〃 〃	碗	385	180	281	〃 +85.5	〃	146
〃 〃	杯	217	124	270	〃 +73	〃	148

第2表の2

遺跡名・種別＼分類	遺物名	遺物No.	G No.	レベル	BM ±	表土標高	表土よりの位置（深サ）
川崎 土師器	杯	261	125	192cm	(No.4)＋73cm	95.64m	68cm
〃 〃	坩	272	134	204	〃 〃	〃	82
〃 〃	坩	270	134	204	〃 〃	〃	〃
〃 〃	〃	332	151	233	〃 ＋70.5	〃	114
〃 〃	〃	430～12	194	282	〃 ＋120	〃	113
〃 〃	坩	257	125	193	〃 ＋73	〃	70
〃 〃	〃	279～1	122	〃	〃 〃	〃	〃
〃 〃	〃	1178	1051	223	(No.5)＋60	95.50	113
〃 〃	小鉢	312	159	258	〃 ＋70	95,65	152
〃 〃	小皿	30～1	98	252	〃 ＋73	〃	143
〃 〃	碗	456	180	240	(No.4)＋61	〃	130
〃 須恵器	蓋	233～1	267	216	〃 ＋88	95.60	74
〃 〃	坏	233～2	〃	〃	〃 〃	〃	〃
〃 〃	壷	45	124	212	〃 〃	〃	70
〃 〃	長頸口	77	231	231	〃 ＋61	〃	116
〃 〃	有蓋高坏	455	198	239	〃 〃	〃	124
〃 〃	坏	427	197	295	〃 ＋120	〃	121
〃 〃	蓋	386	170	280	〃 〃	〃	106
〃 〃	〃	303	158	200	(No.5)＋70	〃	89
〃 〃	坏	426	234	276	(No.4)＋120	96.00	143
〃 〃	蓋	66	171	〃	〃 〃	〃	〃
〃 〃	坏	301	159	185	(No.5)＋70	95.60	74
〃 山茶碗	皿	692	1057	216	〃 ＋88	95.50	77
〃 〃	皿底部	81	226	216	(No.4)＋135.5	96.00	67
〃 〃	〃	283	933	〃	〃 〃	〃	〃
南方東弥生土器	壷前1	444	359	240	〃 ＋135.5	96.10	101
〃 〃	〃 〃	161～5	〃	245	〃 〃	〃	106
〃 〃	〃 〃	160～1	〃	242	〃 〃	〃	103
〃 〃	〃 〃	368	171	〃	〃 〃	〃	〃
〃 〃	〃 〃	161～4	359	245	〃 〃	〃	106
〃 土師器	こしき（把手）	148	276	225	〃 ＋73	95.80	118
〃 須恵器	壷口縁部	170～3	368	185	〃 〃	〃	78
〃 〃	〃 〃	111	278	182	〃 ＋79	〃	69
〃 〃	〃 〃	147	275	233	〃 ＋73	96.00	146
〃 〃	坏	189	366	220	〃 〃	〃	133
〃 〃	蓋	173	〃	230	〃 〃	〃	143
〃 〃	坏	170～1 170～2	368	228	〃 〃	〃	141
〃 〃	〃	273	838	〃	〃 〃	〃	〃
〃 〃	〃	219～2	709	〃	〃 〃	〃	〃
〃 〃	〃	146	276	250	〃 〃	95.80	143
〃 〃	〃	4	375	248	〃 〃	〃	141

第2表の3

分類 遺跡名・種別	遺物名	遺物No.	G No.	レベル	BM ±	表土標高	表土よりの位置（深サ）
南方東　須恵器	坏	221	754	189cm	(No.2)＋101cm	96.55m	59cm
〃　〃	〃	155	276	190	(No.4)＋79	96.00	98
〃　〃	壷底部	158	276	250	〃　＋73	〃	164
〃　〃	円面硯	191	402	235	〃　〃	〃	149
〃　〃	蓋	168	367	233	〃　〃	〃	147
〃　〃	坏	173	366	226	〃　〃	〃	140
〃　〃	蓋	216	728	208	(No.2)＋103	96.49	70
〃　〃	〃	169	354	〃	〃　〃	〃	〃
〃　〃	〃	155～156	276～275	〃	〃　〃	〃	〃
〃　〃	坏	215	728	209	〃　〃	〃	72
〃　〃	甕底部	177	366	227	(No.4)＋135.5	96.10	88
〃　〃	蓋	163	368	〃	〃　〃	〃	〃
〃　〃	〃	131	267	216	〃　＋79	96.30	153
〃　〃	甕底部	105	249	118	〃　＋62.5	〃	72
〃　〃	〃口縁部	131	267	216	〃　＋79	〃	153
南方　土師器	甕S字状口縁部	137～13	114	168	(No.2)＋76	〃	39
〃　〃	〃　〃	137～16	114	170	〃　〃	〃	41
〃　〃	〃　〃	137～14	114	172	〃　〃	〃	43
〃　〃	〃　〃	137～22	114	169	〃　〃	〃	40
〃　〃	台	131～1	114	170	〃　〃	〃	41
〃　〃	〃	138～1	216	〃	〃　〃	〃	〃
〃　〃	〃	61～21	111	〃	〃　〃	〃	〃
〃　〃	坏脚	64～1	111	169	〃　〃	〃	40
〃　〃	〃	54～1	100	〃	〃　〃	〃	〃
〃　〃	器台	137～5	114	〃	〃　〃	〃	〃
〃　〃	坏脚	137～6	114	〃	〃　〃	〃	〃
〃　〃	高坏	137～3	114	〃	〃　〃	〃	〃
〃　須恵器	壷口縁部	126～1.3	223	168	〃　〃	〃	39
〃　〃	碗底部	104～1	135	〃	〃　〃	〃	〃
〃　〃	坏	104～2	〃	〃	〃　〃	〃	〃
川崎　石器	抉入磨製石斧完形	638～1	1059	204	(No.5)＋81	95.50	72
〃　〃	〃　刃部	637	1068	204	〃　〃	〃	〃
〃　〃	〃　基部	871	129	218	〃　＋70	95.64	112
〃　〃	蛤刃磨製石斧	183～1	123	188	〃　＋79	〃	72
〃　〃	〃　基部	693	1060	239	〃　＋75	95.50	114
〃　〃	〃　〃	754	1059	198	〃　〃	〃	72
〃　〃	〃	1197	1076	205	〃　＋60	〃	94
〃　〃	〃	1180	1058	207	〃　〃	〃	96
〃　〃	扁平片刃石斧	524	1087	214	〃　〃	95.10	64
〃　〃	〃	816	1062	125	〃　＋63	95.48	10
〃　〃	〃	1182	1064	195	〃　＋60	95.50	84

第2表の4

分類 / 遺跡名・種別	遺物名	遺物No.	G No.	レベル	BM ±	表土標高	表土よりの位置（深サ）
川崎石器	扁平片刃石斧	57	71	165cm	(No.5)＋88cm	95.67m	43cm
〃 〃	打製石斧	1171	1061	231	〃 ＋60	95.49	119
〃 〃	〃	1166	1066	230	〃 ＋67	95.50	112
〃 〃	石鏃	1160～1	1057	185	〃 ＋67	〃	67
〃 〃	〃	1137～2	1060	238	〃 ＋68	95.49	118
〃 〃	〃	1165	1062	176	〃 ＋67	95.48	56
〃 〃	〃	1137～1	1060	238	〃 ＋68	95.49	118
〃 〃	〃	1168	1056	177	〃 ＋67	95.50	59
〃 〃	〃	1181	1052	212	〃 ＋60	〃	101
〃 〃	〃	1160～2	1057	185	〃 ＋67	〃	67
〃 〃	石錘	307	158	133,5	〃 ＋70	〃	131
〃 〃	打製石器	859	138	212	〃 ＋74	95.50	87
〃 〃	打石器	789	1057	190	〃 ＋75	〃	64
〃 〃	〃	1307	1058	188	〃 ＋77	〃	60
〃 〃	剝片石器	779	1057	218	〃 ＋75	〃	92
〃 〃	〃	1176	1052	165	〃 ＋60	〃	54
〃 〃	〃	17	7	120	〃 〃	95.65	24
〃 〃	くぼみ石	1177	1069	141	〃 〃	95.50	30
〃 〃	乳棒状石器	877	1060	220	〃 ＋70	95.49	98
〃 〃	砥石	1306	1064	178	〃 ＋77	〃	49
南方東石器	〃	214	736	187	(No.2)＋103	96.49	50
〃 〃	〃	291	275	214	〃 ＋102	96.06	35
南方 〃	〃	129	114	187,5	〃 ＋76	96.30	58
〃 〃	〃	12	88	166	〃 ＋75	〃	38
〃 〃	〃	128	114	175	〃 ＋76	〃	46
川崎木器	丸木弓	636	1065	228	(No.5)＋81	95.50	96
〃 〃	梯子	352	180	247	(No.4)＋66	95.65	132
〃 〃	木鉢	1202	1051	198	〃 ＋73	95.62	73
〃 〃	木面	713	1059	260	(No.5)＋75	95.50	134
〃 〃	平鍬	659	1059	274	〃 ＋81	〃	142
〃 〃	〃	1203	1051	205	〃 ＋67	〃	87
〃 〃	〃	1237	1058	210	〃 〃	〃	92
〃 〃	〃	1209	1065	238	〃 ＋68	〃	119
〃 〃	〃 未製品	696	1059	243	〃 ＋75	〃	117
〃 〃	〃	1207	1067	232	〃 ＋68	〃	113
〃 〃	〃	1216	1065	240	〃 ＋81	〃	108
〃 〃	狭鍬	799	1068	226	〃 ＋75	〃	100
〃 〃	農具	523	1081	197	〃 ＋60	95.14	50
〃 〃	漁具柄	1267	1058	212	〃 ＋77	95.50	84
〃 〃	石斧柄	1214	1076	223	〃 ＋60	〃	112
〃 〃	織機具	791	1061	228	〃 ＋75	95.49	101

第2表の5

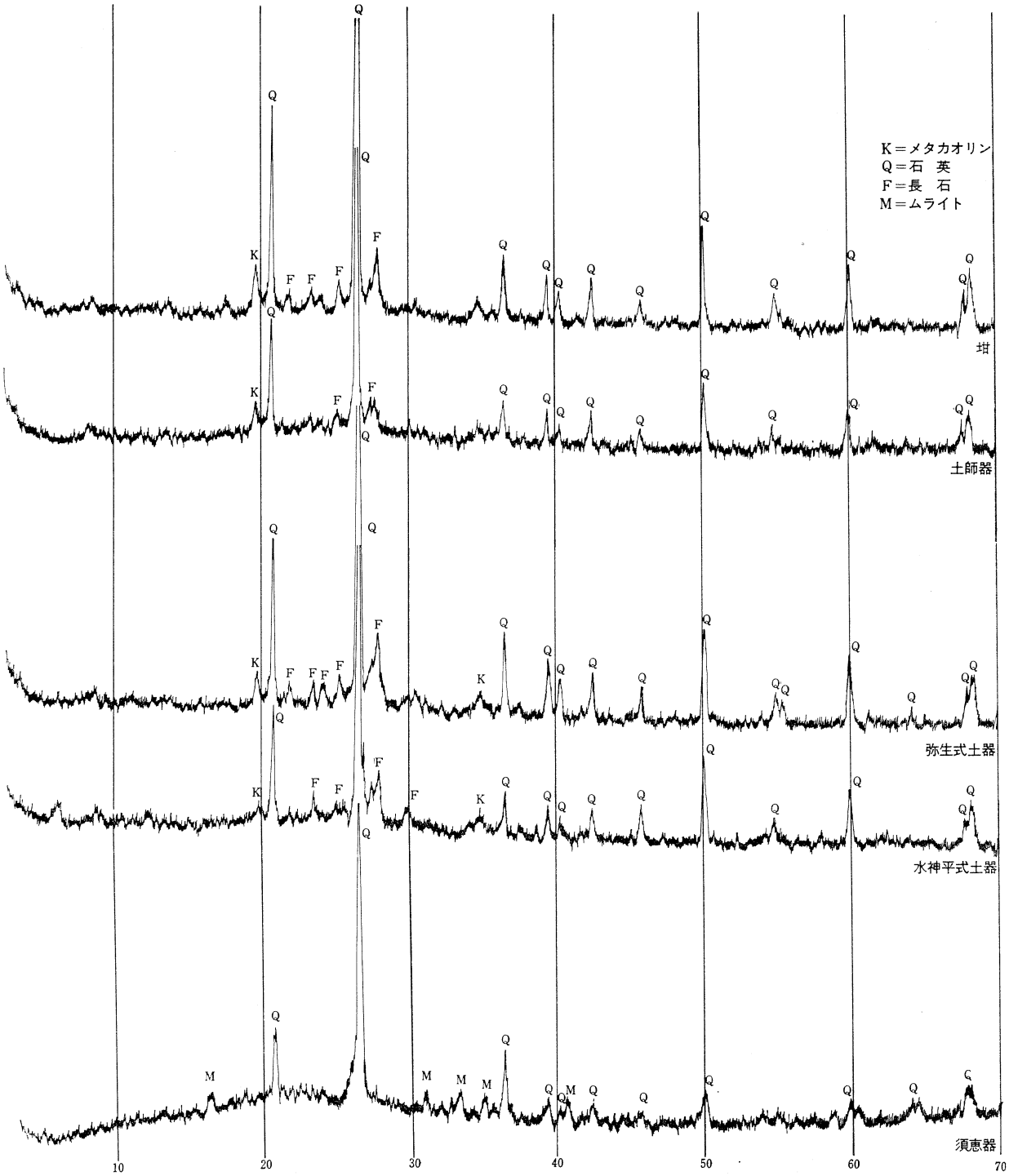
分類 / 遺跡名・種別	遺物名	遺物No.	G No.	レベル	BM ±	表土標高	表土よりの位置（深サ）
川崎木器	織機具	1217	1068	210cm	(No.5)＋60cm	95.50m	99cm
〃 〃	〃	351	223	156	(No.4)＋66	95.58	47
〃 〃	膝	815	1061	230	(No.5)＋75	95.49	103
〃 〃	木具	635	1069	245	〃 ＋81	95.50	113
〃 〃	〃	486	207	158	(No.4)＋61	95.62	45

出土土器片のX線回折について

X線回折の結果をみると，試験片5点の内，坩・土師式土器・弥生式土器・水神平式土器は何れも原料中に含まれている石英・長石がそのまま存在し，原土中のメタカオリンが脱水程度のまま含有されていることを示している。

須恵器は，窯窯をもちいて焼成火度の上昇を計ったため1100℃以上の焼成によって発生が認められるムライトが存在している。（古川）

挿図60　X　線　回　折　図



V 結　　語

長浜市を中心とした，扇状地性沖積平野の微高地に現在の集落が発達しているが，遺跡，遺物の出土地点の位置が必ずしも現地形における微高地とはいえない。これは永い年月における姉川水系を中心とした幾多の濫乱による地形の変革及び水田開拓等による変化を見逃すことはできないのである。その例として明治初年の村絵図に見られる如く，馬車道の北の地点に蛇行した溝が知られる。また兵助の森の南の部分が荒地になっているが，水田になったのはあまり古い時代ではなく，まだ一部分は畑地として残存している様な現状であった。自然的，人工的に永い歴史の中に変遷をし，現在の水田地帯の一部分として形成されて来たのである。発掘の結果によってもそれを知る事が出来た。これ等の変遷は南方東，南方の地点においても同様であったと言える。

先ず川崎遺跡について，綜括的に考察すると，遺物，遺構の出土地点は，兵助の森の南の地点（第１地点）と馬車道北（第２地点）の２地点に大別する事が出来る。第１地点は汁田と呼ばれる湿田であり，近年になって開田されたと言われる如く，地下水が著るしく湧き出る地点であって，発掘時の所見によっても，葦等が繁茂していた状態が知られると共に流木（小枝等）も認められた。その中に遺物も混在していた。沼地を示す地点であった。この沼地の南面の砂礫層の地点に小形の坩，高坏等がほぼ同一レベルより出土している点などから，あるいは沼のほとりで祭祀が行なわれたのではなかろうかと推察される。また北面の砂礫層が微高していく地点に，柱と推定されるものの残存が二本認められ，その他痕跡が一カ所知られたが，これに伴なう資料がないのと，そのプラン等も明確でないので時代を推定する事は困難である。

さて，第１地点を中心として出土した遺物は，土師器，須恵器が出土している。土師器と須恵器とは同一時期ではなく，そこには時期的差が認められる。須恵器は７世紀頃のものが主である。その他，木器類も前述の如く出土している。その他，天目茶碗の破片など陶器片，獣骨類なども出土している。中でも馬の門歯など新しい時代（洋種系）の遺物などが伴出している事によっても，[註1] この地点が沼状を示していた事が知られる。次に第２地点では，前述の如く大井川の蛇行する事が知られる地点であり，湿潤でどぶ川の如き状態であったと考えられる。この地点の黒褐色粘土層で遺物の大半を出土している，この部分の一部に杭状の残存遺構が発見されたが，この杭状遺構が，遺物中特に弥生式時代の遺構であるとする事は至難である。またこの地点に向かって北方約50mの微高地より砂層の流れが認められた。この微高地の地点にピット状の遺構が一カ所認められた。また水田のあぜの下の部分に土器片（弥生式）などが残存していた。当時この地点が微高地を形成し，随って生活面であったと推察され，それ以降あるいは開田，洪水等によって変遷を来たしたのであろう。この地点の遺物は，縄文土器片，弥生式土器，山茶碗などと少量の陶磁器破片，石器類，木器類，自然遺物などが出土している。先述した如く縄文式土器は，少量で文様も明瞭でないが，中期初頭，後期，晩期のものと考えられる。弥生式土器は東海地方にその分布の主体を置く，水神平式土器が少量であるが認められる。第１様式の古い段階から，新しい段階に至る遺物を主体として出土している。[註2] 若干ではあるが中期の土器片も見られる。中でも第１様式中に見られる布目圧痕文のものが若干出土している事は注意すべきである。石器は少量の出土であるが，抉入磨製石斧の完形品と破片が出土している。完形品はこの類の石器では優品である。木器は保存状態の良いものが出土している。中でも弓の巻飾の明瞭な点は注目すべきものである。さて，木器の保存は湿潤であったどぶ川の如き処にあって可能であったと考えられる。[註3] 自然遺物としては，籾炭化物が出土している。これは木器類中に焦げたものがかなり見られる点と合わせて考察すると，あるいは火災に合ったものを廃棄したものではなかろうかと推察される。

次に，南方東遺跡に於いては弥生式前期の少量の土器と須恵器の出土を見たが，これは川崎遺跡の第１地点の隣接地点であり，川崎遺跡の第１地点と同様の性格と見るべきである。

南方遺跡は遺物の包含層も浅く遺物も少破片であり少量の古式土師式土器と須恵器片の出土を見たのみである。以上の様な結果を得たのである。

註１　京都大学理学部動物学研究室田隅本生先生の教示による。

註２　佐原　真 第１様式壷変遷模式図参照

註３　後藤守一 瓜郷随想「瓜郷」豊橋市教育委員会 1963

発　掘　日　誌　抄

昭和45年8月24日　川崎，南方東，南方の3遺跡の発掘調査を滋賀県教育委員会より依頼あり。長浜市教育委員会職員視察。

9月4日　滋賀県教育委員会文化財保護課（丸川竜平技師），長浜市教育委員会，市建設課職員による遺跡の事前踏査を行なう。

9月14日　県教育委員会文化財保護課（井上佐助文化財保護課長・高橋曽一文化財保護係長），長浜市教育委員会職員と会議を行なう。

10月20日　関西大学柴田実教授，長浜市長，助役，国道事務所，市教育委員会，市建設課職員会議を行なう。3遺跡踏査のあと，京都大学柴田実教授，中村林一氏，長浜市教育委員会職員で発掘調査計画等に就き協議。

10月29日　関西大学網干善教助教授，滋賀県教育委員会文化財保護課（大機俊一郎課長補佐・高橋曽一係長），長浜市教育委員会職員による事前協議。

11月21日　大江命が発掘調査団長に依頼され，3遺跡踏査のあと事前協議をもつ。その結果調査開始は12月4日と決定。

12月1日　川崎，南方東遺跡測量，杭打ち作業開始。

発　掘　経　過

12月3日　大江命，滋賀県教育委員会文化財保護課，大機俊一郎課長補佐，川那辺正雄主事現場視察。

12月4日　G設定，東西の側溝を掘る。

12月7日　G№177まで調査，弥生式土器高坏脚部，甕口縁部，壺の破片出土。

12月8日　東西の側溝を更に北へ延長する。滋賀県文化財保護課職員（大機俊一郎文化財保護課長補佐）発掘状況視察。

12月12日　G№605より暗渠発見，籾らしい炭化物出土。

12月13日　G№564より須恵器片，G№523より弥生式土器片出土。いずれも地表下50cm～100cmの砂層より出土であった。

またG№664よりうるし塗りの小木片出土。

12月15日　G№123～125及びその周辺を掘下げ再調査。兵助の森東側のG掘下げ，砥石・甑片・高坏・土器小片出土。

12月16日　G№123より高坏上部・高坏半完形・壺口縁部・甑片・磨製石斧出土。G№124より高坏片・甕・甕は復原可能。

12月17日　G№267より須恵器蓋・底部，G№143より須恵器皿完形，G№249より土師器片・須恵器片出土。この周辺約2mまで掘下げる。

12月18～20日　G№125より高坏完形品・壺完形品，G№141より木椀，周辺より甑片・皿・甕の口縁部・底部の他土器片多数出土。また打石器・石錘等の石器類の出土も見た。G№204．213を掘下げる。

12月21日　G№180より木製梯子，その周辺より木器の破片・甕及び土器片多数出土す。

12月22日　県教育委員会文化財保護課職員（井上佐助課長・高橋曽一係長）発掘状況視察。

12月22～25日　G№207より口径21cm，高さ37cm，胴部直径37cmの復元可能の甕出土。関西大学網干善教助教授視察。以後の発掘につき指示を受ける。

12月26日　発掘現場整頓，本日を以て年末の為め発掘作業休止。

昭和46年1月8日　発掘調査再開，1月19日柴田実教授現場視察。現在までを検討し向後の発掘につき指導を受く。

1月20日　川崎遺跡，大井川より南部の発掘を進め，G№1059より抉入磨製石斧，G№1065より巻飾りのある丸木弓出土，その他周辺より弥生式前期の土器片多数出土，遺物の包含層は表土下50cmよりはじまり150～180cmに及ぶ。

1月21日　滋賀県文化財保護課（大機俊一郎課長補佐・丸山竜平技師）現場及出土遺物視察。

1月22日　G№1060より扶入磨製石斧刃部，G№1059より平鍬出土，黒色有機物土層より弥生式土器片多数出土す，東西，南北の各セクションをとる。

1月24日　南方遺跡の平面実測をする。

1月26日　川崎，南方東両遺跡の発掘調査一応終了。

1月27日　南方遺跡の発掘調査を開始，2月21日にて終わる。この間降雪のため作業不能の日も多く，出土品の実測，土器復元作業，土器片洗い，整理分類，遺物No.の記入等の作業をなす。2月20日南方遺跡G№97にある江戸時代の古井戸の調査をす。

2月24日　川崎遺跡南部の発掘調査再開，滋賀県文化財保護課職員（大機後一郎課長補佐・中谷雅治技師）発掘状況視察，G№1056～1078より丸木弓・平鏃・砥石・蛤刃磨製石斧・石鏃・くぼみ石・スクレイパー・壺完形品出土。特にG№1075～1081より多数土器片の出土を見た。

2月28日　全調査員3遺跡視察後，長浜公民館に於て発掘調査事務局職員を混えて発掘調査報告書の作成執筆分担等につき協議。

3月2日　本日を以て3遺跡の発掘調査を一応終了す。

3月16日　発掘終了後の処理，出土遺物の整理等につき発掘調査団，滋賀県文化財保護課職員（井上佐助課長・大機俊一郎課長補佐・高橋勇一係長），長浜市教育委員会職員にて合同会議を行なう。

3月3日より出土遺物の整理，実測，写真撮影，遺物№記入，分類等を行ない，また用排水路の復旧作業も行なう。発掘調査事務所に通ずる南北の通路脇を一部掘下げて発掘済み地点との関連を調査す。3月30・31日この地点を埋戻しをなし，これを以て全作業を終了す。　（松　田）

調　査　団　名　簿

○　本調査の調査団の構成は，次に示す通りである。

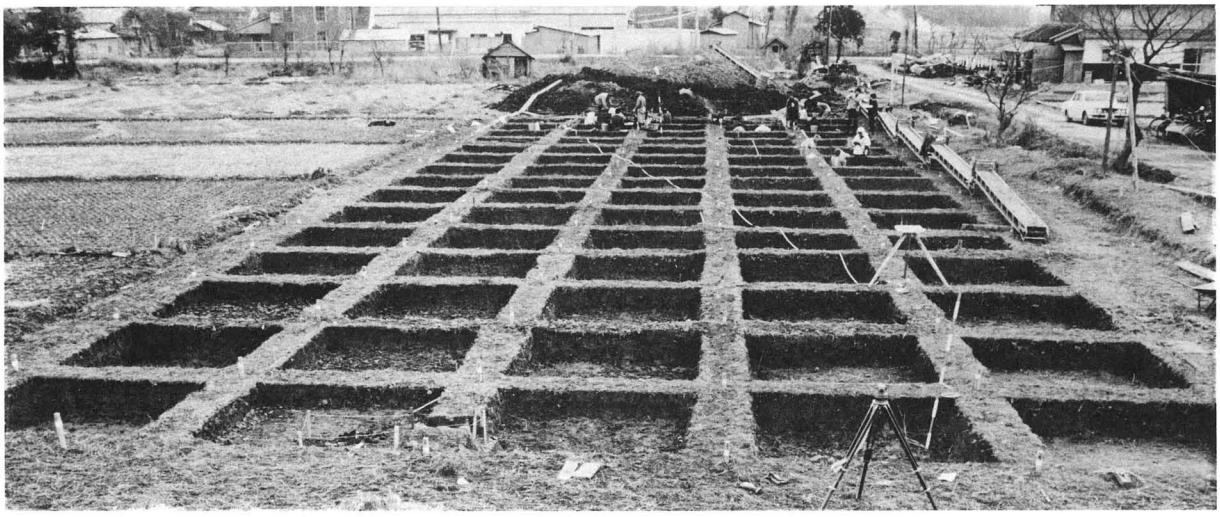
調査団構成

団長	日本考古学協会員	大江　爺	
調査員	県文化財保護課	川那辺　正雄	
〃	岐阜県考古学会員	松田　典夫	
〃	〃	田口　昭二	
〃	〃	鹿野　健	
〃	〃	古川　庄作	
補助調査員	河崎顕司	河合正博	中山久代
事務局	長浜市教育委員会		
	長浜市教育委員会	岩崎　良七	
	長浜市内各公民館職員		
作業協力者	吉井安平	吉井とも子	河端初江
	吉井みよ子	吉井　聖	高山　猪
	中川謙二	木村喜蔵	木村まつえ
	広部増三	川瀬　亘	川瀬宗雄
	国友健蔵	西嶋伝平	村田専蔵
	福永春三	金沢慶一	金沢　繁
	岩越清二	長場政雄	徳田良夫
	浅山　勇	小幡作之進	小幡光子
	坂東伊織	坂東澄江	田中　治
	沢村荘太郎	中川良蔵	籔内清沙久
	徳田宗次	石地捨雄	金沢道夫
	小川　実	角川一麿	小川甚平
	小川正幸	小川武治	小川佐近
	小川順一	川村悦二郎	箕浦捨一
	加藤四郎	水森与嗣雄	水森とも子
	堀内寿恵子	堀内みえ	清水利枝
	中村キクエ	井関　一	（順不同）

図　　版

1

2



3

1.　発掘調査以前の川崎遺跡及び南方東遺跡遠景　　2. 3.　同遺跡の発掘調査状況

1

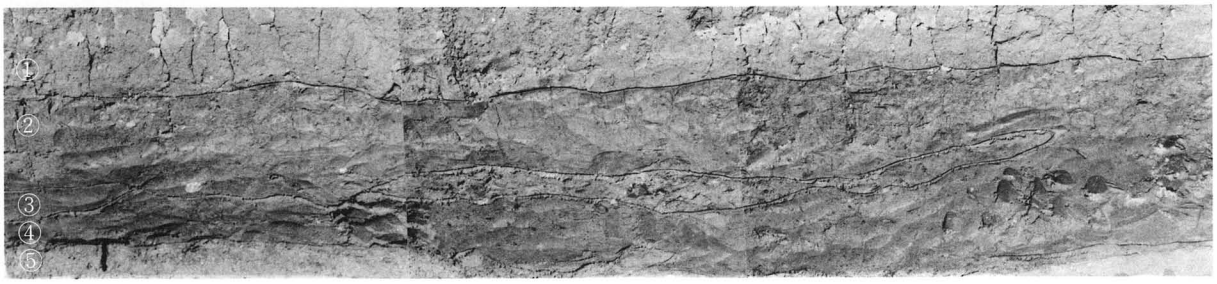
発掘調査以前の南方遺跡遠景

2

同遺跡発掘調査の状況

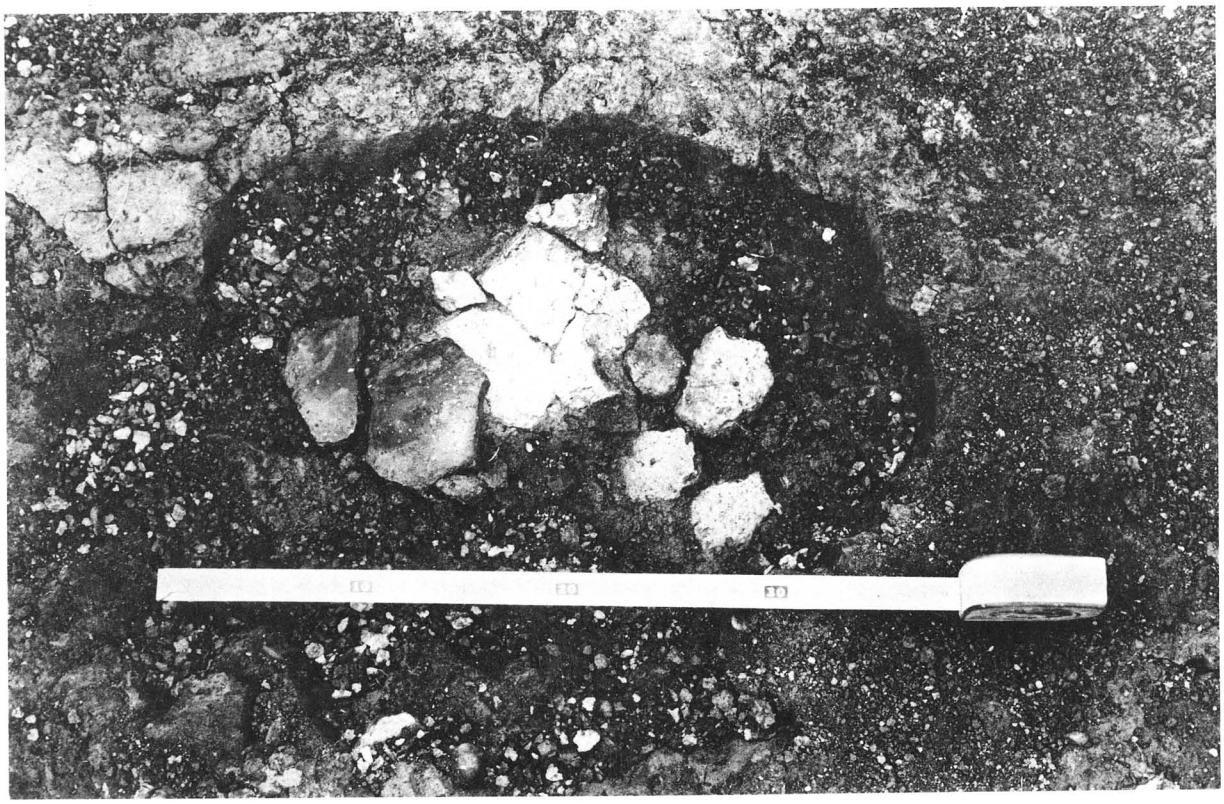
1

2



3

1. 南方東遺跡G 402の東面層序（耕作土層の下部が青色粘土層となる）
2. G1061（hの138・139）土器の出土状態
3. G1059～G1060北壁における層序　①耕作土 ②黒色含粘土質 ③黄褐色粘土層 ④有機物層 ⑤砂礫層

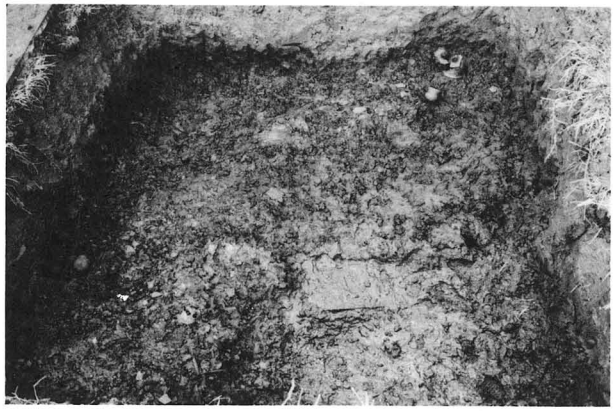


1

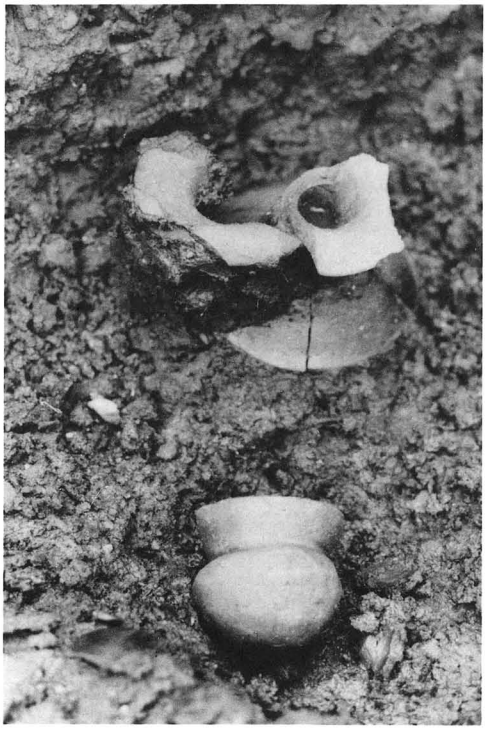
川　崎　遺　跡　G 990（hの126・127）ピット

2

川　崎　遺　跡　G1060（hの138・139）土器出土状態



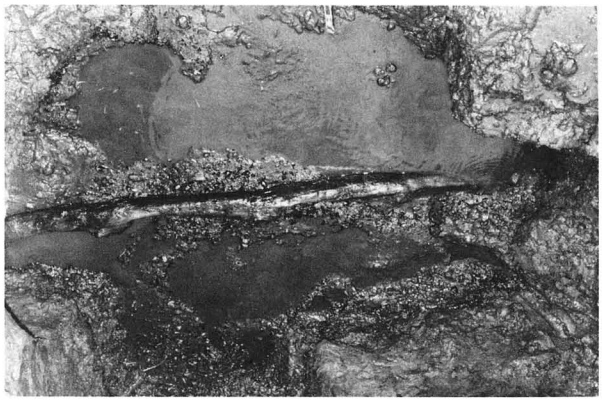
1



2

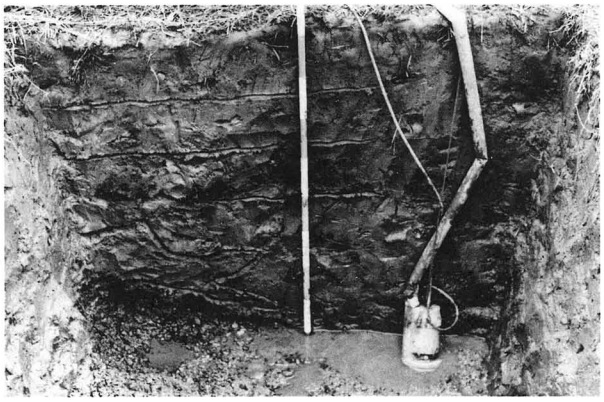
3

1.2.3.川崎遺跡 G 125（hの13・14）
における出土状態



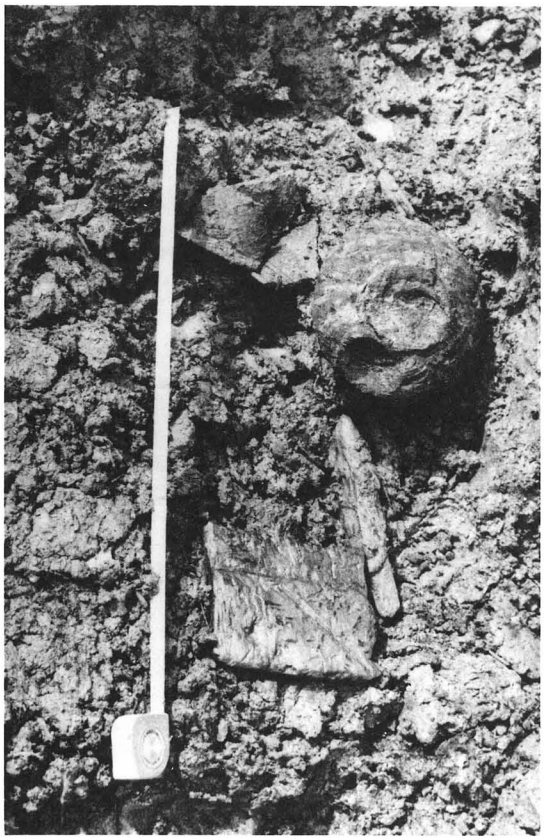
4

川崎遺跡 G 180（ｉの19・20）における梯子出土状態

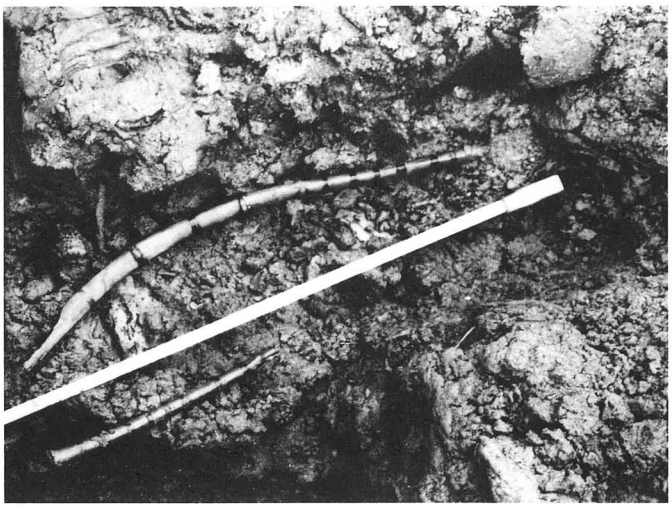


5

川崎遺跡 G 203（ｆの22・23）の層序



G1051（*i* の136・137）平鍬　木鉢

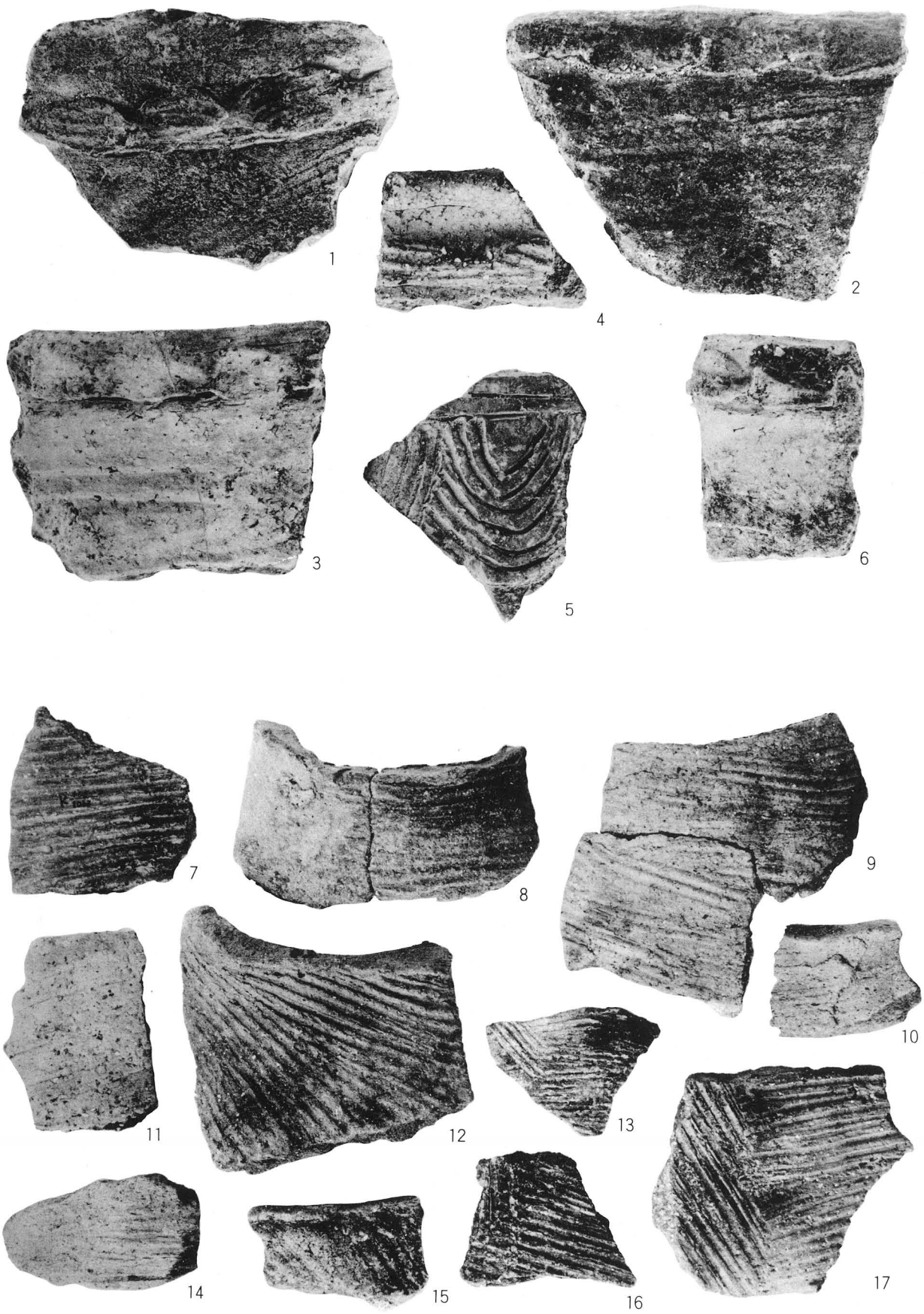


G1065（*e* の139・140）　弓

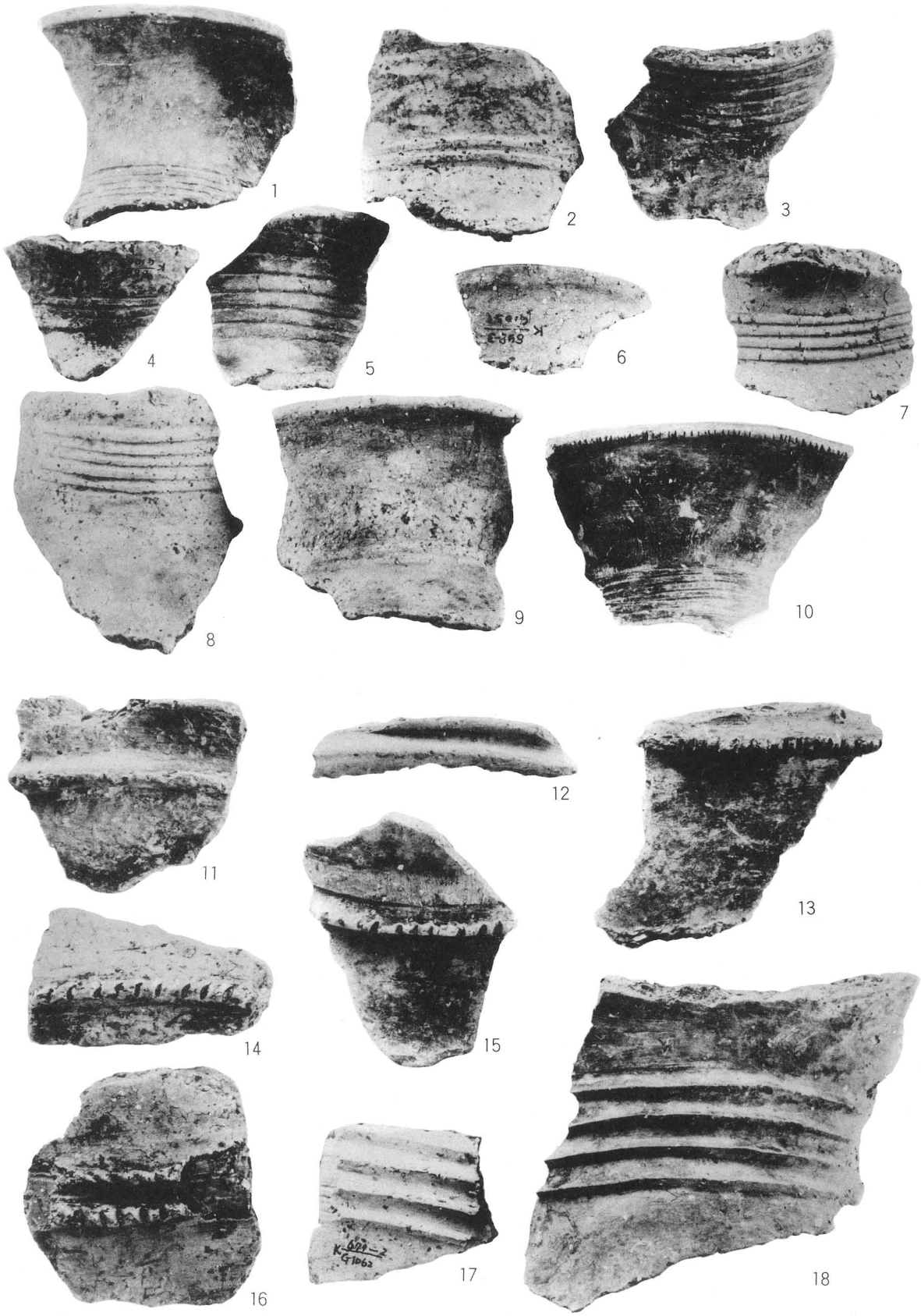
G1059（*e* の138・139）抉入磨製石斧

G1061（*g* の137・138）土　器

川　崎　遺　跡　の　出　土　状　態



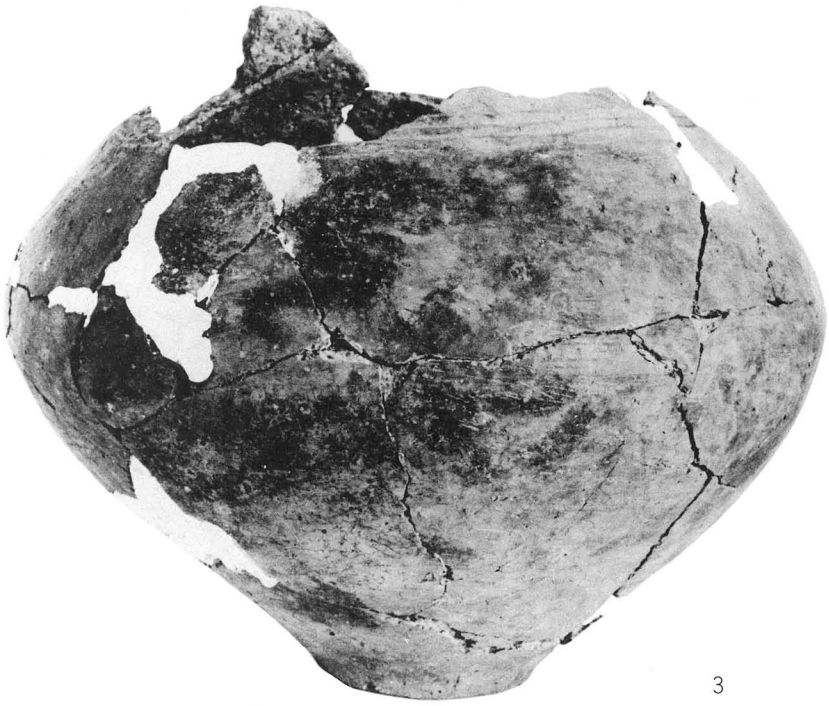
川崎遺跡出土の弥生式土器その他



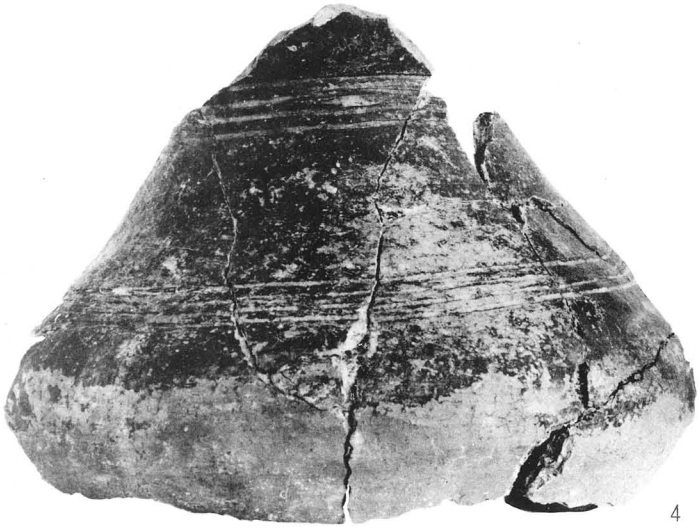
川崎遺跡出土の弥生式土器

1

2

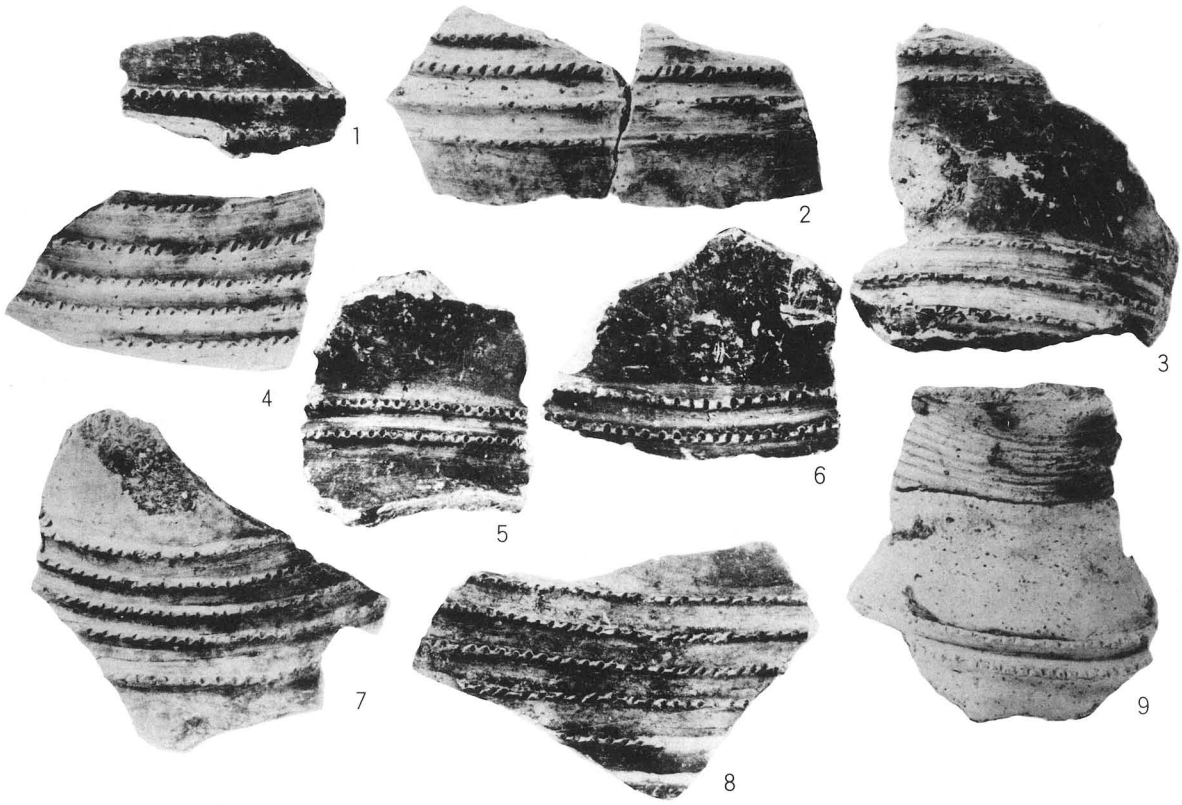


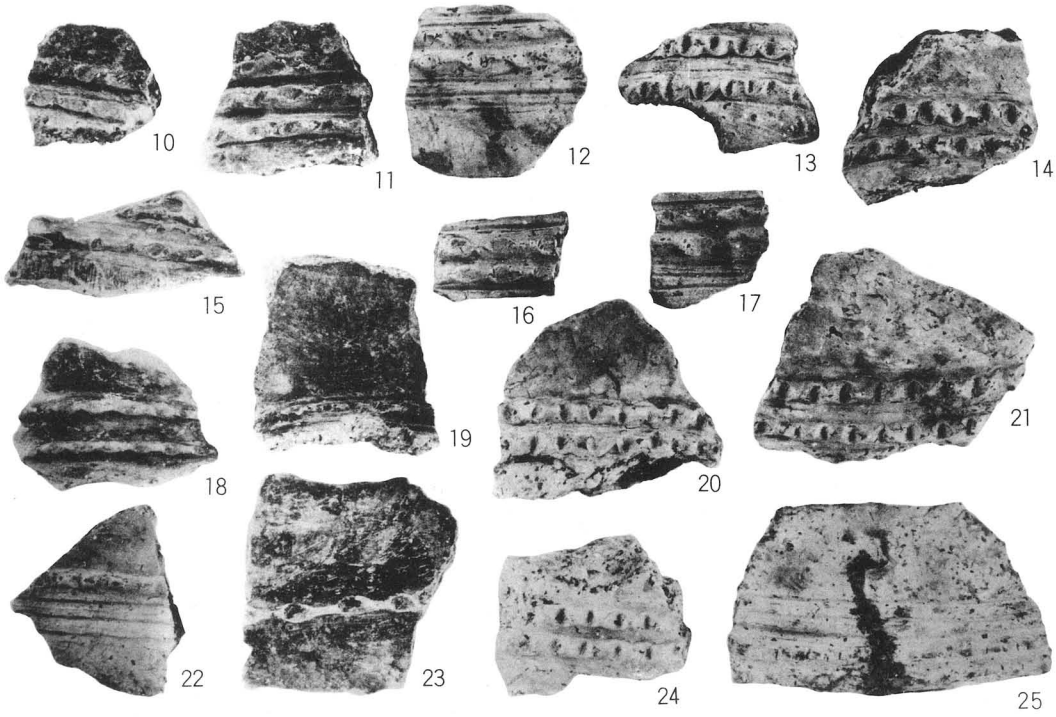
3



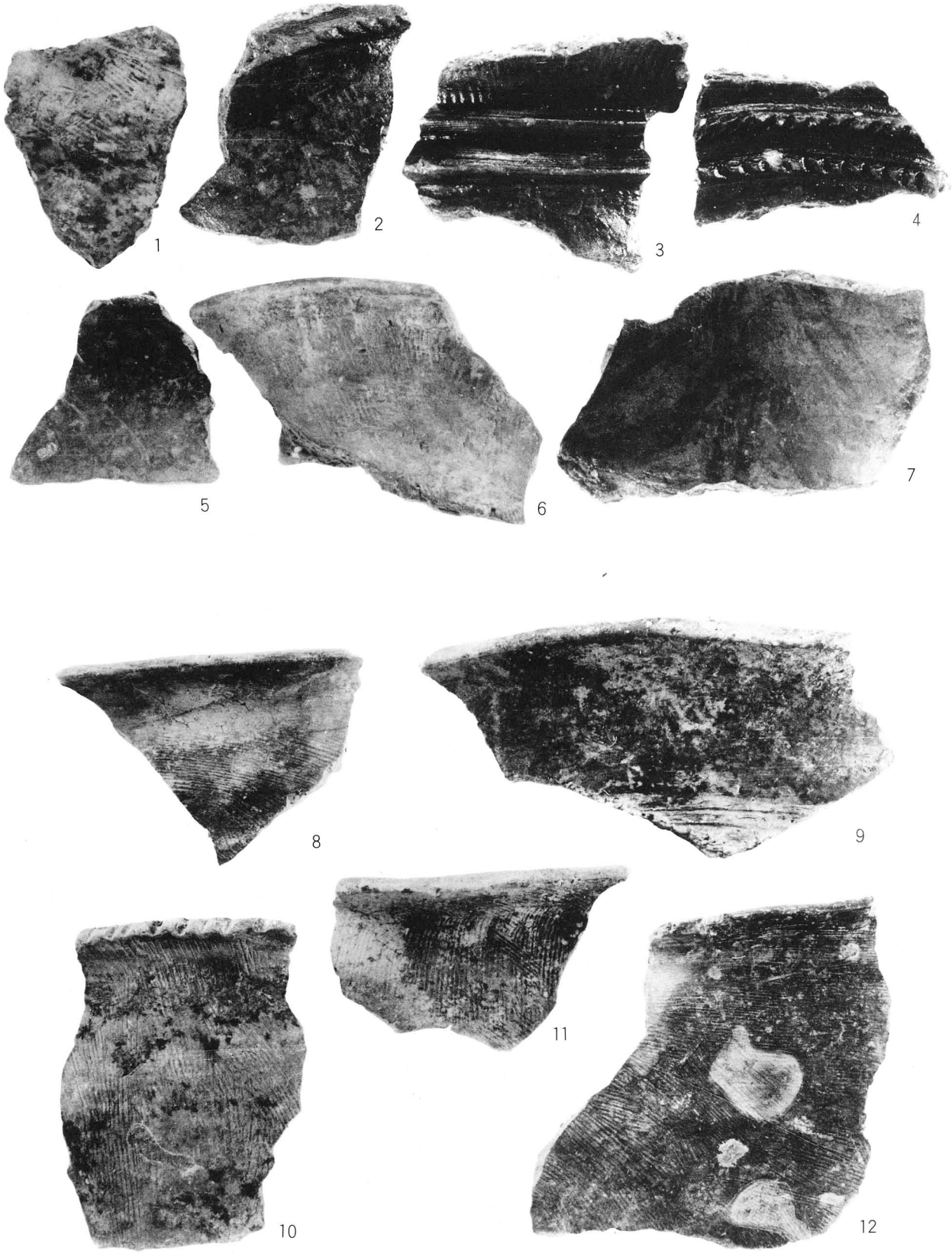
4

川崎遺跡出土の弥生式土器（1.2.4）
南方東遺跡出土（3）

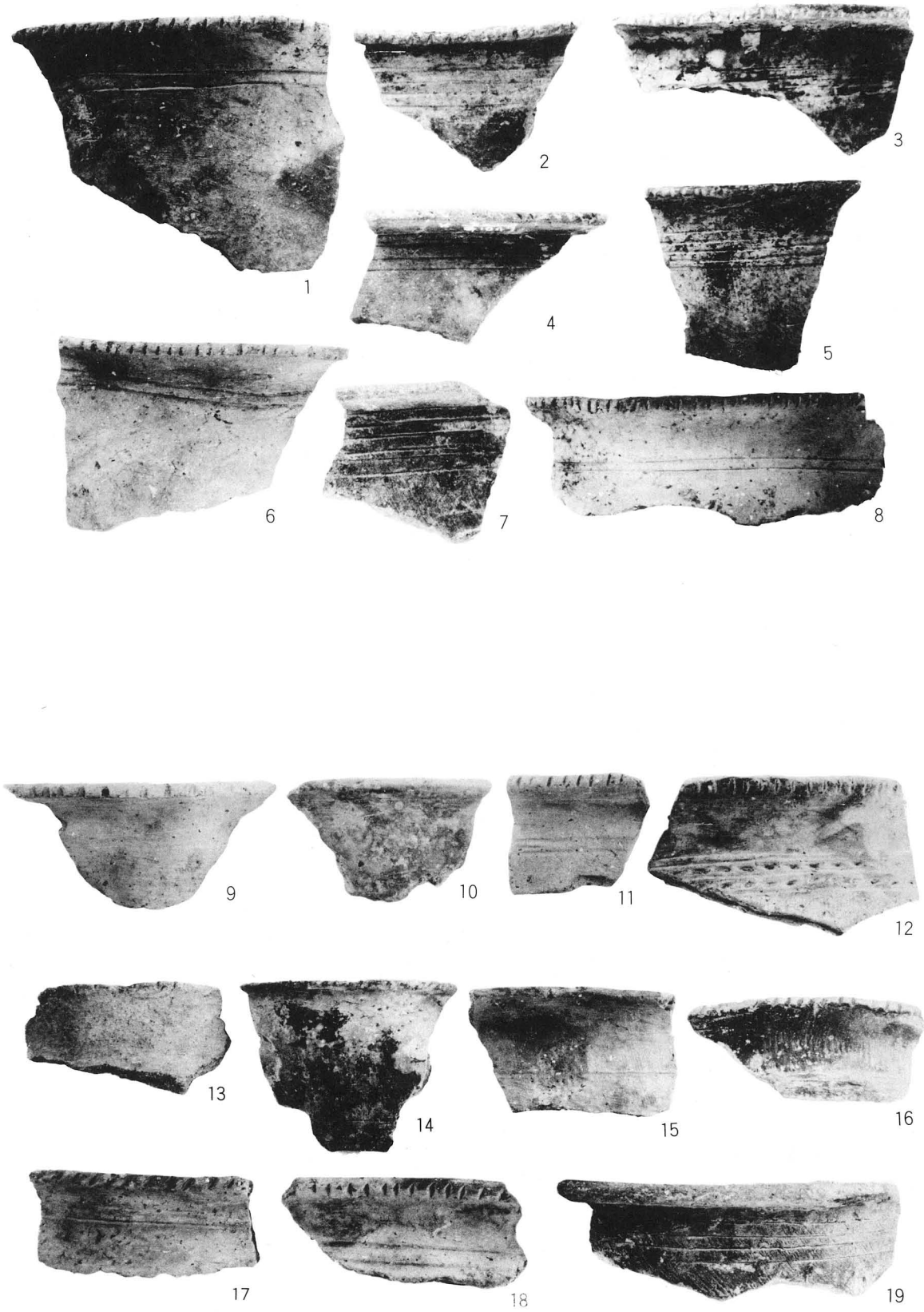




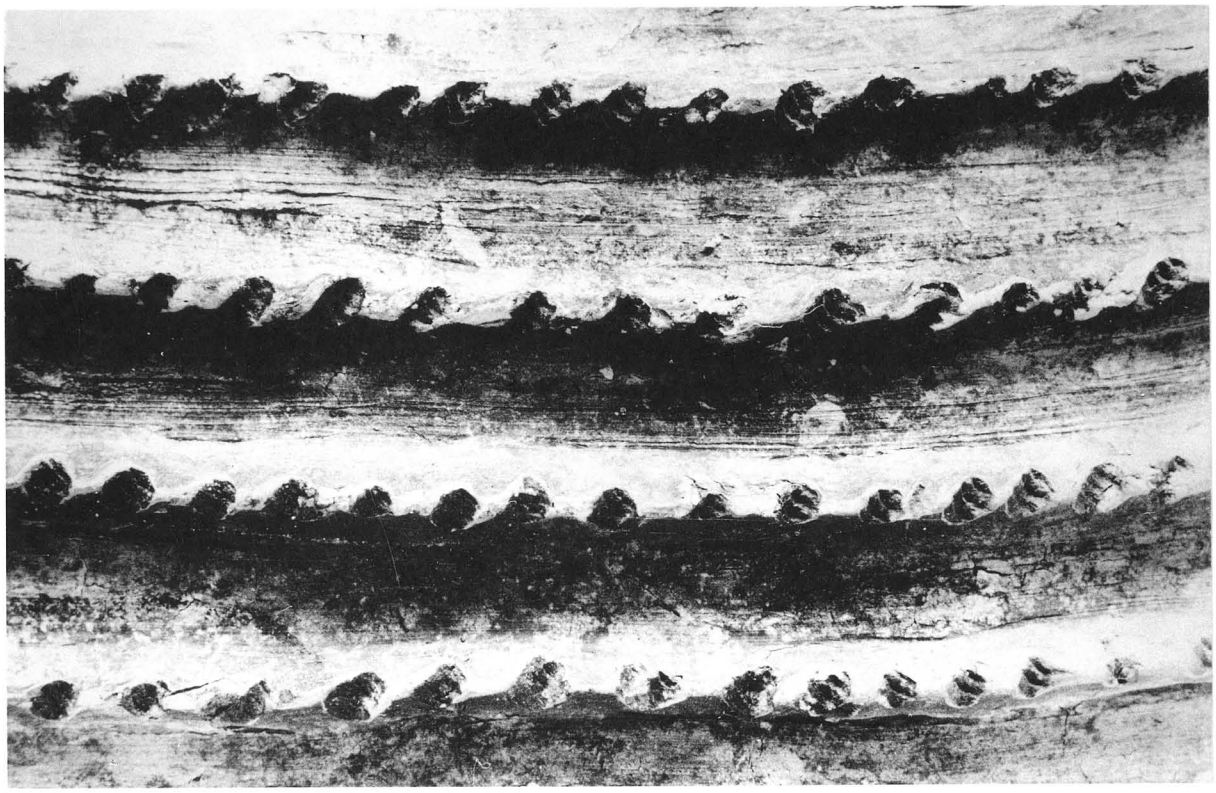
川崎遺跡出土の弥生式土器



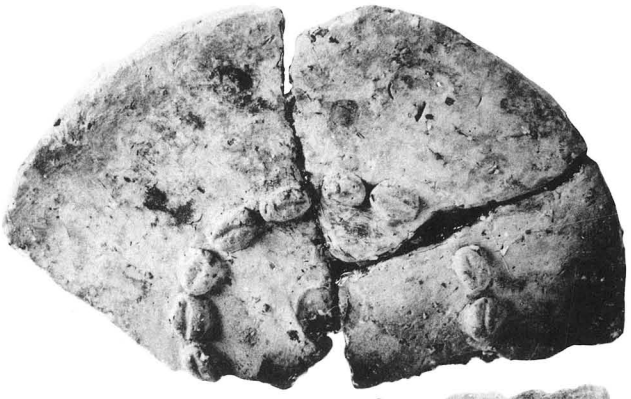
川崎遺跡出土の弥生式土器　（1.～4.　彩色土器）



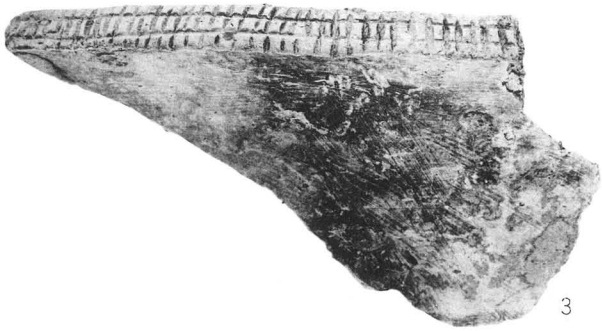
川崎遺跡出土の弥生式土器



1



2

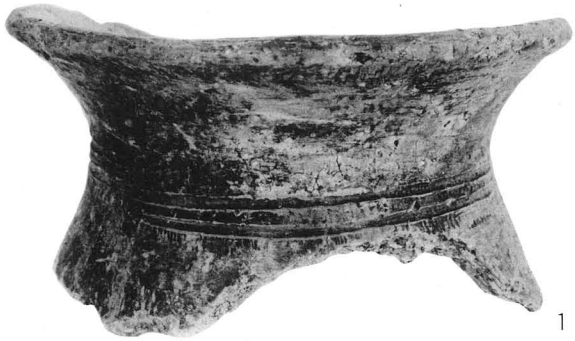


3

5

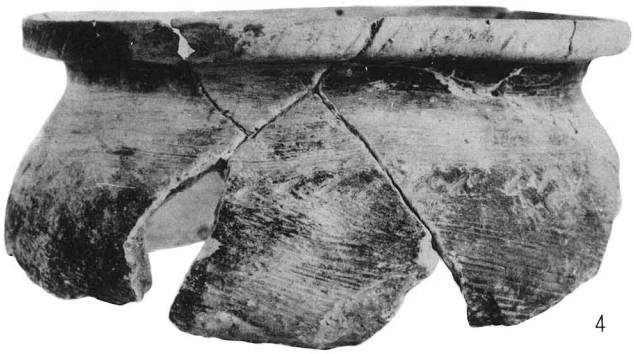
4

上は川崎遺跡出土の土器の拡大写真　1.2.3. 川崎遺跡出土の弥生式土器
4.5. 川崎遺跡出土の土師式土器


1

2

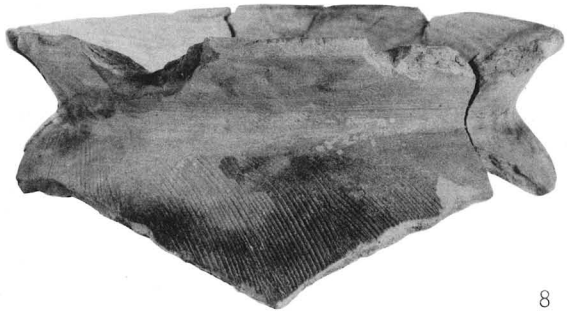
3


4

5

6

7


8

川崎遺跡出土の弥生式土器および土師式土器

1

2

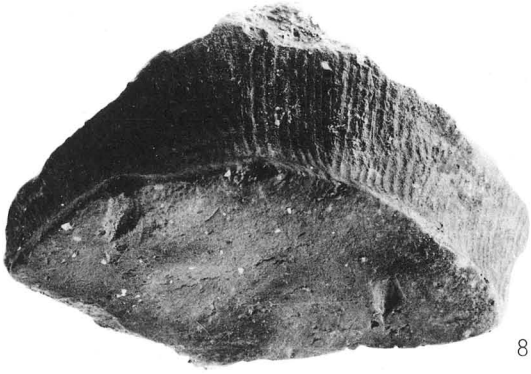
3

4

5

6

7


8

9

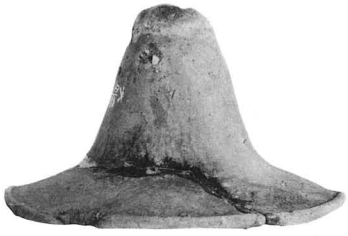
川崎遺跡出土の弥生式土器

1

2

3

4


5

6

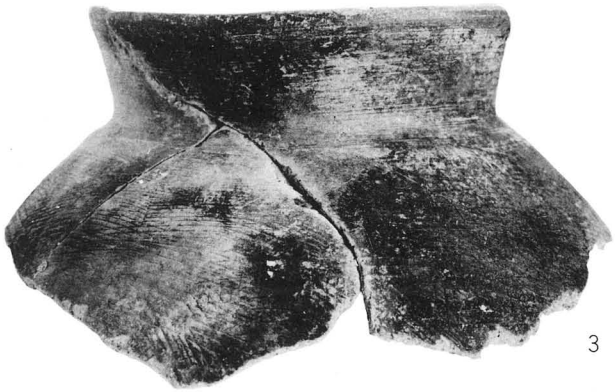
7

8

1.3. ～8. 川崎遺跡出土の高坏形土器　　2. 坏

1

2


3

4

5

6

川崎遺跡出土の土師式土器

1

2

3

4

5

6

7

8

9

川崎遺跡出土の土師式土器

1

2

3

川　崎　遺　跡　出　土　の　須　恵　器

1

円　面　硯

4

坏　　蓋

2

長　頸　部

5

坏

6

坏

3

山　茶　碗

7

脚　　坏

川　崎　遺　跡　出　土　の　須　恵　器
南　方　東　遺　跡

抉　入　磨　製　石　斧

1

2

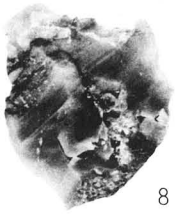
3

4

5

6

7


8

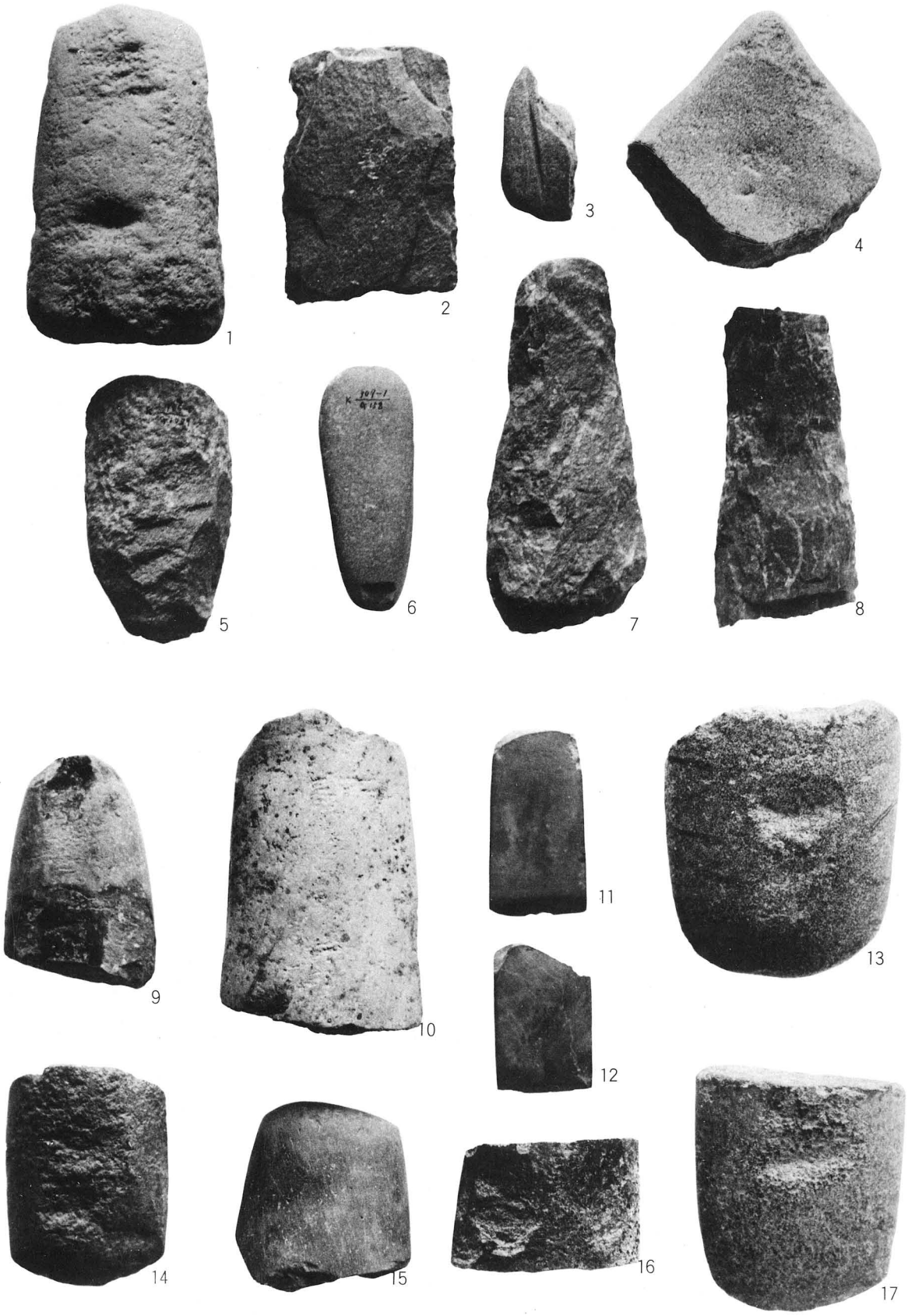
9

10

11

12

川崎遺跡出土の石器　1.～6. 石鏃　7.～10. 剝片石器　11. 12. 扁平片刃石斧



川　崎　遺　跡　出　土　の　石　器

1

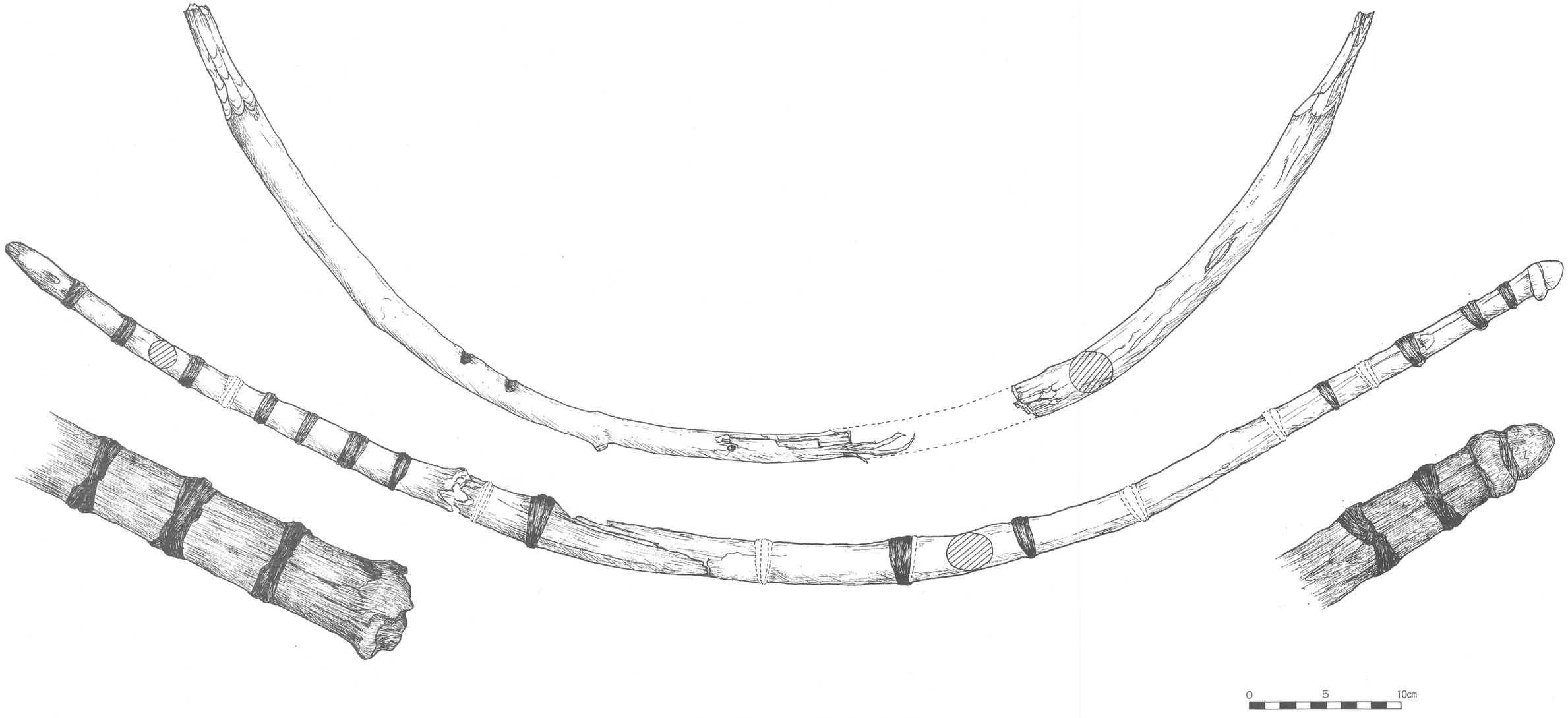
2

3

4

川崎遺跡出土の木器類

川崎遺跡出土の木器類



丸　木　弓・木　器（漁具柄）

左下　丸木弓折損部巻飾側面図（実物大）　中　丸木弓全図　上　木製柄全図（漁具柄）　右下　丸木弓尖端部巻飾側面図（実物大）

昭和46年3月25日 印刷
昭和46年3月28日 発行

国道8号線長浜バイパス
関連遺跡調査報告書

発行所 滋賀県教育委員会
印刷所 一燈園・燈影舎